

千葉市小中台遺跡

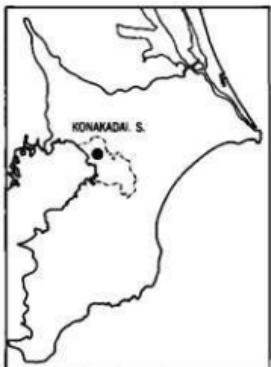
千葉都市計画道路3・4・43号磯辺茂呂町線
建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書2

1 9 8 7

千葉県都市部
財団法人 千葉県文化財センター

千葉市小中台遺跡

千葉都市計画道路3・4・43号磯辺茂呂町線
建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書2



1 9 8 7

千葉県都市部
財団法人 千葉県文化財センター

序 文

房総半島西側の付け根部分に位置する千葉市は、古来豊かな自然環境に恵まれ、多くの先人の生活や活動の跡が歴史的な文化遺産として残されています。

一方、近年の首都圏の拡大に伴う人口の社会増加は、千葉市においてもまた著しいものがあります。なかでも東京湾東岸に広がる埋立地では、学園都市や住宅団地の建設が進められ、交通網の整備が急がれる地域となっております。そこで千葉県では、道路網整備の一環として都市計画道路一磯辺・茂呂町線一の建設を計画しました。

千葉県教育委員会では、路線用地内に所在する埋蔵文化財の取扱いについて、都市部計画課(現街路モノレール課)をはじめ、関係諸機関と慎重に協議を重ねてまいりました。その結果、路線内の遺跡については現状保存が困難なため、発掘調査を事前に実施し、記録保存の措置を講ずることになりました。記録保存に当たっては、当センターが担当することになり、昭和60・61年度に千葉市小中台遺跡の発掘調査を行いました。

調査の結果、小中台遺跡は、先土器時代から近世にかけての複合遺跡であることがわかりました。各時代の遺構内小型貝塚や、縄文時代中期の住居の炉址内灰層から得られた魚介類の遺骸をはじめ、先土器時代の石器群や、検出された遺構及び遺物の数々は、当時の人々の狩猟・漁撈活動や食生活の一端を解明する上で貴重な資料と思われます。

このたび整理作業も終了し、その成果を『千葉市小中台遺跡』として刊行する運びとなりました。本書が学術資料としてはもとより、文化財保護思想の普及のために広く一般の方々に活用されることを望んでやみません。

終りに、発掘調査から報告書の刊行まで、種々御指導いただいた千葉県教育庁文化課をはじめ、千葉県都市部街路モノレール課、地元関係諸機関各位の御協力に御礼申しあげます。また、炎天の現場での調査及び整理に携わっていただいた調査補助員の皆様に心から謝意を表します。

昭和62年1月

財団法人 千葉県文化財センター

理事長 山本 孝也

例　　言

1. 本書は、千葉都市計画道路3・4・43号磯辺・茂呂町線（以下、磯辺・茂呂町線）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査の調査報告書である。
2. 本書は、昭和58年刊行の『千葉市谷津台貝塚』（千葉県都市部、財団法人千葉県文化財センター発行）に続く磯辺・茂呂町線関連の発掘調査報告書の第2集にあたるものである。
3. 本書に所収する内容は、千葉市小中台町524他に所在する小中台遺跡（遺跡コード：201-062）についての発掘調査報告である。
4. 発掘調査は、千葉県都市部計画課（現街路モノレール課）の委託を受け、千葉県教育庁文化課の要請と指導のもとに、財団法人千葉県文化財センターが実施した。
5. 発掘調査及び報告書作成作業の担当職員は次のとおりである。
 - (1)発掘調査（昭和60年度：昭和60年6月1日～9月30日）
調査部長 鈴木道之助、部長補佐 岡川宏道、班長 矢戸三男、調査研究員 大野康弘
 - (2)発掘調査及び報告書作成（昭和61年度：昭和61年6月1日～昭和62年1月31日）
調査部長 鈴木道之助、部長補佐 古内 茂、班長 小宮 孟、調査研究員 山田貴久
6. 本書の執筆は、IV-1(1)を主任調査研究員 田村 隆、(2)を調査研究員 新田浩三、Vを小宮、VIの先土器時代を田村、新田が担当し、それ以外の執筆及び編集は山田が行った。なお、陶磁器の記載については調査研究員 小高春雄から、錢貨については調査研究員 今泉 淳から御教示を得た。
7. 写真撮影は、遺構関係は各発掘担当者が行い、整理作業に伴う遺物撮影は山田が担当した。但し、図版1の航空写真については、昭和61年1月12日、京葉測量株式会社撮影のC23B-7をもとに拡大・編集した。
8. 発掘調査から報告書刊行に至るまで、千葉県教育庁文化課をはじめ、千葉県都市部街路モノレール課及び地元関係諸機関関係者各位、ならびに当センター職員ほか多くの方々から御指導・御助言を賜った。逐一、芳名は列記しないが、深く謝意を表する次第である。

目 次

I. 序章	1
調査に至る経緯と概要	1
II. 遺跡の位置と環境	2
1. 遺跡の位置	2
2. 周辺の主要遺跡	2
3. 層序	5
III. 遺構とその遺物	6
1. 積穴住居跡	6
2. 土壙	26
3. 古墳	39
IV. 包含層出土の遺物	40
1. 先土器時代	40
2. 繩文時代	66
3. 弥生時代	73
4. 古墳～奈良・平安時代	73
5. 近世以降	76
V. 一括サンプル内出土の自然遺物	80
1. 資料の採集方法と集計方法	80
2. 同定結果	81
3. 同定記載および計測結果	86
4. 考察	93
VI. まとめ	102

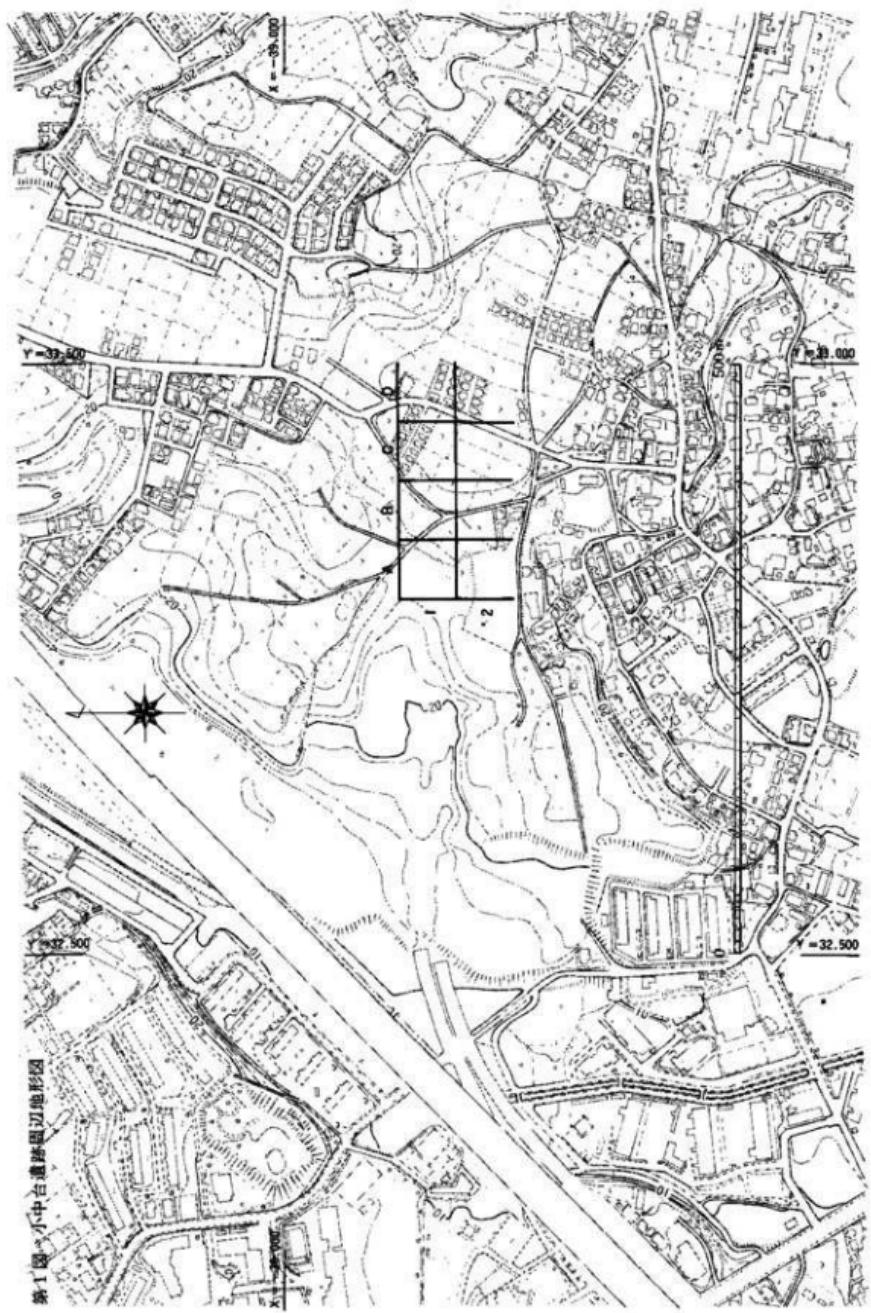
挿図

第1図	小中台遺跡周辺地形図	1
第2図	小グリッド配置図	1
第3図	小中台遺跡の位置と周辺の主要遺跡	3
第4図	小中台遺跡土層柱状図	5
第5図	1号住居跡	7
第6図	1号住居跡出土遺物(1)	8
第7図	1号住居跡出土遺物(2)	9
第8図	1号住居跡出土遺物(3)	10
第9図	1号住居跡出土遺物(4)	11
第10図	1号住居跡出土遺物(5)	13
第11図	2号住居跡	15
第12図	2号住居跡出土遺物(1)	15
第13図	2号住居跡出土遺物(2)	16
第14図	2号住居跡出土遺物(3)	17
第15図	3号住居跡・出土遺物	18
第16図	4号住居跡	19
第17図	5号住居跡・出土遺物	21
第18図	6号住居跡・出土遺物	23
第19図	7号住居跡・出土遺物	25
第20図	1号土壤・出土遺物	27
第21図	2号土壤・出土遺物	27
第22図	3A・B号土壤・出土遺物	29
第23図	4号土壤・出土遺物	31
第24図	5号土壤・出土遺物	33
第25図	6号土壤	34
第26図	7号土壤	35
第27図	8, 9, 10A・B, 11号土壤	37
第28図	12A・B, 13号土壤	38
第29図	1号填	39
第30図	第1・2ブロック遺物出土状況	40・41
第31図	第1・2ブロック母岩別分布状況	40・41
第32図	第1・2ブロック出土遺物(1)	41
第33図	第1・2ブロック出土遺物(2)	42
第34図	第1・2ブロック出土遺物(3)	43
第35図	第1・2ブロック出土遺物(4)	44
第36図	第3ブロック遺物出土状況	50~51
第37図	第3ブロック母岩別分布状況	51
第38図	第3ブロック出土遺物(1)	52
第39図	第3ブロック出土遺物(2)	53
第40図	第1ブロック遺物出土状況	56
第41図	第1ブロック母岩別分布状況	57
第42図	第1ブロック出土遺物(1)	58
第43図	第1ブロック出土遺物(2)	59
第44図	第1ブロック出土遺物(3)	60
第45図	第1ブロック出土遺物(4)	61
第46図	第1ブロック出土遺物(5)	62
第47図	織文土器(1)	67
第48図	織文土器(2)	69
第49図	織文土器(3)・石器	71
第50図	土器片鍤・土製円板	72
第51図	弥生土器	73
第52図	古墳・奈良・平安時代遺物	75
第53図	陶磁器	77
第54図	瓦	77
第55図	銭貨	77
第56図	泥面子	78
第57図	ハマグリ殻長分布図	89
第58図	貝類組成の遺構間比較	94
第59図	遺構別ハマグリ・シオフキ殻長分布	96
第60図	2号住居跡および炉址内堆積物土層断面	98
第61図	加曾利E式土器の地文原体組成	104
第62図	遺構分布図	卷末折込
第63図	確認調査グリッド及び先土器時代	卷末折込

本調査区配置図・卷末折込

表

表1	堅穴住居跡一覧	6
表2	1号住居跡土器片鍤計測値	13
表3	7号住居跡鉄製品計測値	25
表4	土壤一覧	26
表5	第1文化層母岩別資料内訳	40
表6	第1ブロック遺物属性	44~45
表7	第2ブロック遺物属性	45~48
表8	第3ブロック遺物属性	54~55
表9	ブロック外出土遺物属性	55
表10	第2文化層母岩別資料内訳	57
表11	第1ブロック遺物属性	63~64
表12	第2ブロック遺物属性	65
表13	土器片鍤・土製円板計測値	73
表14	古墳・奈良・平安時代遺物計測値	74
表15	泥面子計測値	79
表16	産出動物一覧	81
表17	動物遺存体同定結果（1号住居跡）	82
表18	動植物遺存体同定結果（2号住居跡）	84
表19	2号住居炉址一括サンプル内出土脊椎動物	84
表20	動植物遺存体同定結果（3, 4, 6号土壤）	85
表21	2号住居炉址灰層内出土のマイワシ第1、第2脊椎骨計測値	91
表22	遺構別の貝重量組成比較	94



第1图 小中台道路周边地形图

I. 序 章

調査に至る経緯と概要（第1・2図）

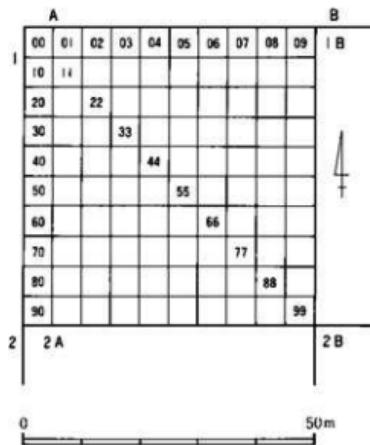
千葉市西部の東京湾岸に面する地域は、埋立地の拡大に伴う学園都市や大規模な住宅団地の造成が進められ、人口の社会増加が著しい地域である。千葉県では、東関東自動車道路との関連もあり、道路網の整備・充実が急がれるこの地域に都市計画道路3・4・43号磯辺・茂呂町線（以下、磯辺・茂呂町線）の建設を計画している。

磯辺・茂呂町線は、千葉市磯辺町と茂呂町を結ぶ環状線で、計画路線内には数多くの埋蔵文化財の所在することが予想された。このため千葉県教育庁文化課では、道路建設に先立ち、用地取得にあたった都市部計画課（現街路モノレール課）と慎重な協議を重ねてきた。その結果、最も建設の急がれる路線西側の起点にあたる国道14号線（磯辺町）から、県道実物停車場・穴川線（園生町）までの区間は、路線変更及び現状保存が困難であり、区内に所在する4か所の埋蔵文化財包蔵地については、発掘調査による記録保存の措置がとられたことになった。発掘調査は、文化課の要請と指導のもとに、当センターが実施することになり、都市部計画課との間に委託契約が締結されることになった。

発掘調査は、昭和57年度、最も西側の谷津台貝塚から実施され、その成果は翌58年度に刊行された『千葉市谷津台貝塚』に報告されている。

小中台遺跡については、まず昭和60年6月1日から5,800m²を対象とした確認調査が行われ、引き続き確認調査の成果に基づいた本調査が同年9月30日まで実施された。調査対象面積は、西側の漏れ谷部分を除く3,800m²についてである。さらに翌61年7月1日～31日、用地買収・家屋撤去等問題の残った416m²について本調査が追加して行われた。

本遺跡では、公共座標を基準に50m×50mの大グリッド（第1図）を設定した。大グリッドは、北から1・2と数字を、西からA・B・C・Dとアルファベットを付した。大グリッドの内部は、5m×5mの小グリッドに分割し、00から99までの番号を付した（第2図）。従って各々の小グリッドは、大グリッド番号と小グリッド番号を組合せた4桁の記号で表現されることになる。



第2図 小グリッド配置図

1 山口直樹他 『千葉市谷津台貝塚』 (財)千葉県文化財センター, 1983

II. 遺跡の位置と環境

1. 遺跡の位置 (第1・3図、図版1)

小中台遺跡は、国鉄稻毛駅から北へ約1.5kmの千葉市小中台町524他に所在する。

千葉市は、房総半島西側の付け根部分に位置し、東京湾に面する比較的平坦な下総台地によってそのほとんどが占められている。市域東京湾岸には、花見川、都川、村田川等主要水系に属する大小の河川があり、その浸食作用によって樹枝状に発達した開析谷と沖積低地が無数に入りこんだ結果、下総台地は複雑な地形的様相を展開している。

本遺跡は、稻毛と検見川の間で東京湾に西流する横橋谷の水系にあり、横橋町、長沼町を各々谷頭とする宮野木支谷と園生支谷との合流点に近く位置する。この合流点を西に臨むような形で、その先端部にかつての谷津台貝塚(15)を乗せた舌状台地が突出しており、その北側にまわりこんだ小さな谷津を西面し、ヤツデ状に拡がる舌状台地の1つの基部に当たる部分に今回の調査区がある。調査区の南東方向に延びる舌状台地の基部は縄文時代中・後期の散布地である新堀込遺跡(2)として周知されており、今回の調査区は立地条件等からみて、その一角にあたるものと思われる。調査の結果、西入する小谷津の谷頭部分には瀬れ谷の存在を思わせる黒色土の厚い堆積がみられ、調査区は北入する谷津との間の瘠尾根状を呈する台地上に位置することが判明した。調査区の標高は約28m。沖積低地との比高約18mを測り、現在の国道14号線が走る旧海岸線までの直線距離は約1.8kmである。

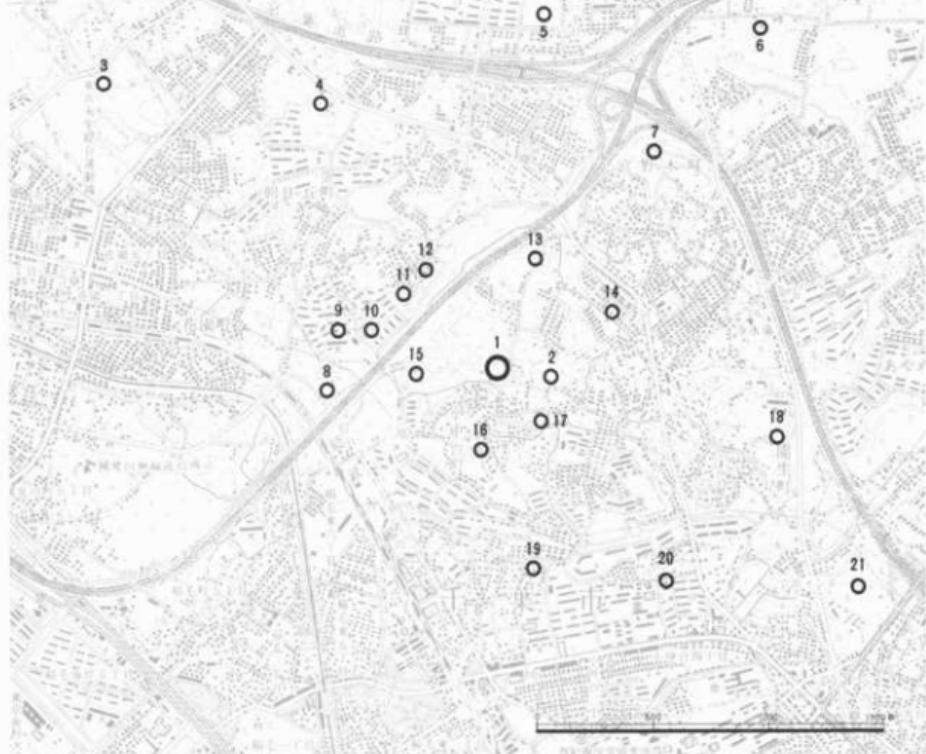
横橋谷水系の旧河口付近には、10数年前まで稻毛浜とよばれた遠浅の砂浜が拡がり、潮干狩りで賑わう場所であった。この砂浜は、海蝕と流水の作用によって縄文時代に発達した砂洲であり、縄文時代から近年に至るまで砂泥性の海に生息する魚貝類の絶好の漁獲場所を提供していたと思われる。このことは、本遺跡の縄文時代中期及び古墳時代中期の遺構内に堆積していた地点貝塚から検出された魚貝類の遺骸が、砂洲の発達した海岸付近で捕獲、採取されるものであることからも十分推定することが可能である。現在の海岸線は、埋立てによって横橋谷水系が流れこんでいた旧海岸線より2.6kmほど後退しており、往時の環境の復原を困難なものにさせている。

2. 周辺的主要遺跡 (第3図)

小中台遺跡の所在する横橋谷水系には数多くの遺跡が点在しており、古くから生活の場として環境条件の整っていたことが窺える。周辺の主な遺跡を、時代を追って概観したい。

先土器時代は、谷津台貝塚(15)及び宮野木支谷対岸の鳥込東(鳥喰台)遺跡(12)で遺物が採集された程度であるが、本遺跡の北西約1.5km、花見川水系に属する養輪遺跡(4)では、IV-V層とVI層下位～VIIa層を各々主体としたナイフ型石器を伴う石器群が検出されている。

第3図 小中台遺跡の位置と周辺の主要遺跡
(国土地理院発行 1/25,000地形図、千葉西部)



- 1 小中台遺跡
- 2 新堺込道跡
- 3 港合道跡
- 4 貨輪道跡
- 5 摂浦貝塚
- 6 本郷向洋道跡
- 7 走原道跡
- 8 エゴダ道跡
- 9 鳥込西引日道跡
- 10 鳥込日道跡
- 11 鳥込東日道跡
- 12 鳥込東道跡
- 13 宮野木原道跡
- 14 堀田道跡
- 15 谷津台道跡
- 16 砧山遺跡
- 17 東の上遺跡
- 18 下田重道跡
- 19 前原道跡
- 20 女子高裏遺跡
- 21 間生貝塚



縄文時代になると、早期では宮野木支谷対岸に茅山式期の集落が検出されたエゴダ遺跡(8)や、同時期の炉穴群が検出された鳥込東(鳥喰台)遺跡(12)をはじめ、鳥込西貝塚(9)、鳥込貝塚(10)、鳥込東貝塚(11)といった遺跡が台地縁辺約800mに亘って連なり、小貝塚を伴った貝塚群を形成している。また園生支谷対岸には井草式・夏島式土器等を出土した向原遺跡(19)、茅山式期の女子高裏遺跡(20)が知られている。本遺跡の西約400mに位置する谷津台貝塚(15)は、市域では数少ない前期の地点貝塚を伴う遺跡であり、その主体は関山式期に求められる。中期は、本遺跡の北東約1.2km、宮野木支谷奥に加曾利E式期の定原遺跡(7)があり、後・晚期では花見川水系、葭川水系との各々の分水界付近に横橋貝塚(5・国指定史跡)、園生貝塚(21)が所在する。いずれも横橋谷水系の旧河口からの距離3~3.5kmを測り、宮野木支谷及び園生支谷の最奥部に位置する。また本遺跡と同一の舌状台地基部には、堀之内式~加曾利B式期の東の上貝塚(17)がある。

弥生時代には、花見川水系との分水界付近、宮野木支谷最奥部に位置する本郷向遺跡(6)があり、中期後葉の住居跡1軒が検出されている。

古墳時代以降の遺跡は、宮野木支谷においては五領期前葉の本郷向遺跡(6)、鬼高期の宮野木原遺跡(13)、堀田遺跡(14)、国分期の定原遺跡(7)等があり、園生支谷においては国分期の下田遺跡(18)等が知られている。本遺跡の南約300mに位置する城山遺跡(16)は、歴史時代から中世にかけての平山城・小中台城跡であり、土壘、空堀、腰曲輪等の遺構が確認され、常滑壺が出土したが、土取工事のためほぼ埋没、原状を留めていない。

本遺跡の乗るヤツデ状に拡がった舌状台地上に限っても、集落跡・包蔵地11か所、古墳8基横穴群1か所及び中世城館跡1か所の遺跡の所在が分布地図等で周知されている。加えて本遺跡の北西約2.1kmに位置し、縄文時代後期(加曾利B式期)のものと思われる独舟舟や櫓、及び弥生時代後期のものとして有名な大賀蓮の出土した検見川泥炭層遺跡・落合遺跡(3)の例もあり、台地下の沖積低地にも未だ知られざる多くの埋蔵文化財が眠っている可能性が高い。

- 1 宮崎昭一郎 「縄文前期の遺跡」『千葉市史』第1巻 千葉市、1974
青木 勝也 「谷津台貝塚」 千葉市遺跡調査会、1982
- 2 山口直樹 「千葉市谷津台貝塚」 (財)千葉県文化財センター、1983
加藤正信修 「千葉市震輸遺跡」 (財)千葉県文化財センター、1985
- 3 武船喜光裕 「エゴダ遺跡調査報告」 千葉市遺跡調査会、1982
- 4 内野真三夫 「鳥込貝塚」 鳥込貝塚調査会、1971
- 5 神尾明正 「千葉市鳥込東貝塚発掘報告」『千葉県文化財調査報告書』 千葉県教育委員会、1964
- 6 神尾明正・白 「千葉県千葉市鳥込東貝塚」『日本考古学年報』 15 日本考古学協会、1967
- 7 田川 真惟 「定原遺跡」 千葉市遺跡調査会、1982
- 8 斎沢良介 「千葉県千葉市横橋貝塚」『日本考古学年報』 9 日本考古学協会、1961
戸沢充則 「千葉県千葉市横橋貝塚(第2次)」『日本考古学年報』 17 日本考古学協会、1969
文化庁文化財保護部 「新指定の文化財――こはし貝塚」『月刊文化財』 216 1963
- 9 西村正衛 「千葉県鳥賀町園生貝塚」『日本考古学年報』 1 日本考古学協会、1951
神尾明正 「千葉県千葉市長者山貝塚」『日本考古学年報』 5 日本考古学協会、1957
神尾明正 「千葉県千葉市園生貝塚」『日本考古学年報』 7, 10, 12 日本考古学協会、1958, 63, 64
- 10 田川 真惟 「本郷向」 千葉市遺跡調査会、1982
- 11 田川 真惟 「千葉市宮野木原遺跡発掘調査報告書」 千葉市遺跡調査会、1981

3. 層序 (第4図)

小中台遺跡の層序は第4図のとおりである。調査区西寄りの1A98グリッドから東寄りの2C07グリッドにかけて、緩やかな傾斜をもっていることが模式的に看取されよう。台地平坦面に近く、比較的安定していると思われる2C07グリッドの北壁断面を基本層序とした。

I : 表土層。現在の生活道路及び諸建造物は、本層上位に1.5mほどの盛土をした上にある。

III : ソフトローム層。調査区全域ではないが、本層上位には暗褐色を呈するソフトローム漸移層(II C)が認められた。

IV-V : 黄褐色ハードローム層。IV層とV層の区分は不明瞭な部分が多いが、1C73-2C03ラインでは各々明瞭に区分することができた。クラックの発達が著しい。

VI : 黄褐色ハードローム層。怡良・丹沢パミスを含む層である。

VII a : 第II黒色帶上部にあたる。

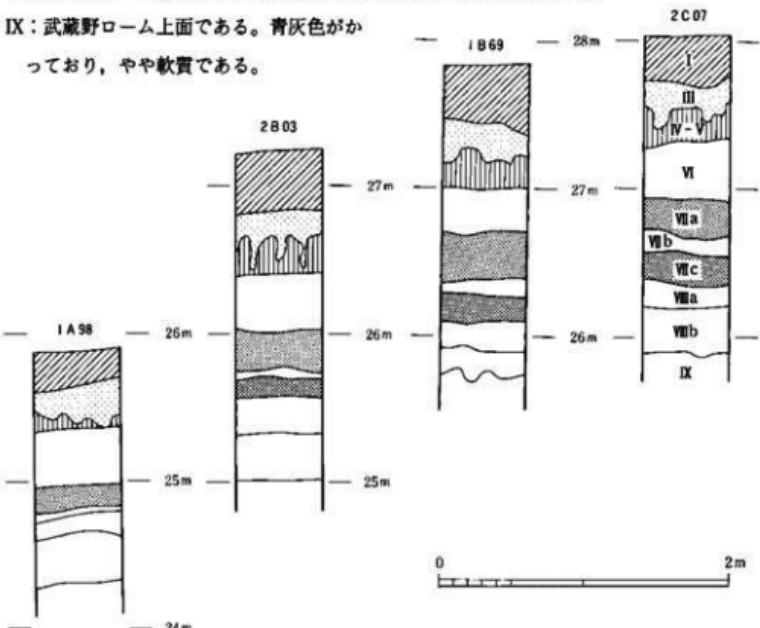
VII b : VII a, VII c 間にみられる明るい色調の間層である。

VII c : 第II黒色帶下部にあたる。色調的にはかなり黒っぽく、明瞭に把握することができる。
調査区西側の谷部周辺では認められない。

VIII a : 立川ローム最下層の上部にあたる。下部に比べて明るい色調を呈する。

VIII b : 立川ローム最下層の下部にあたる。比較的沈んだ色調を呈する。

IX : 武藏野ローム上面である。青灰色がかっており、やや軟質である。



第4図 小中台遺跡土層柱状図

III. 遺構とその遺物

小中台遺跡の調査で検出された遺構は、竪穴住居跡7軒、土壙（重複するものを含めて）16基及び周溝の一部分のみではあるが古墳1基を数える。以下、遺構の種類及びその中の帰属時期を考慮にいれて報告を進めることにしたい。但し、土壙については帰属時期の判明したものを先に報告し、その後に時期不明のものをまとめた。また報告書の体裁上、各遺構には報告の段階で新たな番号を付け直してある。調査時及び整理時の遺構番号については、各種遺構毎の説明の前に一覧表を掲げたので参照されたい。

1. 竪穴住居跡

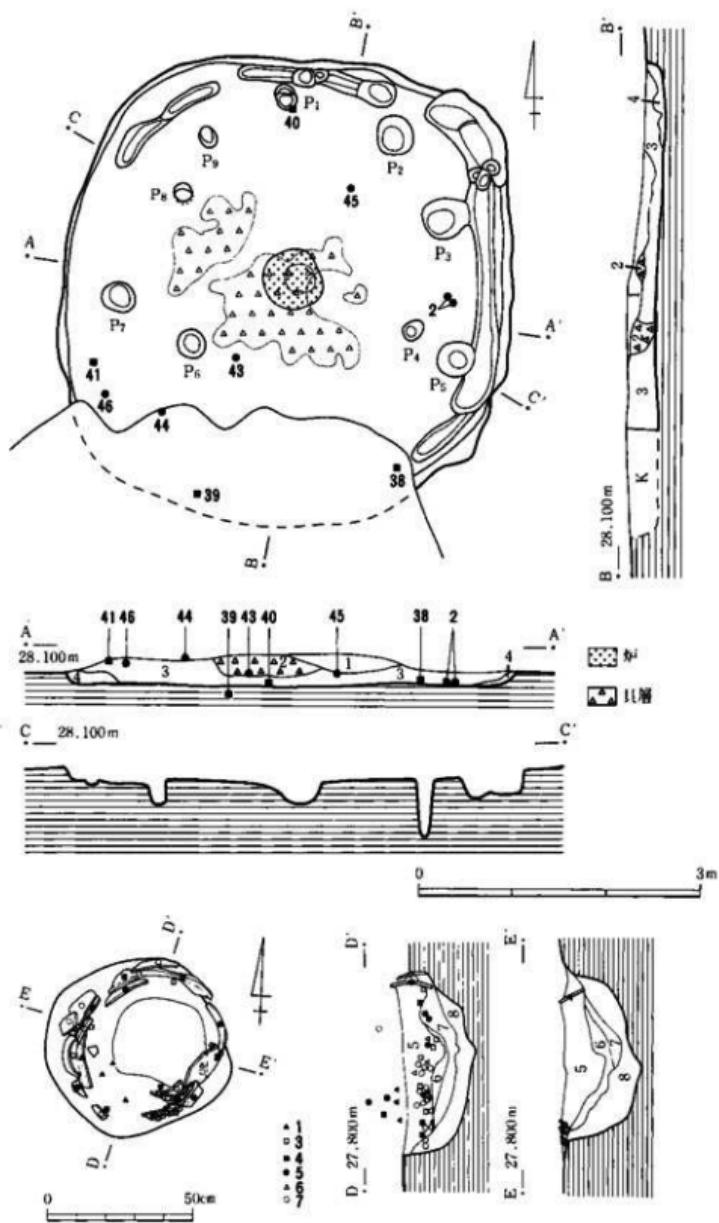
表1 竪穴住居跡一覧

遺構番号	時期	規 模* (m)	形態	主軸方向	備 考	調査時番号
1号住居跡	古墳時代中期	長軸 短軸 深 (5.00) × 4.80 × 0.35	隅円方形	N - 5° - E	南側を擾乱により掘削。	SB - 1
2号住居跡	古墳時代中期	3.73 × 3.35 × 0.15	隅円方形	N - 37° - E		SB - 5
3号住居跡	古墳時代中期?	3.86 × 3.78 × 0.23	方 形	N - 53.5° - W	北東コーナーで1号土壙と切合。本跡の方が新。	SB - 3
4号住居跡	古墳時代中期?	(6.45) × 6.00 × 0.34	方 形	N - 39° - E	中央を側面溝が貫く。	SB - 2
5号住居跡	古墳時代中期	4.18 × 3.65 × 0.22	方 形	N - 24° - E		SB - 4
6号住居跡	古墳時代中期	4.85 × — × 0.51	方 形		南側1m以上調査範囲外。	SB - 6
7号住居跡	古墳時代中期	(3.45) × 3.16 × 0.07	方 形	N - 23° - E	南側を擾乱により掘削。	SB - 7

* () 内は推定値

1号住居跡（第5～10図、表2、図版8・14～16・20）

遺構 調査区の東半部中央付近に位置し、I C63・64・73・74グリッドにかけて検出された。南側の一部に新しい時期の擾乱を受けているが、胴の張った隅円方形を呈するものと思われる。検出面でのプランは、長軸推定5.00m、短軸4.80mを測る。主軸の方向はN-5°-E。検出面からの深さ35cmで床面に至る。床面は炉の周辺と北側で堅緻な面が検出されたが、他の部分は遺存が悪く軟弱であった。覆土は4層に分けられる。1：3：暗褐色土層。2：混土貝層。オキアサリ、小型ハマグリを主体とし、アサリ、シオフキ、マガキ等を含む。4：ロームブロックを含んだ暗褐色土層。炉は住居床面のほぼ中央部に位置し、複数個体の大型土器片を炉壁として利用した土器片囲炉である。土器片囲の規模は、長径53cm、短径42cmを測る略梢円形を呈する。南側部分に土器片囲の切れどころがあり、全周してはいない。主軸の方向はN-31°-E。利用された土器片は、土器の内面を炉の内側に向けた状態でならべられ、第6～8図1・3～7の6個体に復元することができた。床面での炉掘形の規模は、1片60cmを測る隅円方形を呈し、床面からの掘りこみの深さ37cmを測る。炉の覆土は4層に分けられる。5：焼土粒を多く含む褐色土層。6：灰層。7：焼土層。8：火熱を受けたロームブロック層。8は炉の掘形

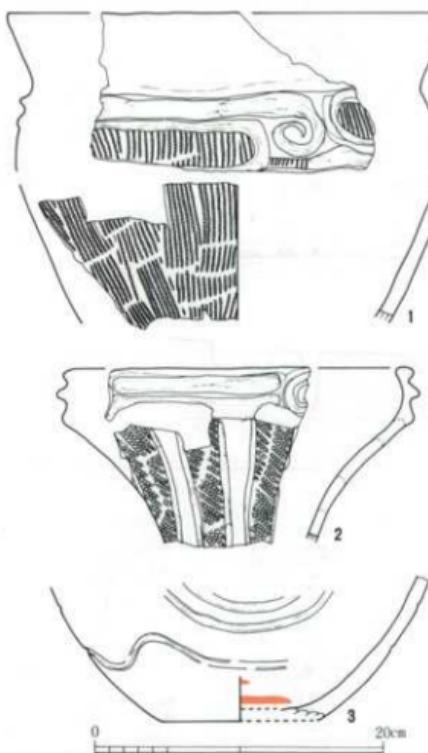


第5図 1号住居跡

であり、その上面が使用面と思われる。ピットは9か所検出された。東側のP₂・P₃・P₄は深さ60cm前後であるが、他はいずれも深さ20~25cmほどのものである。周溝は北側から東側にかけての壁際に断続的に検出された。幅15~30cm。周溝内にも小ピット等が数か所検出された。

遺物 貝層上面、覆土内及び床面上から土器、石器及び土器片鱗が出土した。出土量は少ない。復元可能な土器は実測図を掲載した7点で、そのうち第6図2を除く全てが土器片圓炉の炉体土器として利用されていたものである。

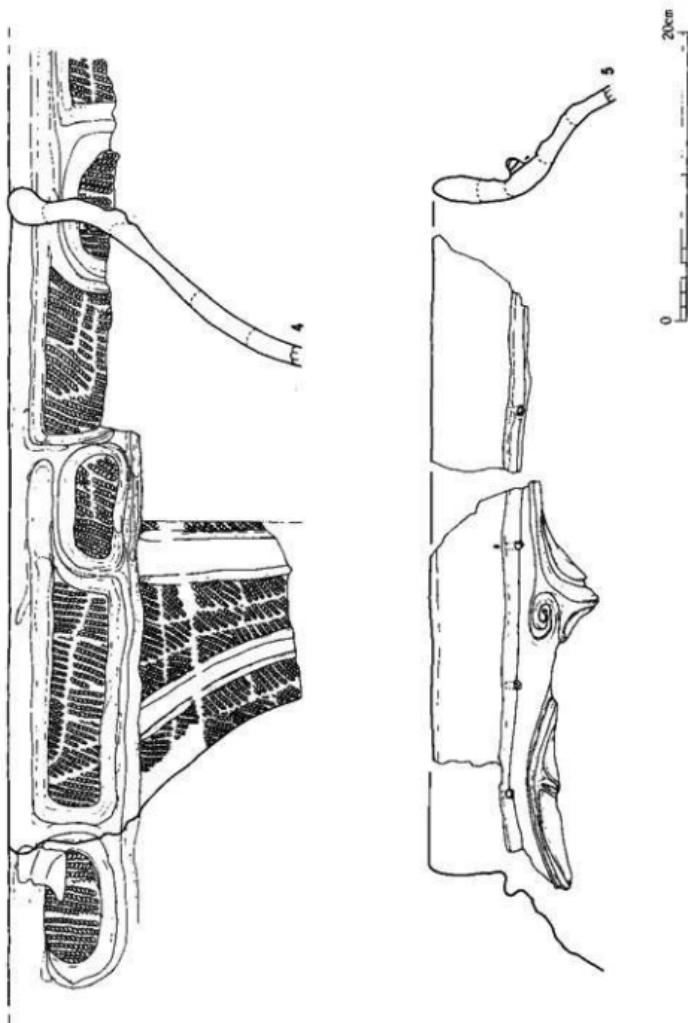
1は口縁部に幅広の無文帯をもつ浅鉢である。胴上部以上約1/4と胴部約1/5のみ遺存する。口径推定31.2cm。胴上部に隆帯を貼付け、それに沿った幅広の沈線とで橢円区画文を描出す。さらに橢円区画文間に渦巻文を配する。橢円区画内及び胴下半部は地文の撚糸文Lが施される。内面は横位の丁寧なミガキが施される。2は器形には古い要素を残すが、口縁部文様帶の退化した小型の深鉢である。口縁部から胴上半部にかけて約1/4のみ遺存する。口径推定22.4

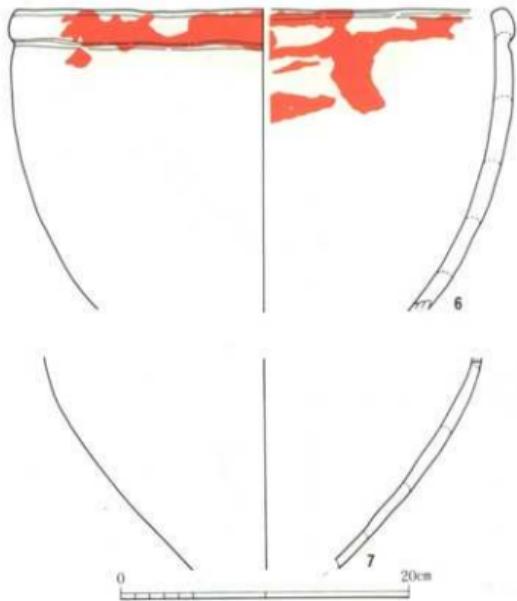


第6図 1号住居跡出土遺物(1)

cm。隆帯と幅広の沈線によって口縁部文様帶を形成する。隆帯は断面「几」状の隆起の高いものを貼付し、それに沿った沈線によって渦巻文と橢円区画文状の文様効果を描出したものを交互に配する。胴部は2本一組の沈線区画による磨消済垂帯が垂下する。地文は単節繩文LR。内面には幅2mm程の細い工具によるミガキが口縁部に向かって斜位に施される。また内面下半は色調が黒変している。3は胴部中位で一度径が細くなると思われる深鉢の胴下半部である。約1/3のみ遺存。外面は弧状沈線及び波状沈線を巡らした後、丁寧なミガキ。底部付近に朱の付着がみられる。4は口縁部文様帶に隆帯と幅広の沈線とによる橢円区画文を形成する深鉢である。口縁部約1/2、胴上半部約1/4のみ遺存。口径推定44cm。橢円区画文は、所謂窓枠状区画と橢円区画

第7图 1号住居跡出土遺物(2)



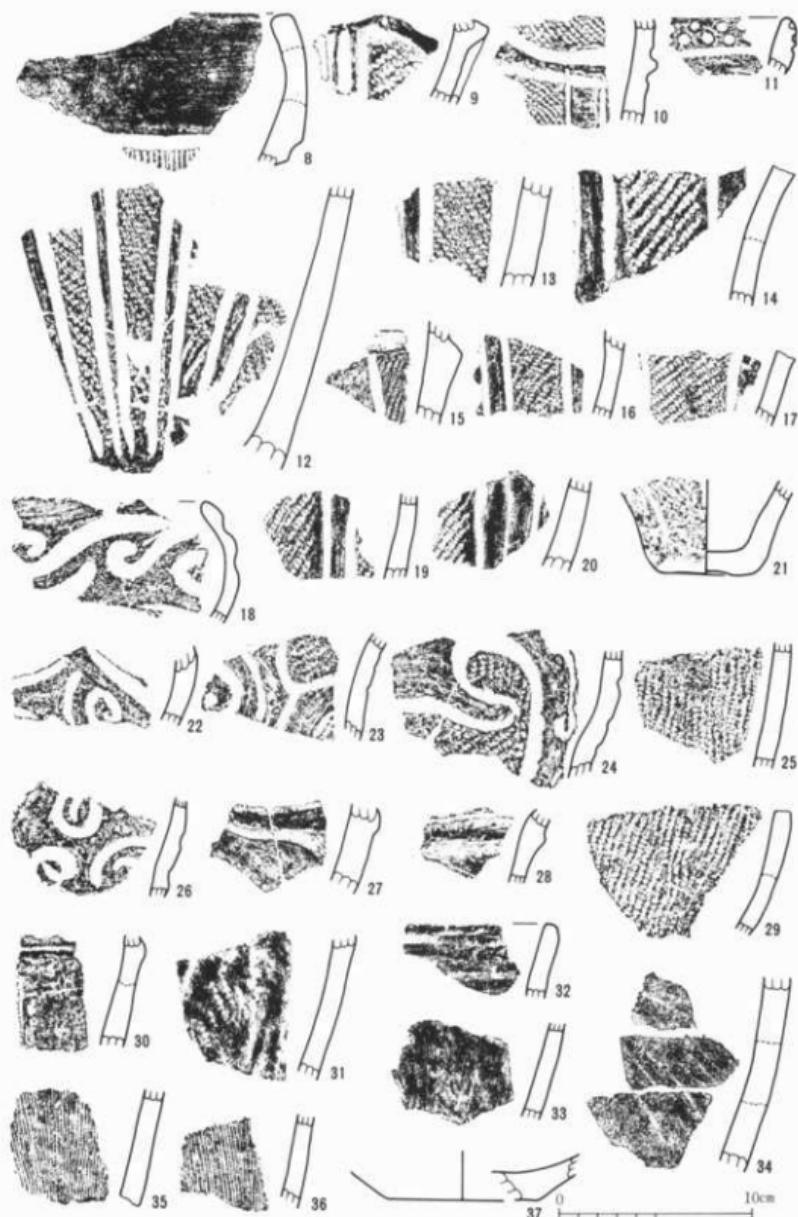


第8図 1号住居跡出土遺物(3)

文が描かれる。内面には丁寧なミガキが横位に施されている。6は肥厚した口縁部直下に幅広の沈線の巡る鉢で、口縁部から胸部にかけて約1/4のみ遺存。口径推定33.6cm。口縁部内外面の一部に朱の痕跡が認められる。7は無文の浅鉢で胸部のみ約1/2が遺存する。外面上位は横位に、外面中央位以下及び内面には縦位に細かいミガキが行われている。

8は幅広の沈線を巡らせ、無文の口縁部を区画した浅鉢。沈線以下には地文の条線が縦位に施される。口縁部無文帯及び内面には非常に丁寧なミガキが行われ、部分的に朱の付着がみられる。9・10は隆帯とそれに沿った沈線によって口縁部文様帶に渦巻文や楕円区画文を描出したもの。9は胸部に2本の隆帯、10は2本一組の沈線区画による磨消懸垂帯を各々垂下させている。地文は9が単節繩文RL、10は単節繩文LR。11は口縁部に刺突による上下2段の円形点列を交互に配し、その直下に2本の沈線の巡る深鉢口縁部片である。沈線間は磨消されている。地文は不明。内面は丁寧なミガキを施す。12～24・26は沈線文をもつ深鉢片。12～17・19～21は、2本一組の沈線区画による磨消懸垂帯を垂下させた胸部及び底部片である。12・13は内面に細かいミガキを行っているにもかかわらず、器壁が非常に粗れている。同一個体。15は口縁部文様帶の一部が窺える。19は内面に丁寧なミガキを施す。20は幅広の磨消懸垂帯のほぼ中央に非常に浅い単沈線が垂下する。21は底部内面の一部に灰状の白色を呈する物がこびりついでいる。18・22～24・26は沈線によって幾何学的文様の描出されたもの。18・22・26は変形S字

の二種類が交互に配される。楕円区画は三単位が遺存するが、各々異なる手法によって描出されている。胸部は2本一組の沈線区画による磨消懸垂帯が垂下する。地文は単節繩文RL。内面は口縁部上部のみ丁寧なミガキがみられる。5は大型の有孔飼付土器である。口縁部から胸上半部にかけて約1/3が遺存する。口径推定46.4cm。幅広の無文の口縁を区画するように有孔の飼が巡る。遺存部分には4か所の穿孔がみられ、いずれも飼下側から穿孔されている。胸部は隆帯による渦巻文及び弧線



第9図 1号住居跡出土遺物(4)

状文、渦巻文及び弧線文が、また23・24は弧線文、橢円区画文及び変形C字状文が描かれる。繩文を地文にもつものは、12・13が複節 LRL、他は単節 RL である。18・22・26は地文をもたない。27・28・30は隆帯によって直線や曲線が描かれている。27は内外面とも丁寧なミガキが施される。30は単沈線が垂下している。いずれも地文を持たない。25・29・31は繩文を地文にもつもので、25・29は単節 RL、31は単節 LR が施される。35・36は条線を地文にもつもの。いずれも内面は丁寧なミガキ。32～34・37は無文。34は内外面とも黒色を呈し、丁寧なミガキが施されている。

42は非常に高い隆帯を貼付け、隆帯と沈線とによって渦巻文及び橢円区画文を描いた深鉢の口縁部片である。橢円区画内には地文が施されるが、原体は不明。内面は横位の丁寧なミガキ、43は深鉢の口縁部に発達した小突起である。スクリーントーンは断面を表す。

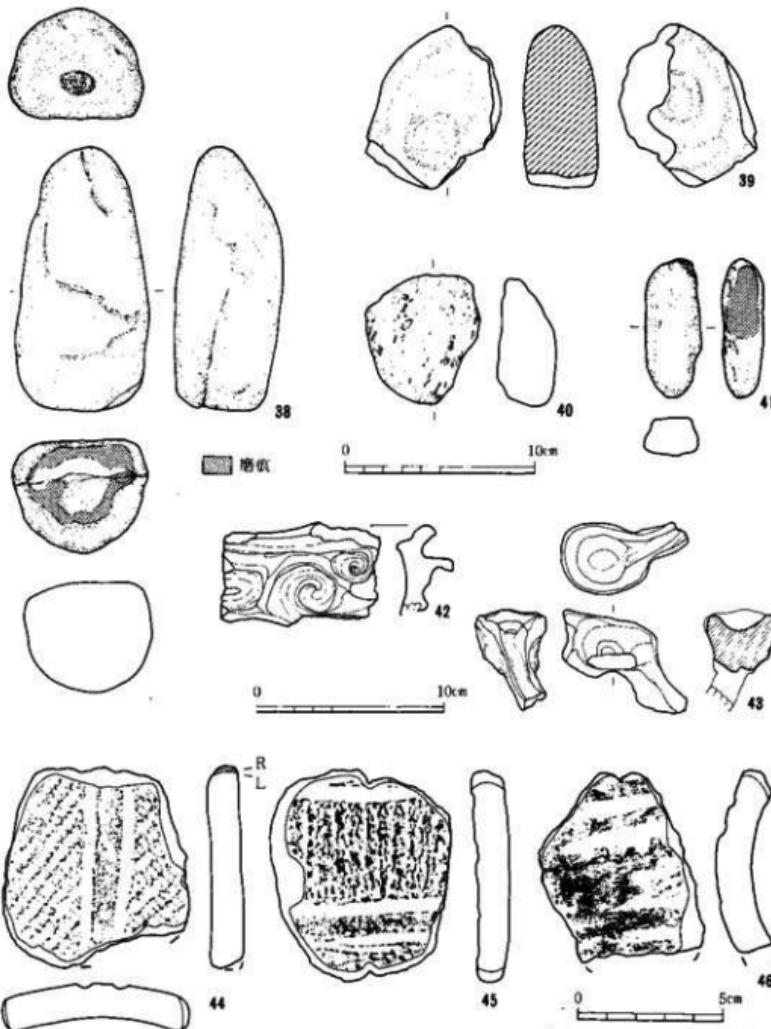
38・39は南側の擾乱部分で検出されたが、遺物の形状から本跡に伴うものと思われる。38は撥形を呈し厚みのある敲石である。上下両端に敲打痕を残す。下端にはドーナツ状の磨痕も認められる。石材は砂岩。最大長13.6cm、重量775.6g。39は偏平な円盤を利用した石皿である。破片であり全形を窺うことはできないが、遺存する表裏面に各1か所ずつ直径20mm大の浅い溝痕が認められる。石材は砂岩。重量271.6g。40は軽石である。表面の風化がかなり進み明らかではないが、折損品であろう。特に加工痕は認められない。浮子として利用されたものかもしれない。最大長6.6cm、重量10.54g。41は1側面に磨面を残す小砾である。磨面は30mm×15mmの範囲で、他の面に比べ非常に滑らかである。石材はチャート。最大長7.1cm、重量63.7g。

44～46は土器片錐である。44は2本一組の沈線区画による磨消懸垂帯をもつ深鉢の胴部片を利用したもの。1短辺側の約2/3を欠損しているが、短辺側に2対とそれに直交する形で長辺側に1対の抉りであったと思われる。45・46は短辺側に1対の抉りをもつもので、45は深鉢口辺部片を、46は深鉢の胴下半部片を利用したものである。

実測図及び拓影図を掲載したものの他に繩文土器片108点が覆土内より出土している。

2号住居跡（第11～14図、図版9・15・17・20）

造構 調査区のほぼ中央付近に位置し、1B73・74グリットにかけて検出された。プランは不整橢円方形を呈し、長軸3.73m、短軸3.35mを測る。主軸の方向はN-37-E。上層が畠地として利用され、かなり深耕を受けていたため検出面からの深さ僅か15cmで床面に至る。床面の遺存状況は良好であり、特に炉の周辺と埋甕の設けられていたP₁₃の北側が非常に堅緻であった。覆土は3層に分けられる。1：混土地層。オキアサリを主体として、イボキサゴ、マテガイ等を含む。2：暗褐色土層。3：ロームブロックを含む褐色土層。炉は住居床面の中央部主軸上北東寄りに位置する。床面での規模は長径83cm、短径78cmを測る略円形を呈し、床面からの掘りこみの深さ40cmを測る比較的大型のものである。炉の覆土は6層に分けられる。4：焼土粒、



第10図 1号住居跡出土遺物(5)

表2 1号住居跡土器片鑑計測値

排図番号	種類	遺存状態	計測値(cm)	抉幅(cm)	重量(g)	時期	備考
10-44	土器片鑑	ほぼ完存	長 幅 厚 6.7 6.4 1.1 短辺側 6.1 短辺側	—	64.6	加曾利E	1短辺側欠損 短辺側2対、長辺側1対の抉
10-45	土器片鑑	完 存	7.1 6.3 1.1	6.4	57.4	加曾利E	
10-46	土器片鑑	？	6.3 5.7 1.3	—	48.9	加曾利E	1短辺側欠損

炭化粒及び灰粒を多く含む暗褐色土層。5：灰層。6：灰をブロック状に含む暗褐色土層。7：灰を多く含む褐色土層。火熱を受けている。8：焼土層。9：炭化物を主体とする層。炉の覆土の堆積状況（特に5と7）から、埋壠炉あるいは土器片圓炉であった可能性が高く、住居廃絶時あるいは埋没直前における土器（片）の抜き取りが行われたものと思われる。また、5の灰層をサンプリングして分析した結果、往時の食生活及び炉の利用法の一端を窺わせるような好資料を得ることができた。章を改めて報告したい。ピットは13か所検出された。 $P_1 \sim P_7$ 、 $P_9 \sim P_{11}$ は床面からの深さ40cm以上を測り、 $P_2 \sim P_4 \sim P_8 \sim P_{10}$ は30cm前後、他も15cm以上を測る。東壁中央直下からは第12図1の土器を埋壠としてもつ P_{13} が検出された。床面からの深さ18cmを測る。周溝は検出されなかった。

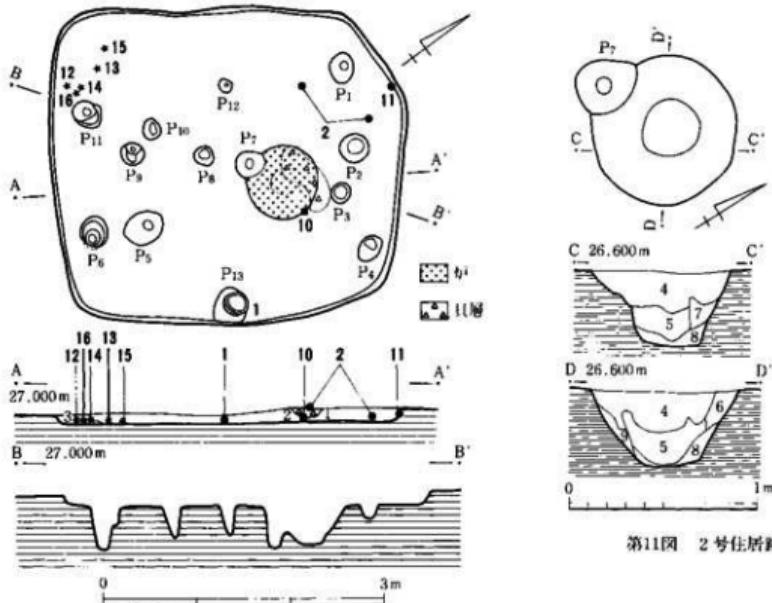
遺物 覆土内及び床面直上から土器、石器及び土製品が出土した。出土量は極めて少ない。復元可能な土器は、実測図を掲載した2点のみである。

1は P_{13} 内に埋壠として利用されていた深鉢の口縁部から胴上半部である。胴部は全周するが、口縁部は約1/2のみ遺存。口径推定22.0cm、残存高15.4cmを測る。口縁部文様帶は既に消失し、やや肥厚する口縁部直下に幅広の単沈線が巡る。沈線以下には地文として単節繩文RLを全面に施文する。内面は細かいミガキが施され、とりわけ口縁部には丁寧なミガキが横位に行われている。また最大径を測る部分からくびれ部にかけてミガキの際の工具痕かとも思われるヘラ状工具端痕が認められる。2は覆土中より出土した深鉢の大型片接合資料である。口縁部約1/2、胴上半部約1/4のみ遺存。口径推定22.6cm。口縁部直下より沈線によるH字状区画文を描出し、区画内を磨消す。H字状区画文は4単位で全周するものと思われる。地文は単節繩文RLで、胴部は縦位あるいは斜位に施文し、口縁部は一段のみ横位に施文をする。条の傾きを変えることで消失した口縁部文様帶を意識したものと思われる。内面は口縁部とくびれ部に横位の細かいミガキを行う。

3は口縁部に幅広の無文帯をもつ浅鉢のくびれ部から胴部上位にかけての小片である。口縁部無文帯は隆帯で区画され、縦位の稜を強く残したミガキがみられる。隆帯はその直下に沿う沈線とで区画文を描出すると思われる。区画内には地文・単節繩文RLが施文されている。4は口縁部直下に単沈線を巡らす小さな波状口縁をもつ深鉢の口縁部片で、波頂部付近の小片である。沈線以下には単節繩文RLが施文されている。内面は横位の丁寧なミガキ。5～9は沈線文をもつ深鉢の胴部片である。5は2本一組の沈線を垂下させるが、沈線間を磨消していない。6～9はいずれも2本一組の沈線区画による磨消懸垂帯を垂下させる。地文は5～8が単節繩文RL、9は単節繩文LR。

10は炉の平面プラン東側直近の床面直上から出土した石錐である。凹基無茎錐で、片側の脚先端を折損する。石材はチャート。最大長2.85cm、重量0.92gを測る。

11は北壁際から出土した粘土紐状の土製品である。全体が「く」字状に曲がり、下部にヘラ

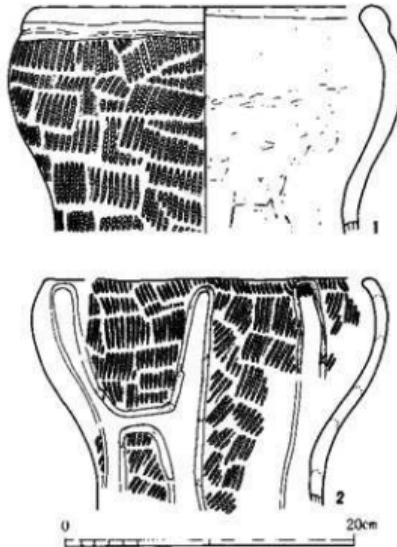


第11図 2号住居跡

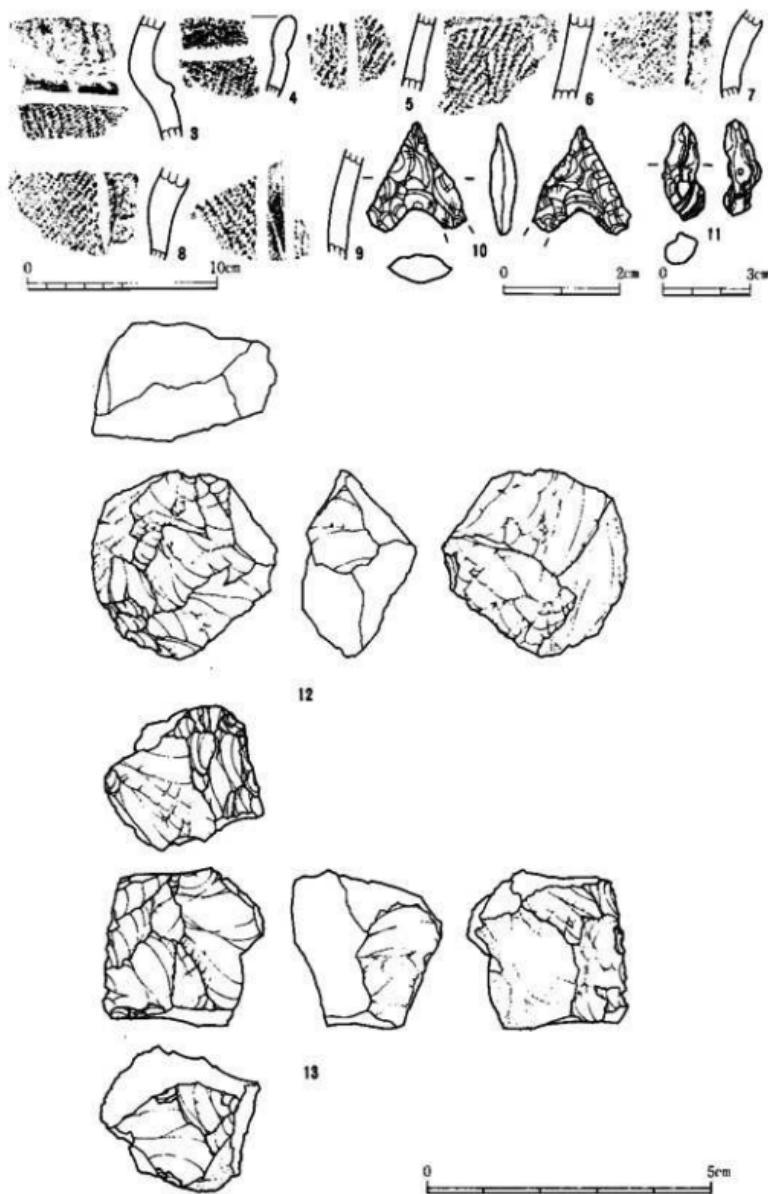
状工具による鋭い沈線が2本斜位に刻まれている。遺存最大長3.4cm、幅、厚さとともに1.0~1.3cmを測る。重量3.30g。

他に縄文土器片36点及び不明礫片4点が覆土内より出土している。

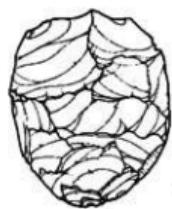
また、ほぼ床面直上の覆土中より先土器時代の遺物が9点検出された。いずれも第1文化層(III層)に帰属時期が求められるものである。個々についての説明は後章に譲るが、9点のうち5点(12~16)は石核であり、他は使用痕のある剥片1点、剥片2点及び削片1点である。石核5点を含む7点はプラン東コーナー付近に集中して出土した。本住居跡に直接あるいは極めて近い時期に関わりをもつた人間達による拾集及び廃棄の行動様式の一端が裏付けられよう。



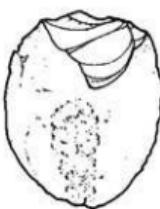
第12図 2号住居跡出土遺物1)



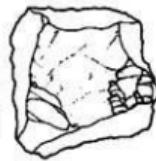
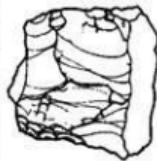
第13圖 2號住居跡出土遺物(2)



14



15



16



第14図 2号住居跡出土遺物3)

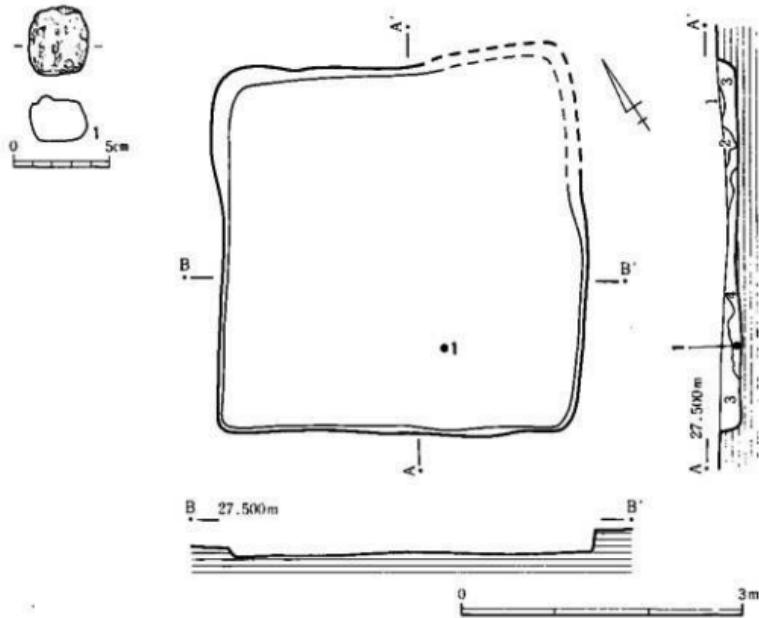
3号住居跡（第15図、図版10・25）

遺構 調査区の中央部やや南寄りに位置し、1B86・87・96・97グリッドにかけて検出された。プランの東コーナー付近で1号土壤と切合っている。新旧関係は本住居跡の方が新しく、1号土壤と切合う部分には貼床が構築されていた。検出面でのプランは、長軸3.86m、短軸3.78mのほぼ方形を呈する。主軸の方向はN-53.5°-W。検出面からの深さ23cmで床面に至る。床面は平坦であるが、堅織な面は検出できなかった。覆土は4層に分けられる。1：ロームブロックを主体とする褐色土層。2～4：暗褐色土層。2・3は焼土粒及び炭化材を多く含み、4はロームブロックを多く含んでいる。床面を精査したにもかかわらず、炉、柱穴及び周溝等内部施設は全く検出されなかつた。また、柱穴については住居プラン周辺についても同様に精査したが検出することはできなかつた。

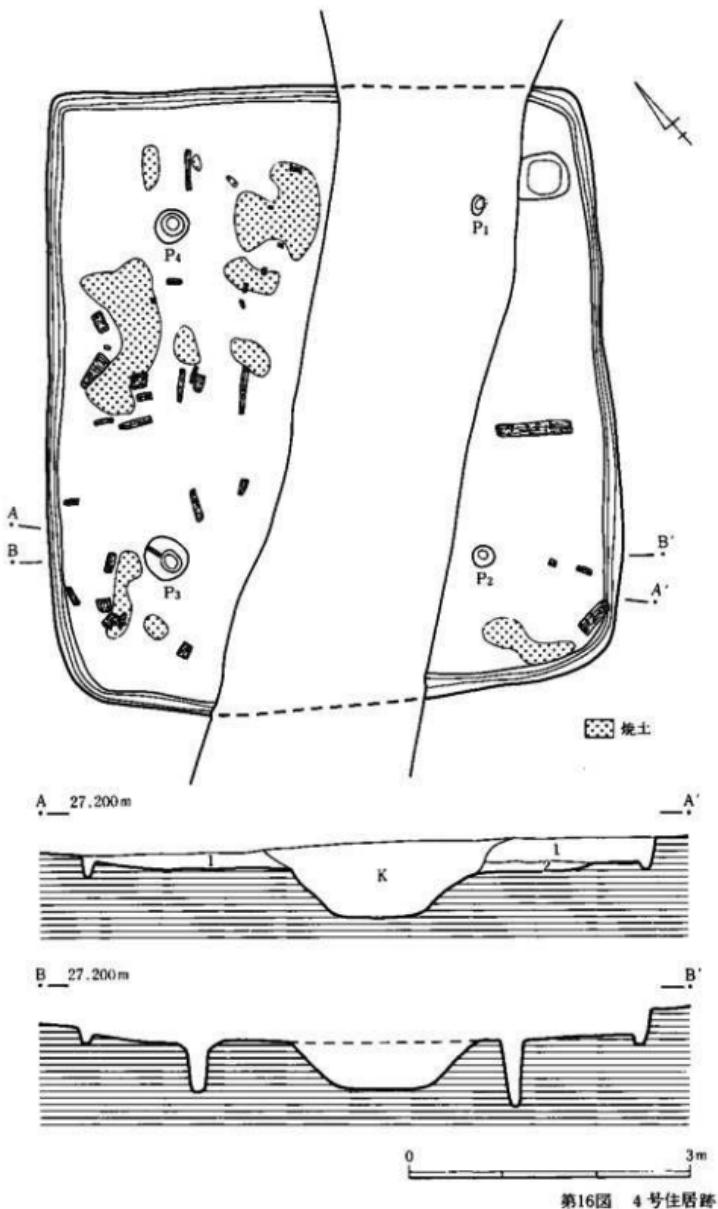
以上のことから、本跡は竪穴住居跡というよりも竪穴状遺構と称した方が妥当かもしれないが、敢えて分類はしなかつた。

遺物 1は軽石である。折損面は認められないが、表面の風化・磨滅が著しく、これのみで完形品かどうか判断しかねる。最大長3.5cm、幅3.0cm、厚さ2.4cm、重量5.35gを測る。淡黄褐色を呈し、多孔質。水に浮く。

他に覆土中から1個体の土師器・甕胴部片と縄文土器片98点が検出された。



第15図 3号住居跡・出土遺物



4号住居跡（第16図、図版9）

遺構 調査区の中央部北端に位置し、1B56・57・66・67グリッドにかけて検出された。プランの中央を最近の擾乱溝が縱断している。今回調査された中では最大規模の住居跡であり、長軸推定6.45m、短軸6.00mの方形を呈する。主軸の方向はN-39°-E。検出面からの深さ34cmで床面に至る。遺存した部分での床面は、南東コーナー付近の一部を除いて堅緻であり、特に4本のピットに囲まれた内部において著しい。覆土は2層に分けられる。1・2：暗褐色土層。2は焼土粒、炭化粒及びローム粒を多く含む。炉は擾乱溝によって破壊されてしまったものと思われ、検出できなかった。ピットは5か所検査された。 $P_2 \sim P_4$ はいずれも深さ50cmを超えるもので、 P_1 も上部を擾乱溝によって破壊されてはいるが、同様の規模をもつものであったと思われる。また、住居床面の北東コーナー直近から貯蔵穴 P_5 が検出された。床面での規模は、長軸推定53cm、短軸50cmを測る隅円方形を呈するものと思われ、床面からの深さは29cmを測る。周溝は遺存する部分については全周する。幅15~20cmである。床面から2~3cm程浮いた状態で炭化材が検出された。また、床面には火熱を受けた痕跡が認められた。これらの状況は、本住居跡が火災を受けた被災住居である可能性を示唆していると思われる。

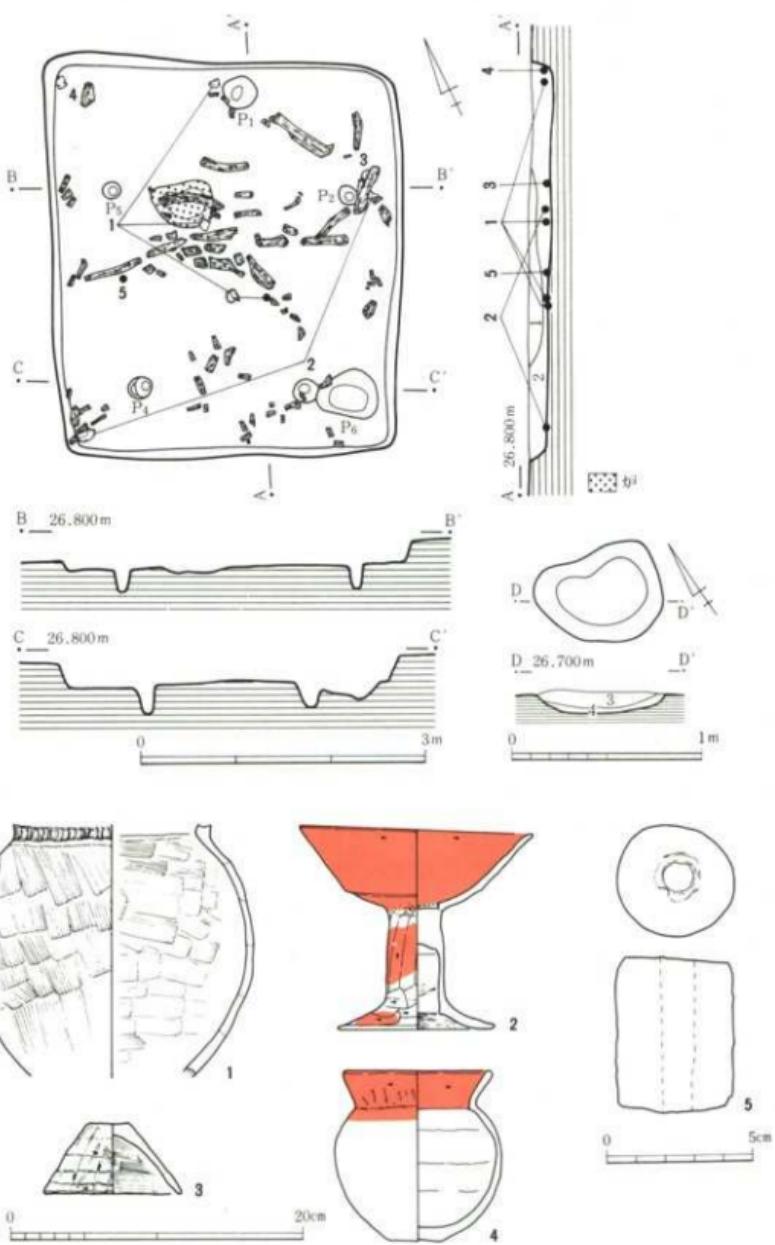
遺物 全く検出されなかった。

5号住居跡（第17図、図版10・11・21・25）

遺構 調査区のほぼ中央付近に位置し、1B63・64・73・74グリッドにかけて検出された。検出面でのプランは、長軸4.10m、短軸3.65mを測る方形を呈する。主軸の方向はN-24°-E。検出面からの深さ22cmで床面に至る。床面の遺存状況は良好であり、ピットに囲まれた内側の部分が堅緻で、特に炉の南側周辺において著しい。覆土は2層に分けられる。1・2：炭化粒を含む暗褐色土層。2は焼土粒も多く含む。炉は住居跡床面の中央よりやや北東に偏在する。床面での規模は、長径65cm、短径50cmを測る不整橢円形を呈し、床面からの深さ7cmを測る地床炉である。主軸の方向はN-51°-W。炉の覆土は2層に分けられる。3：ブロック状を呈する焼土層。4：焼土粒を多く含み、火熱を受ける褐色土層。ピットは6か所検出された。 P_1 は深さ50cmを超えるが、 $P_2 \sim P_4$ はいずれも30cm前後である。住居床面南東コーナーには、 P_5 の東側に上端プランを接する形で貯蔵穴 P_6 が検出された。床面での規模は、長径65cm、短径50cmを測る不整橢円形を呈し、床面からの深さは15.2cmを測る。周溝は検出されなかった。床面に火熱を受けた痕跡は認められなかったが、床面直上で多くの炭化材が検出された。床面中央付近で東西方向に直線的に連なるものが中心となるが、他は細かいものが多く、遺存状況も良くない。

遺物 覆土内及び床面直上から土器及び土製品が若干量出土した。

1は胸部中央位に最大径をもつ壺の胴部片である。頭部から胴下半部にかけて約1/3が遺存する。胴部最大径推定19.6cm。頭部には指頭状の押圧による刻み目を施し、輪横痕の残る胸部に



第17圖 5号住居跡・出土遺物

は内外面にハケ目状整形を行う。ハケ目の方向は、外面は下半部で縦位、上半部で斜位、内面は横位。内面には斑紋状の剥落及びスス状炭化物の付着がみられる。2は底部と体部の間の稜線が高く、細い筒状の脚部及び水平に開く裾部をもつ高杯である。坏部は住居南東コーナー直近、脚部はP₂東側と約4m離れて出土した。ほぼ完形。口径26.3cm、裾径10.9cm、器高13.7cm。坏部と脚部の接合は、坏底部外面を削った凹みに脚部を嵌めこむようにしたもので、薄くなつた坏底部には孔があき、脚頭部が見えている。裾部裏側にはハケ目状整形を行う。外面及び坏部内面に赤彩を施す。坏底部内面と外面の約1/4及び裾部から脚部にかけて黒色を呈する。また坏部内面には斑紋状の小剥落がある。3は台付壺脚部である。壺底部との接合痕は残さない。台上面はやや凹んでおり、器台的利用も考えられる。輪積による若干の凹凸がみられるが、概ね均整のとれた截頭円錐形を呈する。裾径9.6cm、器高4.7cm。外面は幅2mmほどの縦位のミガキが疊に行われ、内面は全面にハケ目状整形が施される。内外面ともくすんだ黒色を呈する。4は「く」字状に外反後、直線的に開く口縁部、球形の胸部及び小さく突出気味の底部をもつ小型の壺である。住居北西コーナー直近の壁際から出土。完形。口径10.4cm、底径3.7cm、器高11.3cmを測る。外面胸部直上にはヘラ状工具端痕が連続的に認められる。胸部内面には輪積痕が残る。口縁部から颈部にかけて内外面とも赤彩。色調は黒色。

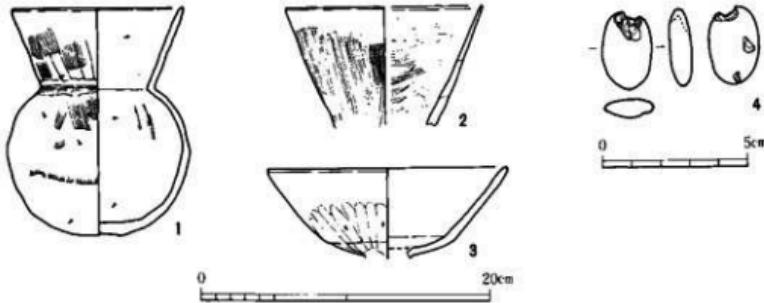
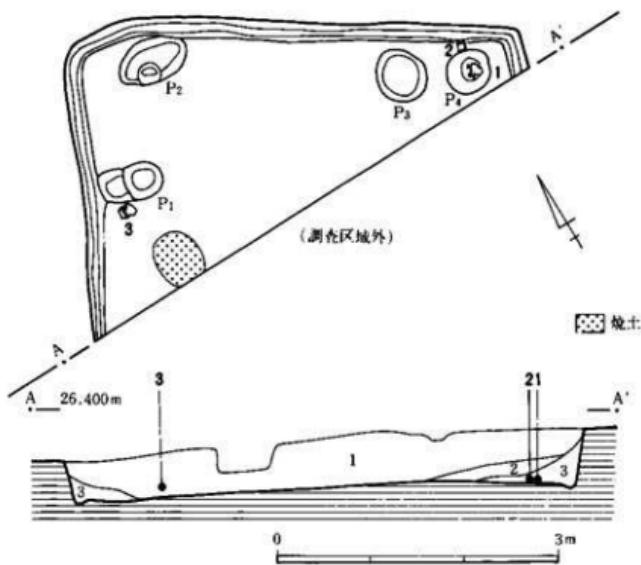
5は管状土錐である。完形。全長5.3cm。断面形は長径4.10cm、短径3.75cmを測る梢円形を呈し、ほぼ中央に孔径1.1cmの貫通孔がある。重量は94.6g。黒色を呈する。

他に覆土中より土師器では1個体の壺破片と高坏破片、及び繩文土器102片が検出された。

6号住居跡(第18図、図版11・21)

遺跡 調査区の西半部南側調査区域境界に位置し、1A97・98、2A07・08グリッドにかけて検出された。今回調査された遺構の中では最も西側にある。プランの南側1/2以上が調査区域外に拡がっているものと思われる、調査できたのは北側の一部のみである。検出面でのプランはNW-SE軸が4.85mを測る方形を呈し、検出面からの深さ51cmで床面に至る。床面は平坦で、中央付近から東側にかけて堅緻な面が検出された。壁はほぼ垂直に立ち上がる。覆土は3層に分けられる。1・2・3：暗褐色土層。1はローム粒、2は炭化粒、3は焼土粒を各々多く含む。炉は検出されなかった。住居床面の西側、P₁の南側に偏在して焼土が検出された。床面を掘りくぼめた痕跡はなく、また火熱を受けた面も検出されなかったことから炉ではないと思われる。最も厚い所でも僅か2~3cmほどであり、住居跡覆土断面図にも投影することはできなかった。ピットは4か所検出された。P₁~P₃はいずれも15~20cm前後の浅いものである。住居床面の北東コーナー直近から貯蔵穴P₄が検出された。床面での規模は、長径50cm、短径24cmを測る不整梢円形を呈し、深さ51cmを測る。周溝は調査した部分については全周する。幅15cm前後である。

遺物 覆土内及び床面直上より土器及び石器が検出された。



第18図 6号住居跡・出土遺物

1・2は「く」字状に外反後、直線的に開く口縁部をもつ壺である。1は貯蔵穴P₄内より出土した。口縁部及び胴上部約1/3を欠損する。口径推定12.0cm、底径2.6cm、器高15.3cm。胴中位に最大径をもつ。輪積痕を残す胸部は外面にハケ目状整形が若干みられ、内面にはヘラ状工具端痕がみられる。2は貯蔵穴の北側より出土。口縁部のみ約1/3が遺存する。口径推定13.8cm、内外面とも幅2~3mmほどのミガキが密に行われる。外面は縦位、内面は横位である。外面はミガキの間に斜位のハケ目が残る。色調は黒色を呈し、焼成は良い。3は小円盤状の底部から内湾気味に開く口縁部をもつ高環の壺部である。P₁の南側より出土。口径部約2/3を欠損す

る。口径推定17.0cm、遺存高6.1cm。坏底部外面を削った凹みに脚部を嵌めこんで接合したものと思われ、薄くなった底部には孔があいている。器面は内外面とも非常に粗れている。

4は長軸先端に抉状の剥離をもつ小蝶である。全長3.6cm、幅1.7cm、厚7.5mm。重量4.04g。剥離は片側先端の両面に行われ、非常に風化、磨滅している。石材はチャート。

他に、覆土内より土師器では4個体を数える甕破片と2個体を数える坏破片、及び縄文土器20片が検出された。

7号住居跡（第19図、表3、図版11・22・25）

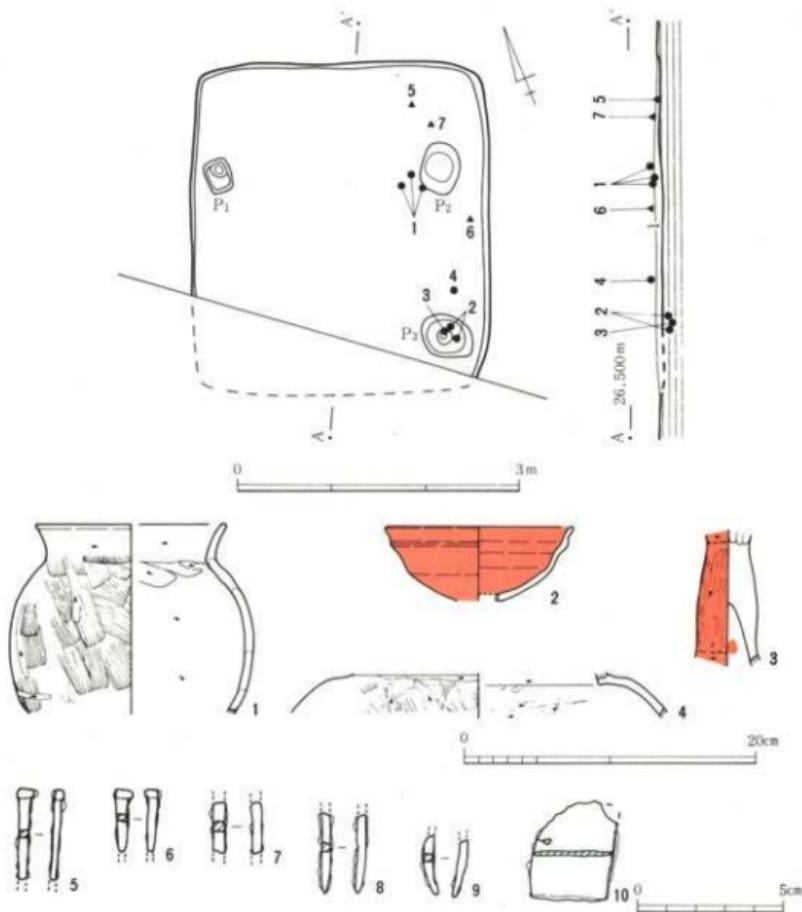
遺構 調査区の中央やや西寄りに位置し、1B51・52、61・62グリッドにかけて検出された。南側の一部は現在の農道による破壊が床面以下にまで及び、検出は不可能であった。住居プランは、長軸3.45m、短軸3.16mを測る比較的形の整った方形を呈するものと思われる。主軸の方向はN-23°-E。検出面からの深さ僅か7cmで床面に至る。床面は平坦であるが堅緻な面は検出されなかった。覆土は最下層のみ検出された。1：ローム粒を非常に多く含み、また焼土粒、炭化粒を若干混入する暗褐色土層。炉は検出されなかった。ピットは3か所検出された。床面からの深さは、P₁：20.8cm、P₂：12.5cmを測る。床面南東コーナーに近いと思われる所から貯蔵穴P₃が検出された。床面での規模は、長径53cm、短径48cmを測る不整橢円形を呈し、深さ20.8cmを測る。周溝は検出されなかった。

遺物 道路による擾乱の影響をうけたものを含めても遺物量は僅かである。

1は頸部の収縮がやや弱く、外湾気味に開く口縁部をもつ小型の甕である。P₃の東側から出土。口縁部から胴部にかけて約1/3のみ遺存。口径推定14.2cm、遺存高12.7cm。胴部中位に最大径をもつ。胴部外面は斜位のハケ目状整形の間に幅6mm前後のミガキが疎に施される。頸部内面には口縁部と胴部との接合調整痕が明瞭に残る。2はやや上げ気味の小さな底部と、強く外湾した外稜から外反気味に終わる口唇部をもつ坏である。外稜直下の内面には一段明瞭な内稜が巡る。貯蔵穴P₃内より出土。底部及び口縁部の一部を欠損する。口径13.0cm、底径推定2.1cm、器高5.0cm。内外面とも丁寧なナデによって仕上げられている。底部内面は器壁の粗れが著しい。全面に赤彩を施す。3は筒状の高坏脚部である。貯蔵穴P₃内より出土。遺存長9.2cm。外面は、縦位の細かいミガキと上下両端に鋭利な工具による刺突痕が連続的に施される。外面は赤彩、また内面の1か所には指頭大の赤彩が認められる。4は肩上部をおさえ気味に潰し、平坦に近い形にした甕の頸部から胴上部にかけての破片である。頸部内径推定16.7cm。内面はハケ目状整形後、部分的にミガキを施す。くびれ部内面は丁寧に磨かれ、平滑である。

5～10は住居検出面より出土した鉄製品である。釘及び不明の板状鉄製品であるが、いずれも本住居跡に直接伴うものではないと思われる。計測値を掲げるに留める。

他に土師器では2個体を数える甕破片と坏破片、また縄文土器10片、敲石が出土した。



第19図 7号住居跡・出土遺物

表3 7号住居跡鉄製品計測値

件名番号	製品名	遺存状況	計測値(cm)	重量(g)	備考
19-5	釘	先端部欠損	長 3.05 幅0.7 厚0.4 軸0.4 0.25	1.07	2つに折損
19-6	釘	先端部欠損	長 2.1 幅1.15 厚0.55 軸0.4 0.35	0.82	
19-7	釘	先端部欠損	長 1.75 幅0.5 厚0.35	0.94	
19-8	釘	幅部欠損	長 2.7 幅0.45 厚0.3	0.76	
19-9	釘	幅部欠損	長 2.0 幅0.45 厚0.3	0.43	
19-10	不明		長 3.4 幅3.0 厚0.2	2.59	孔径0.2×0.15(cm)

2. 土壌

表4 土壌一覧

遺構番号	時 期	規 模* (m)	形 性*	主軸方向*	備 考	調査時番号
1号土壌	縄文時代中期	長径 幅 厚 2.00 × 1.97 × 0.57	略円形	—		SK-17
2号土壌	縄文時代中期	1.36 × 1.26 × 0.18	不整円形	N-18.5°-E		SK-10
3号土壌	古墳時代中～後期	A 1.38 × 1.32 × 0.54	略円形	—	2基重複。Aの方が新しい。	SK-2
	不 明	B 1.75 × (1.65) × 0.17	橢円形	(N-64°-W)		
4号土壌	古墳時代後期	長径 1.75 × 0.75	円形	—		SK-4
5号土壌	古墳時代中～後期	長径 幅 厚 1.54 × 1.46 × 0.41	略円形	—		SK-12
6号土壌	古墳時代?	2.13 × 1.86 × 0.56	不整橢円形	N-46°-W		SK-3
7号土壌	不 明	2.42 × 2.10 × 0.22	不整形	N-32.5°-W		SK-5
8号土壌	不 明	2.05 × 1.85 × 0.47	不整円形	N-45°-W		SK-6
9号土壌	不 明	1.56 × 1.32 × 0.23	不整円形	N-8°-W		SK-8
10号土壌	不 明	A 1.42 × 1.22 × 0.57 B (1.76) × 1.35 × 0.30 (不整橢円形)	不整円形 N-9°-E	N-75°-W	2基重複。Aの方が新しい。	SK-14
11号土壌	不 明	0.92 × 0.75 × 0.22	不整円形	N-18°-E		SK-1
12号土壌	不 明	A 1.22 × 1.16 × 0.91 B 1.35 × (1.30) × 0.17	略円形 略円形	—	2基重複。Aの方が新しい。	SK-8 SK-20
		長径 幅 厚 1.39 × (0.50)				
13号土壌	不 明	上段 1.12 × 0.39 × 0.59 下段 1.22 × 0.32	橢円菱方形	N-77°-E		SK-13

* () 内は推定値

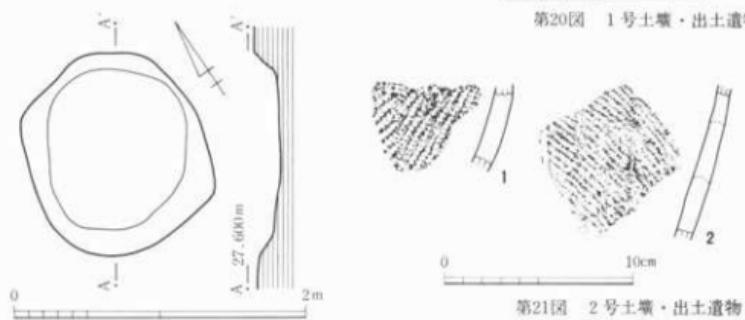
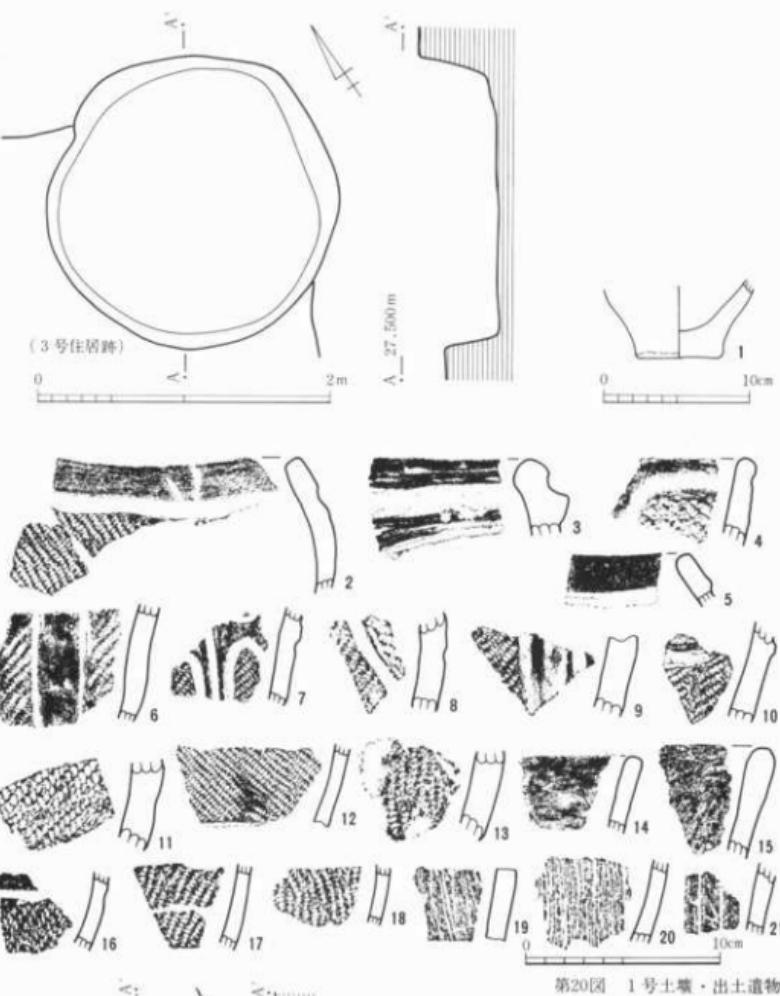
1号土壌 (第20図、図版10・17)

遺構 調査区の中央部やや南寄りに位置し、1B97グリッドから検出された。南側1/2以上を3号住居跡と切合っている。新旧関係は3号住居跡の方が新しく、検出面から深さ20cmほどのところに3号住居跡の貼床が構築されていた。検出面でのプランは、長径2.00m、短径1.97mを測る略円形を呈し、検出面からの深さ57cmで底面に至る。底面は平坦で堅緻。壁はほぼ垂直に立ち上がる。覆土は3号住居跡の貼床以下3層に分けられる。いずれもロームブロックを含む暗褐色土層。最上層はローム粒及び焼土粒を僅かに含み、最下層はローム粒を多く含んでいる。ロームブロックは下層ほど大きく、混入率も高くなる。

遺物 まとまったものはないが、覆土中より若干量検出された。

1は深鉢の底部片である。底径5.5cm。遺存部分に文様は認められない。

2・4~8・11~13・16は沈線による文様区画をもつもの。2・5・16は口縁部直下に幅広の沈線が巡り、沈線以上に磨消しによる無文部を形成する。2・16は沈線以下に地文の繩文がみられる。2の口縁部外面の無文部から沈線にかけて赤彩が残る。4は口縁部以下に非常に浅い沈線による逆U字状の区画をもち、区画外を磨消したもの。また、5は内外面ともに黒色を呈する。6~8・11~13は直線的あるいは曲線的な沈線を施した深鉢の腹部片である。6は2本の沈線間を磨消した磨消懸垂帯が垂下する。7は沈線によって上下2段に級位の長楕円区画



を描き、区画外を磨消したのもので、区画間には垂下する単沈線が配される。8は蛇行する沈線の両側に地文の繩文がみられる。地文は同一の原体を使用しながら、施文方向を変えることによって沈線を挟んで書き分けられている。3・9・10は隆帯による文様区画をもつもの。3は口縁部に断面「U」状の貼付隆帯が巡る。隆帯の両側には幅広の沈線が沿う。9・10は断面「~」状の曲線的な隆帯を施す。隆帯にはナゾリ状の沈線が沿い、2本の隆帯間には磨消無文帯が発達する。14・15は無文の口縁部片15は口唇部が肥厚し、内外面とも黒色を呈する。17・18は繩文を地文にもつもの。19・20は条線を地文にもつもの。21は遺存部に4本の平行する細沈線が施文され、より後出的な要素が窺える。繩文を地文にもつもののうち、12は単節LR、4・11・16は複節LRL、他はすべて単節RLを施文原体とする。

他に覆土中より繩文土器22片が検出されている。

2号土壙（第21図、図版12・17）

遺構 4号住居跡の東方約10m、1B59、69・1C50・60グリッドにかけて検出された。検出面でのプランは、長径1.26mを測る不整円形を呈する。主軸の方向N-18.5'-E。検出面からの深さ18cmで底面に至る。底面は若干凹凸がみられる。壁はやや傾斜をもって緩やかに立ち上がる。覆土はローム粒を含む暗褐色土で充填され、細かく分層することはできなかった。

遺物 拓影図を掲載した繩文土器片2点のみが検出された。

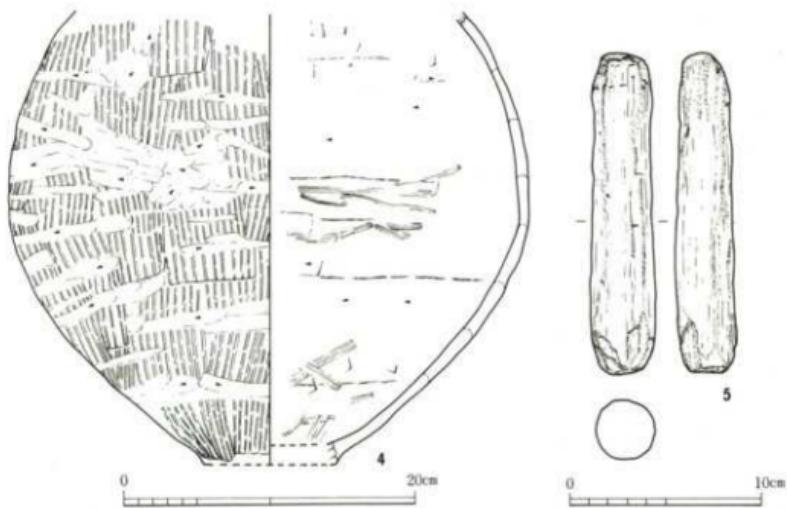
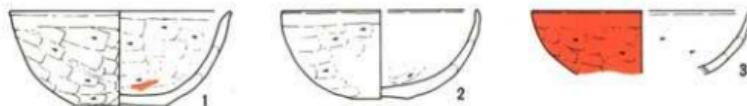
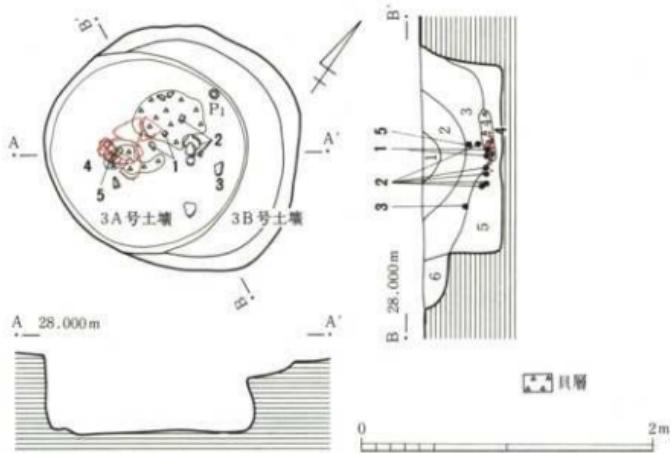
いずれも深鉢洞部片である。1は単節繩文RLを地文としてもつもの。2は沈線により区画された磨消懸垂帯が垂下するものと思われ、地文は単節繩文LR。器表面の磨滅が著しい。

3号土壙（第22図、図版12・22・23・25）

遺構 1号住居跡の南東約9m、1C95グリッドより検出された。2基の重複である。南西側の深いものをA、北東側の浅いものをBとする。新旧関係はAの方がBよりも新しい。

Aの平面プランは、長径1.38m、短径1.32mを測る円形を呈し、検出面からの深さ54cmで底面に至る。底面は平坦。壁は北壁の一部が僅かにオーバーハングするが、他の部分ではほぼ垂直に立ち上がる。覆土は5層に分けられる。1：ローム粒を多く含む黒色土層。2・3・5：暗褐色土層。2はローム粒を多く含み、層下位に炭化材が集中する。3は炭化粒を、5はロームブロックを各々若干含む。4：混貝土層。大型ハマグリを主体として、シオフキ、アカニシ等を暗褐色土中に含む。貝層は最下層の埋没後廃棄されたものと思われる。貝層下面からは同時に廃棄されたものと思われる大型の壺（第22図5）が破片状態で一括出土している。底面の北壁直下にはビットが検出された。ビットの規模は、直径7cmの略円形を呈し、深さ22cmを測る。

BはAによって1/2以上を破壊されてはいるが、長径1.75m、短径推定1.65mを測る不整円形を呈するものと思われる。主軸の方向は推定N-64'-W。遺存部の最も深いところで検出面から



第22図 3A・B 土壤・出土遺物

の深さ17cmを測る。底面には若干凹凸がみられる。壁はやや傾斜をもって立ち上がる。覆土は遺存した部分において単一層からなる。6：ローム粒を含む褐色土層。

遺物 いずれもAに伴うものであり、Bからは全く検出されていない。

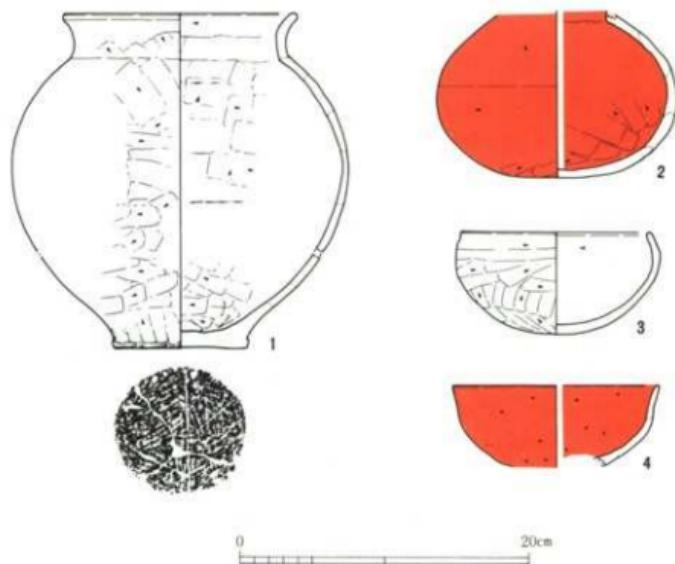
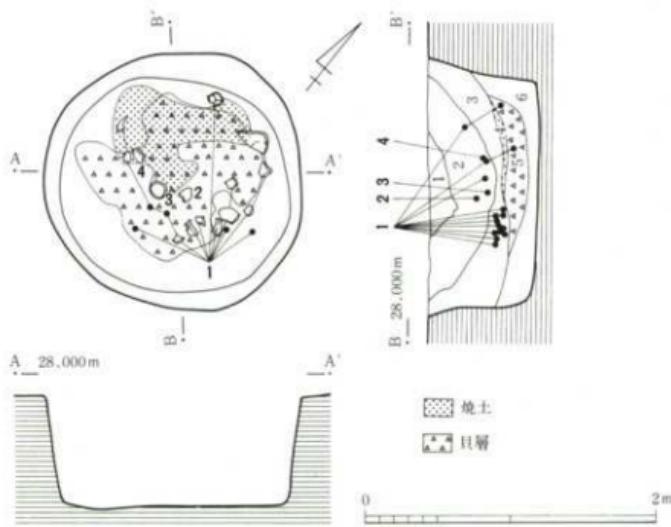
1・2は深めの体部をもつ壺である。1は内湾気味に立ち上がった体部に、軽く外反する口縁部をもつもの。底部は僅かに突出し、やや上げ底気味。貝層上面より出土。完形。口径15.4cm、底径6.4cm、器高6.4cmを測る。内外面ともヘラケズリ後ナデによって丁寧に仕上げられている。外面約1/4には煤の付着がみられ、底部内面の極めて小範囲には、恰も筆先で払ったような形の赤彩が認められる。2は小円盤状でやや上げ底気味の底部から内湾気味に立ち上がった体部に、小さく内湾気味の口縁部をもつもの。貝層上面及びほぼ同じレベルで出土。約1/2が遺存する。口径推定13.6cm、底径推定4.0cm、器高6.0cmを測る。内外面ともナデとミガキによる丁寧な仕上げで、底部には木端状工具によるナデ痕が認められる。3は浅めの体部に直立気味の口縁部をもつ壺である。口縁部から体部にかけて約1/4のみ遺存。口径推定15.2cm。口唇部の磨耗及び体部外面の粗が著しい。外面には赤彩痕が認められる。4は貝層下面より出土した大型の壺である。小さく突出すると思われる底部から最大径を中位にもつ球形の胴部にかけて約1/2のみが遺存し、收縮の強い頸部以上は欠損している。胴部最大径推定36.2cm、底径推定9.2cm、遺存高30.2cm。輪積痕の残る胴部は、外面に幾位のタタキが明瞭にみられ、タタキの上には多方向の指ナデが施される。また内面にはヘラ及び木端状工具によるナデが施される。胎土には径2~10mm大の白色を呈する小石粒を非常に多く含んでいる。

5は貝層上位約10cmから出土した石製品である。両端に僅かながら敲打痕が認められる。全長は16.3cm。断面形態は、くびれ部で2.7cm、最も太い部分で3.3cmを測る略円形を呈する。重量270.8g。石材は雲母片岩。片側の先端付近を若干窪ませ、不明瞭ながら把部と身部を区別したと思われる小型の石棒である。把頭部は略球形を意識して作られたものらしい。先端部は本来丸味をもっていたものと思われ、また身部は反っていない。石棒としては完形品かどうか判断しかねるが、確実に縄文時代の遺物であり、その後の人間達による諸々の行動様式の中で最終的な帰属時期を変えられてしまったものと思われる。

他に覆土中より2個体を数える土師器壺破片が検出された。

4号土壤（第23図、図版12・23）

遺構 1号住居跡の南約4m、1C84グリッドから検出された。検出面でのプランは直径1.75mの円形を呈し、検出面からの深さ75cmで底面に至る。底面は平坦で非常に堅緻。壁は底面からほぼ垂直に立ち上がる。覆土は6層に分けられる。1：黒色土層。2・3・6：暗褐色土層。2はローム粒を非常に多く含み、3の上位には炭化材が多く含まれる。また6はロームブロックを多く含み、人為的に埋戻された可能性も考えられる。4：焼土層。層上位に多くの炭化材



第23図 4号土壤・出土遺物

を含んでいる。5：純貝層。シオフキ、アカニシ等を極めて少量を含むだけで、ほとんど大型ハマグリからなる。貝層は最下層の埋没後、廃棄されたものと思われる。また貝層上面の焼土層も本土壙内で火が焚かれたものではなく、貝層同様廃棄されたものであろう。

遺物 貝層直上及び上位からある程度まとめて検出された。

1は下方に突出した底部と球形の胴部に、直立気味に立ち上がった後、緩やかに外湾する口縁部をもつ甕である。口縁部と底部は完存。胴部は約1/3のみ遺存する。口径15.6cm、底径9.0cm、器高推定22.8cm。最大径を胸部中位にもつ。口縁部内外面は丁寧なヨコナデ。輪積痕の残る胴部は、ヘラケズリ後ナデ。内面上半には部分的に縦位のミガキが加わり、また下半にはヘラ状工具端痕が明瞭に残る。突出した底部側面には指頭状の連続押捺が装飾的に施され、底面には木葉痕が認められる。2は最大径をやや偏平な胴部中位にもつ甕である。頸部以下約1/3のみ遺存。胴部最大径推定16.8cm。外面最大径付近は3cmほどの幅を横位の細かいナデが丁寧に施される。外面底部を除く全面に赤彩。3・4はやや深めの器高をもつ甕である。3は内湾する口縁部下にヨコナデによる弱い稜が巡るもの。口縁部約1/3を欠損。口径13.2cm、器高6.9cm、丸底。口縁部内面には左回りに開く放射状のナデが施される。4はヨコナデによる弱い外稜部を境に外湾気味に上方に開く口縁部をもつもので、約1/3のみ遺存。底部を欠損する。口径推定14.4cm。体部内面には左回りに開く放射状、あるいは縦位に細かいミガキが施される。

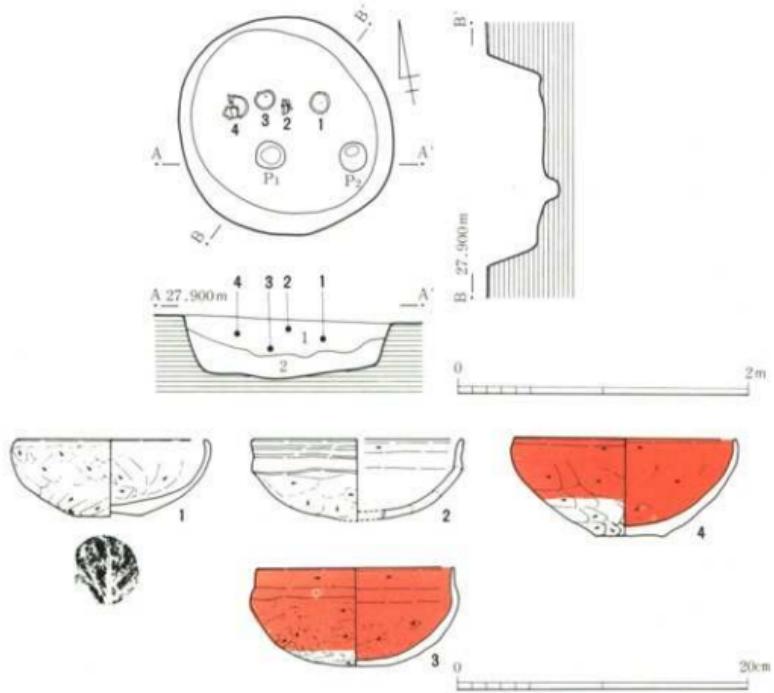
他に覆土内より、土師器では各々1個体の甕破片と坏片、及び繩文土器1片が検出された。

5号土壙（第24図、図版12・23）

遺構 1号壙の北約3m、1C91グリッドから検出された。検出面でのプランは、長径1.54m、短径1.46mを測る略円形を呈する。検出面からの深さ41cmで底面に至る。底面には若干の凹凸がみられる。壁はやや傾斜をもって立ち上がる。覆土は2層に分けられる。1・2：ロームブロックを含む暗褐色土層。ロームブロックの混入率は1の方が高い。覆土はいずれも人為的に埋戻された可能性が高い。底面南半部の2か所でピットが検出された。P₁は底面中央部よりやや南よりに位置する。底面の規模は、長径20cm、短径18cmの不整円形を呈し、深さ11cmを測る。P₂は南東壁際に位置する。底面での規模は、長径19cm、短径18cmの不整円形を呈し、深さ18cmを測る。

遺物 図示した4個体の坏がいずれも覆土下層が埋戻された後、ほぼ一列に並べられたような状態で検出された。

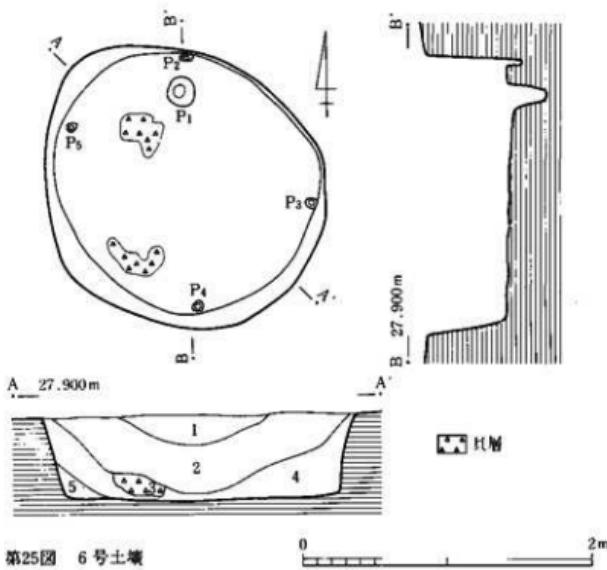
1は小さく突出した上げ底気味の底部から内湾気味に立ち上がる体部と、強く内湾して終る口縁部をもつもの。ほぼ完形。口径13.0cm、底径4.7cm、器高5.2cmを測る。外面は木葉痕を残す底面を上にすると、体下半部は右回りに開く放射状のミガキ、上半分は左回りに開く放射状のナデが施され、また内面は左回りに開く放射状の木端状工具によるナデが施される。外面の



第24図 5号土壌・出土遺物

約2/3と内面の約1/3は、器面が黒変している。2はやや浅い弧状の体部と、直立氣味に立ち上がり上方で僅かに外反する口縁部との間に稜をもつもの。約1/4のみ遺存。口径推定14.8cm。丸底。口縁部は丁寧なヨコナデが行われる。3はやや深めの体部と直立する口縁部との間に最大径を測る稜をもつもの。口縁部約1/3を欠損。口径13.8cm、器高6.6cmを測る。丸底。口縁部は内外面ともヨコナデ。体部内面には、多方向の細かいミガキが密に行われている。外面底部を除く全面に赤彩が施される。4はやや突出した上げ底氣味の小さな底部から内湾氣味に立ち上がるやや深めの体部と、直立する口縁部をもつもの。口縁部約1/3を欠損。口径15.4cm、底径4.7cm、器高6.6cmを測る。体部外面は調整が難で器面に凹凸が残り、底面は幅広の工具によるナデが行われている。また体部内面には、底部から口縁部方向に細かい不規則なミガキが疎に施される。外面体部上半以上及び内面全面に赤彩。

他に遺物は全く検出されなかった。



6号土塙（第25図、図版12）

遺構 1号住居跡の北約2m, 1C53・54・63・64グリッドにかけて検出された。検出面でのプランは、長径2.13m、短径1.86mを測る不整橢円形を呈する。主軸の方向はN-46°-W。検出面からの深さ56cmで底面に至る。底面は平坦で堅緻。壁はほぼ垂直に立ち上がる。覆土は5層に分けられる。1：ローム粒を非常に多く含む黒色土層。2・4：暗褐色土層。2はロームブロックを多く含む。3は混貝土層。大型ハマグリを主体として、シオフキ、オノガイ、アサリ、ツメタガイ等を暗褐色土中に含む。貝層は4の上面にレンズ状に堆積し、2か所の小ブロック状に検出された。5：褐色土層。底面の北壁寄りの位置に1か所(P₁)と壁際の4隅に各1か所ずつ(P₂～P₅)ピットが検出された。P₁は直径20cmを測る略円形を呈し、底面からの深さ26cmを測る。P₂～P₅はいずれも直径10cm以下の極めて小さなもので、略円形及び不整橢円形を呈し、深さ10～20cmを測る。

遺物 覆土中より若干量検出された。いずれも小片であり、実測図等を掲載することはできなかった。内容は、土師器が各々2個体を数える壺破片と壺破片、及び縄文土器3片。

7号土塙（第26図）

遺構 1号住居跡の東約3m, 1C75グリッドから検出された。検出面でのプランは、長径2.42m、短径2.10mを測る不整橢円三角形を呈する。主軸の方向はN-32.5°-W。検出面からの深さ22cmで底面に至る。底面はほぼ平坦。壁はやや傾斜をもって立ち上がる。覆土は2層に分けら

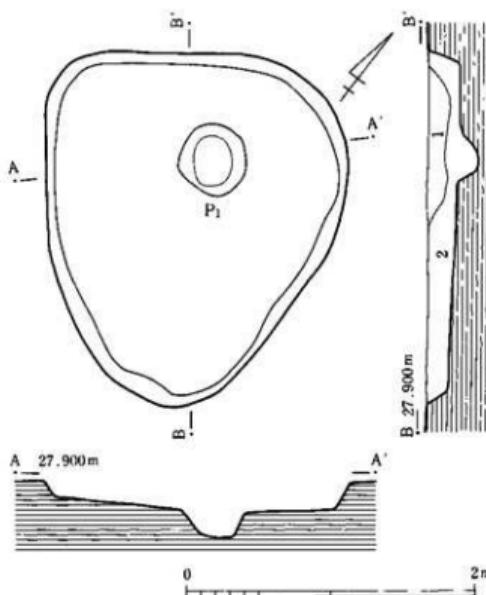
れる。1：暗褐色土層。2：褐色土層。底面のやや北寄りにピットが検出された。長径50cm、短径45cmを測る不整円形を呈し、深さ19cmを測る。

遺物 全く検出されていない。

8号土壙（第27図）

遺構 1号墳の北東約13m、1C94グリッドから検出された。検出面でのプランは、長径2.05m、短径1.85mを測る不整円形を呈する。主軸の方向はN-45°-W。検出面からの深さ47cmで底面に至る。底面には若干凹凸がみられる。壁はほぼ垂直に立ち上がる。覆土は4層に分けられる。1～3：ローム粒を含む暗褐色土層。ローム粒は下層ほど混入率が高く、2には焼土粒、3には炭化粒が各々僅かながら含まれる。4：ロームブロックを主体とする褐色土層。底面の南壁寄りには不整形のピットが検出された。底面での規模は、長径62cm、短径40cm、深さ27cmを測る。

遺物 全く検出されていない。



第26図 7号土壙

9号土壙（第27図、図版13）

遺構 1号住居跡の東約3m、1C77・87グリッドにかけて検出された。検出面でのプランは、長径1.56m、短径1.32mを測る不整円形を呈する。主軸の方向はN-80°-W。検出面からの深さ23cmで底面に至る。底面には凹凸がみられる。壁はやや傾斜をもって立ち上がる。覆土は単一層からなる。1：ローム粒、炭化粒を僅かに含む暗褐色土層。

遺物 全く検出されていない。

10号土壙（第27図、図版13）

遺構 1号墳の北西約7m、1B99グリッドから検出された。2基の重複である。北側の深いものをA、南側の浅いものをBとする。新旧関係はAの方がBよりも新しい。

Aの検出面でのプランは、長径1.42m、短径1.22mを測る不整円形を呈する。主軸の方向は

N-75°-W。検出面からの深さ57cmで底面に至る。底面は平坦で堅緻。壁はやや傾斜をもって立ち上がり、底面から30cm前後の部分で小さな傾斜の変換点をもつ。覆土は3層に分けられる。1：ローム粒を多く含む黒色土層。2・3：ロームブロックを多く含む暗褐色土層。ロームブロックは3の方が大きく、混入率も高い。

BはAによって1/2以上を破壊されているが、長径推定1.76m、短径1.35mを測る不整梢円形を呈するものと思われる。主軸の方向は推定N-9°-E。検出面からの深さ30cmで底面に至る。底面は平坦。壁はやや傾斜をもって立ち上がる。覆土は遺存した部分では単一層から成り、分層することはできなかった。4：ロームブロックを多く含む暗褐色土層。底面の南壁際からはピットが検出された。底面での規模は直径37cmの略円形を呈し、深さ20cmを測る。

遺物 A・Bともに全く検出されていない。

11号土壤（第27図、図版13）

遺構 3号土壤の南東約8m、1C97グリッドから検出された。検出面でのプランは、長径0.92m、短径0.75mを測る不整円形を呈する。主軸の方向はN-18°-E。検出面からの深さ22cmで底面に至る。底面には凹凸がみられる。壁は傾斜をもって緩やかに立ち上がる。覆土は3層に分けられる。1：ローム粒を多く含む暗褐色土層。2・3：褐色土層。2はロームブロックを、3はローム粒を各々多く含んでいる。底面の北壁際にはピットが検出された。ピットの規模は直径32cmを測る円形を呈し、底面からの深さ20cmを測る。

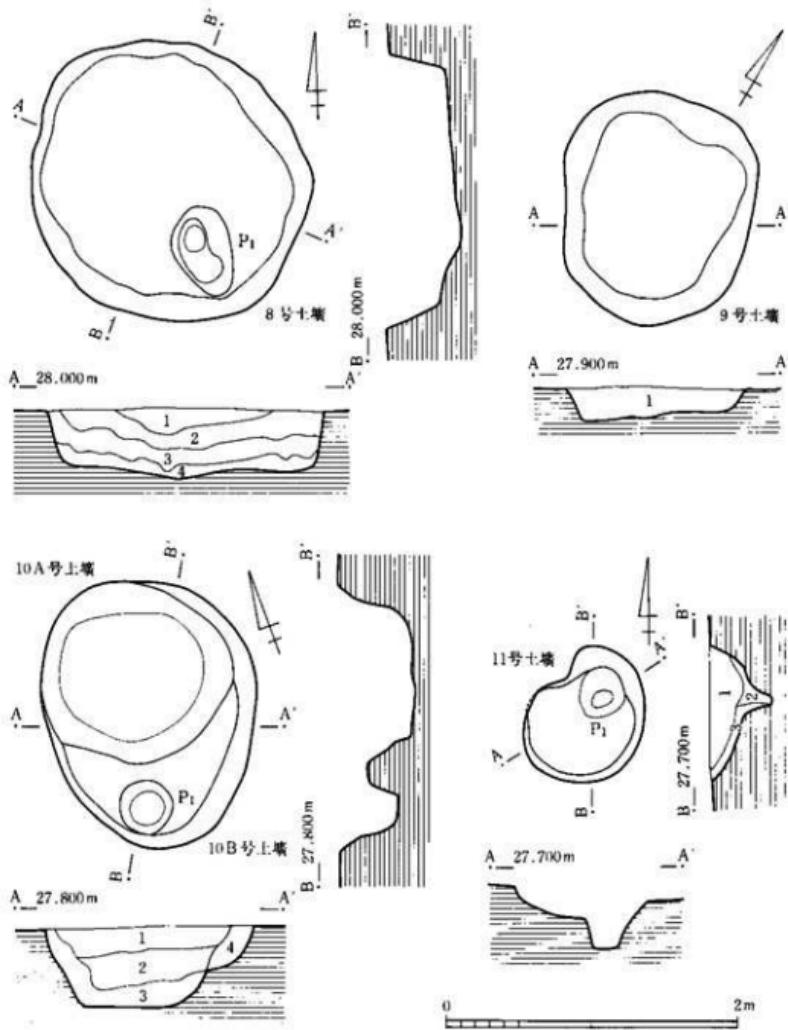
遺物 全く検出されていない。

12号土壤（第28図、図版12）

遺構 1号住居跡の東約18m、1C68・78グリッドにかけて検出された。今回調査された遺構の中では最も東側にある。2基の重複である。南西側の深いものをA、北東側の浅いものをBとする。新旧関係はAの方がBよりも新しい。

Aの検出面でのプランは、長径1.22m、短径1.16mを測る略円形を呈し、検出面からの深さ91cmで底面に至る。底面は平坦で堅緻。壁は南東側でやや傾斜をもつが、他はほぼ垂直に立ち上がり、西側では底面から10cm前後の部分に小さな段をもつ。覆土は8層に分けられる。1・8：ロームブロックを多く含む黄褐色土層。2・5・7：暗褐色土層。7にはローム粒が多く含まれている。3・4：焼土粒を多く含む暗褐色土層。やや砂質。6：黒色土層。

Bは平面プランの約1/4をAによって破壊されているが、長径1.35m、短径推定1.30mを測る略円形を呈し、検出面からの深さ17cmで底面に至る。壁はやや傾斜をもって立ち上がる。覆土は3層に分けられる。9：焼土粒を多く含む暗赤褐色土層。粒子は細かく、やや粘質。10：暗褐色土層。11：ロームブロックを多く含む黄褐色土層。



第27図 8,9,10A・B,11号土壙

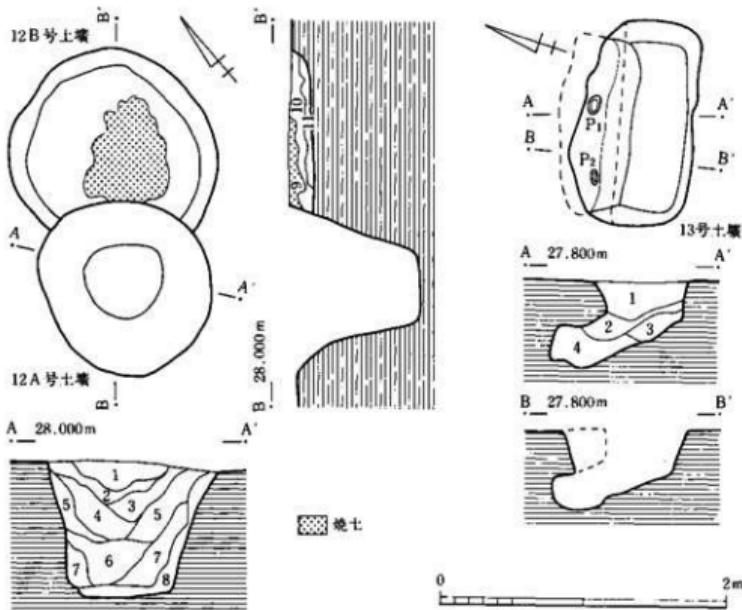
遺物 覆土中より若干量検出された。いずれも小片であり、実測図等を掲載することはできなかった。内容は、土師器ではAから3個体を数える壺破片及び各々1個体の壺破片と壺破片、Bから各々1個体の壺破片と壺破片が検出された。またAの覆土中からは縄文土器の小片3点も検出されている。

13号土壌（第28図、図版13）

遺構 1号墳の北約6m, 1C91グリッドから検出された。底面が2段に掘りこまれ、下段が一方の側壁下に掘りこまれる半地下式の形態をもつ土壌である。本例のような形態をもつ土壌の調査例は最近多くなっており、「有天井土壌」なる名称も与えられている¹。検出面でのプランは、長軸1.39m、短軸推定0.50mを測る隅円長方形。主軸の方向はN-77°-E。検出面からの深さは、底面上段までが43cm、下段までが59cmを測り、段差は16cmである。底面上段は、長軸1.12m、短軸0.39mを測る略長方形を呈し、下段に向かってやや傾斜をもつ。下段は長軸1.22m、短軸0.32mを測り、奥壁側がやや広がる不整梯形を呈する。ほぼ平坦。奥壁は、検出面での北側推定プラン直下より奥行き推定35~42cmを測る。下段にはピットが2か所検出された。ピットの底面での規模はいずれも直径、深さともに15cm以下の小規模のものである。壁はオーバーハングしている北壁を除いてほぼ垂直に立ち上がる。覆土は4層に分けられる。1・2・4: 暗褐色土層。4はローム粒を多く含んでいる。3: ロームブロックを主体とする褐色土層。

遺物 全く検出されていない。

1 渡辺修一 「「群小区画墓」の終焉期(2)ー「方形周溝遺構」における埋葬施設の新例とその検討ー」
「研究連絡紙」第14号 (財)千葉県文化財センター、1985



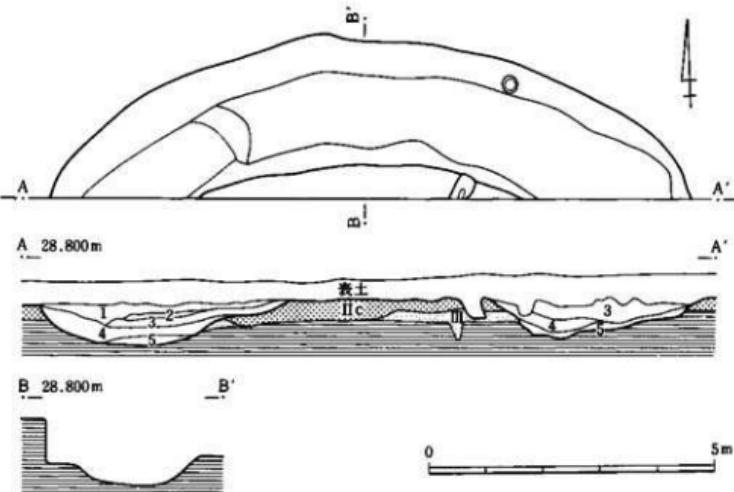
第28図 12A・B, 13号土壌

3. 古墳

1号墳 (第29図、図版13)

遺構 調査区の東半部、南側調査区域境界に位置し、2C00・01グリッドにかけて検出された。現地表面での観察では、墳丘等の高まりは全く認めることができなかった、遺構の大部分は、南側の調査区域外に拡がっているものと思われ、調査することができたのは周溝の一部にすぎないが、直径約18mの円墳の存在が推定される。調査した範囲内では主体部は検出できなかつた。周溝外側の北約6mの位置に13号土壙があり、本墳の外部主体部である可能性も考えられる。周溝は、検出面での幅2~2.2mを測り、II c層上面からの深さ25~50cmを測る。周溝底面は整ったものではなく、凹凸が多くみられた。また10cmほどの段差を測る段があり、そのため周溝は東側が浅く、西側が深いものになっている。周溝壁面及び周溝内面に各々1か所ピットが検出されたが、本墳との直接の関係は認められない。周溝の覆土は5層に分けられる。1~3：黒色土層。1は黒色土ブロックを主体とし、3はローム粒を多く含む。4・5：暗褐色土層。4は焼土粒を多く含む。5は直径30mm大のロームブロックが非常に密に含まれ、埋戻し等による人為的堆積の要素が窺える。周溝内側にはII c層の堆積がみられ、旧表土の様相を呈しているが、旧表土はより上位に堆積していたものに求める方が妥当と思われる。

遺物 周溝覆土内より土師器では3個体を数える壺破片、1個体の台付壺破片と塙破片が検出された。出土状況より本跡に直接伴うものではなく、いずれも小片のため実測図等掲げていなない。他に縄文土器88片、土器片錐1点(第50図-2)が検出された。



第29図 1号墳

IV. 包含層出土の遺物

1. 先土器時代

(1) 第1文化層の遺物

III層出土の遺物である。総数195点の遺物が相互に近接した3ブロックから検出された。

表5 第1文化層母岩別資料内訳

母岩 番号	石質	石槍	雨器	彫器	石錐	彫形 石器	石核	剝片	削片	破	総数	数量比 (%)	純重量 (g)	重量比 (%)	関連ブロック
1	珪化岩		2	1			2	10	20	35	18.3	375.64	23.77	1・2・3・ブロック外	
2	珪化岩		1					15	22	38	19.8	88.69	5.61	1・2・3	
3	珪化岩			1				11	13	25	13.0	37.28	2.35	2・ブロック外	
4	珪化岩							7	1	8	4.1	25.86	1.63	2	
5	安山岩							6		6	3.1	82.35	5.21	2・3	
6	珪化岩		1				1	2		4	2.0	274.30	17.36	3	
7	珪化岩	I					2	1	1	5	2.6	82.47	5.22	2・3	
8	珪化岩						1			1	0.5	9.28	0.58	2	
9	珪化岩								1	1	0.5	1.59	0.10	2	
10	珪化岩							1		1	0.5	1.30	0.08	2	
11	安山岩							2		2	1.0	23.50	1.48	遺構内・ブロック外	
12	珪化岩							1		1	0.5	11.47	0.72	2	
13	水晶				1				1	2	1.0	10.41	0.65	1・2	
14	珪化岩								4	4	2.0	1.01	0.06	2・3	
15	珪化岩			1						1	0.5	4.70	0.29	3	
16	安山岩						1	1		2	1.0	0.49	0.03	2	
17	珪化岩	I								1	0.5	1.10	0.06	2・3	
18	珪化岩			1						1	0.5	38.91	2.46	2	
19	珪化岩		1					1		2	1.0	6.78	0.42	2	
20	珪化岩				1					1	0.5	12.61	0.79	2	
21	珪化岩							14	1	15	7.8	65.69	4.15	1・2・3	
22	珪化岩							8		8	4.1	27.00	1.70	3	
23	珪化岩							3	4	7	3.6	5.68	0.35	2・3	
24	珪化岩							1		1	0.5	18.40	1.16	3	
25	珪化岩									6	6	3.1	12.00	0.75	遺構内・ブロック外
26	珪化岩									3	3	1.5	13.61	0.86	2・3
27	砂岩							1		1	2	1.0	1.809	0.11	2
28	珪化岩								2		2	1.0	29.20	1.84	遺構内
29	珪化岩						1	1		2	1.0	88.80	5.62	遺構内	
30	珪化岩						1			1	0.5	67.70	4.28	遺構内	
31	珪化岩						1			1	0.5	31.00	1.96	遺構内	
32	珪化岩						1			1	0.5	62.90	3.98	遺構内	
33	珪化岩						1			1	0.5	66.20	4.19	遺構内	
計		1	8	2	1	1	11	88	69	10	191	100	1,579.729	100	

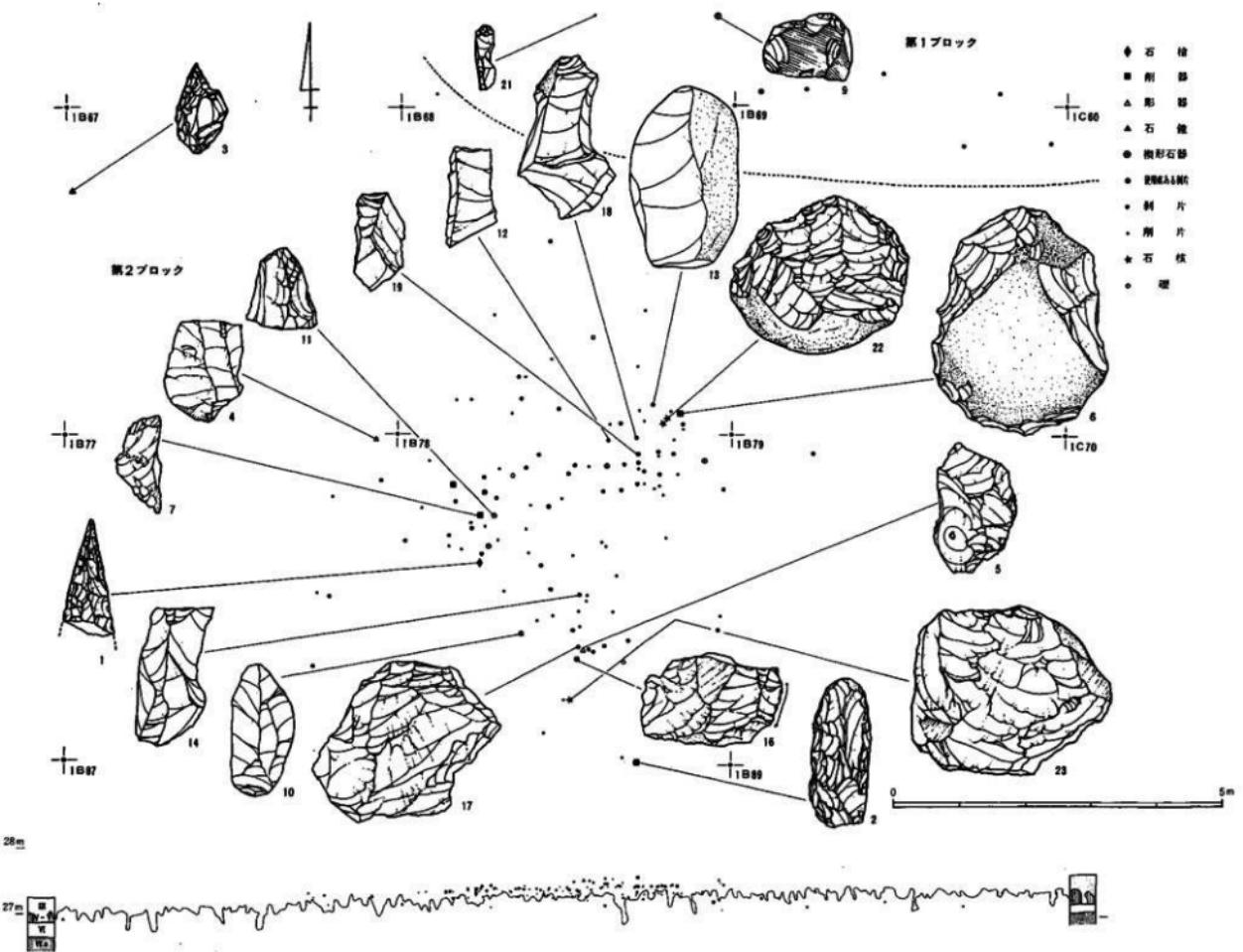
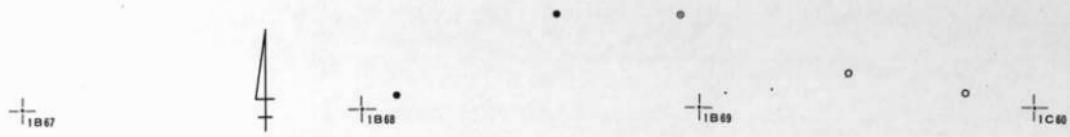
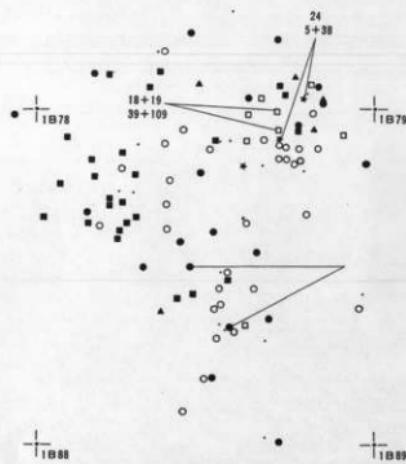


図30 図 第1-2ブロック遺物出土状況



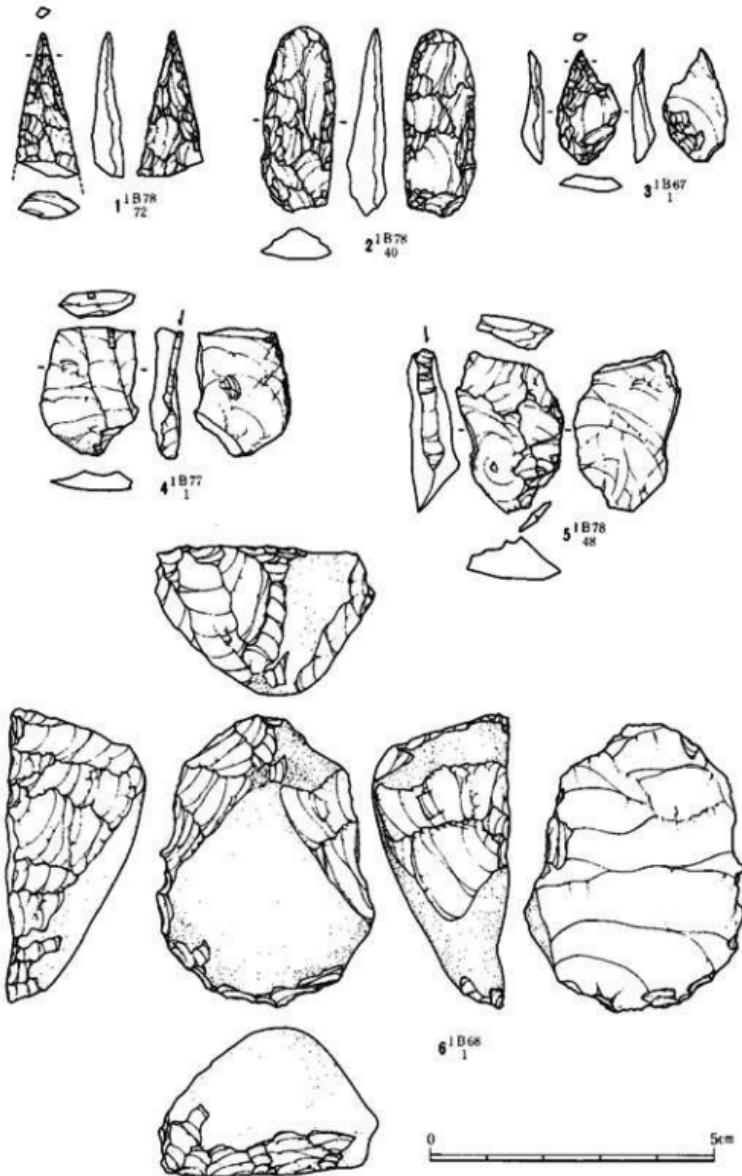
母岩番号

- 1
- 2
- 3
- 4
- ▲ 5
- △ 6
- ★ 7
- 8-33

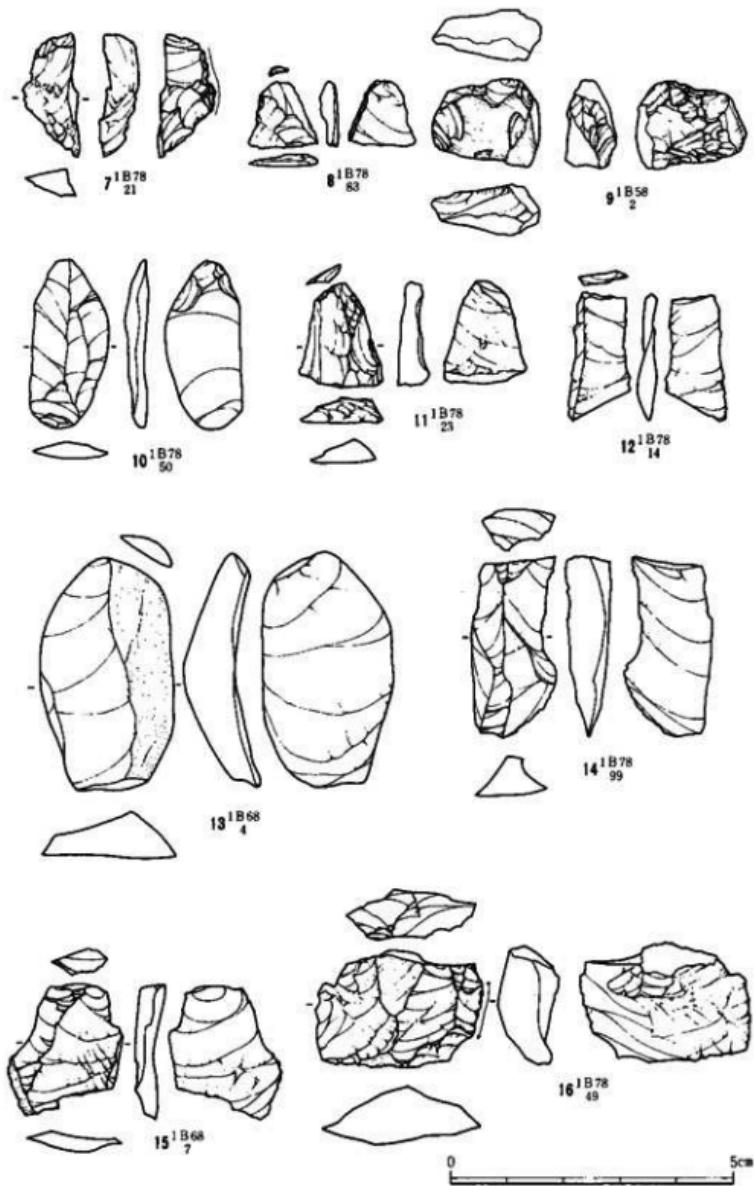


*後合資料の数字は_後図番号を表わす。

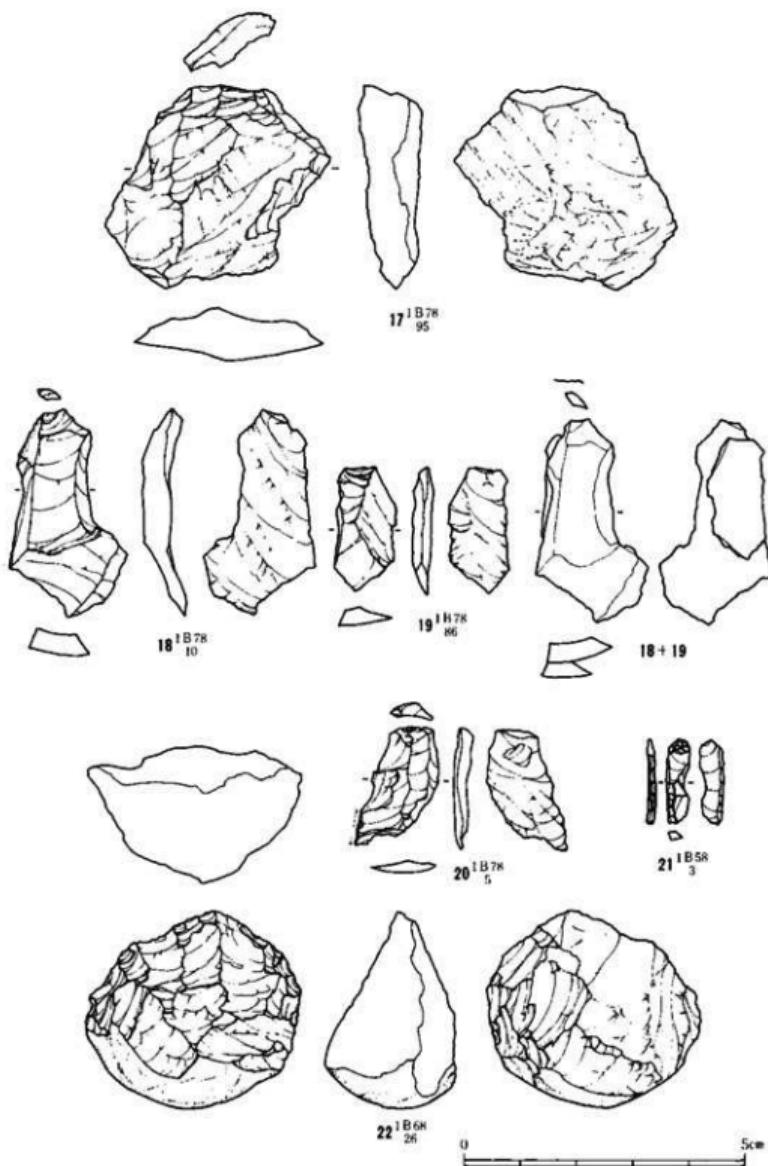
0 5m
第31図 第1-2ブロック母岩別分布状況



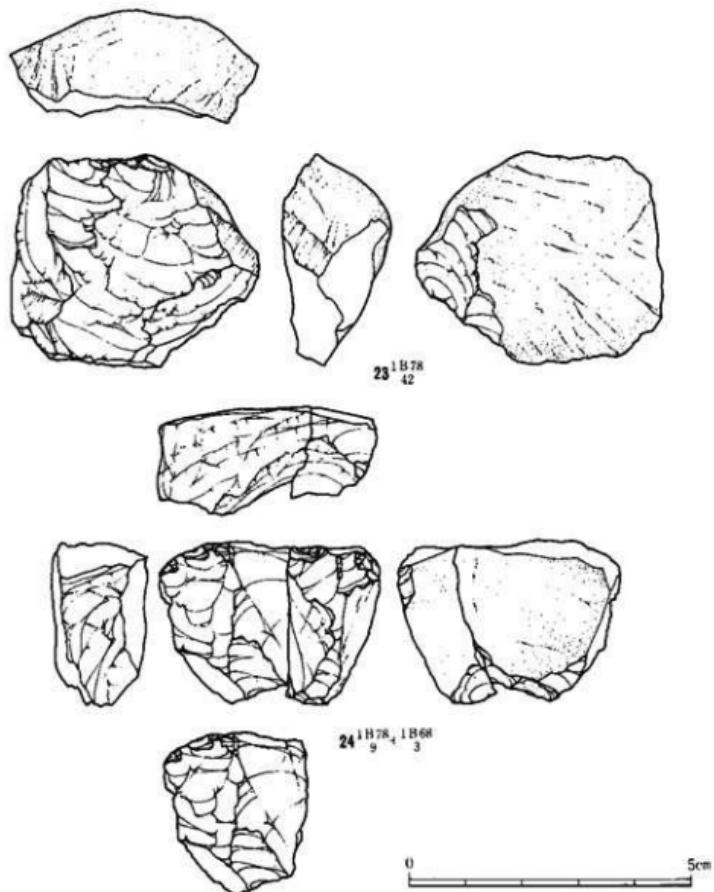
第32図 第1-2ブロック出土遺物(1)



第33図 第1・2ブロック出土遺物(2)



第34図 第1・2ブロック出土遺物(3)



第35図 第1-2ブロック出土遺物(4)

表6 第1ブロック遺物属性

No.	遺物 No.	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	面	打面	打角	背面構成	先端形状	使用痕	折れ面部位	石質	母岩	備考
1	1B58-2	楔形石器	23 × 28 × 14	10.37	9							水晶	13	
2	1B58-3	剥片	22 × 6.5 × 2	0.31	21							珪化岩	1	
3	1B59-1	使用痕ある剥片	19 × 20 × 5	1.57	ハジケ	—	L-1		H	+	—	珪化岩	21	
4	1B59-2	剥片	19 × 18 × 5	1.26	ハジケ	—	H-4		F	—	—	珪化岩	21	
5	1B59-3	剥片	23 × 34 × 11	6.02	1-0	—	B-1→R-1		F	—	—	珪化岩	2	
								→H-1						
6	1B59-4	剥片	31 × 37 × 14	14.70	1-0	115°	H-3		H	—	—	珪化岩	2	

No.	遺物 No.	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	回	打面	打角	背面構成	支溝形状	使用裏	折れ面部位	石質	母岩	標号
7	1B69-2	剝片	20 × 22 × 4.5	1.50		ハジケ	-	不明(断面)-1 → R-1 → L-1	F	-	-	珪化岩	2	
8	1B69-3	剝片	36 × 45 × 17.5	16.70			108°	-				珪化岩	21	

表7 第2ブロック遺物属性

No.	遺物 No.	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	回	打面	打角	背面構成	支溝形状	使用裏	折れ面部位	石質	母岩	標号
1	1B54-4	剝片	14 × 12.5 × 4	0.41								珪化岩	1	
2	1B67-1	石器	30 × 17 × 4.5	2.15	3							珪化岩	1	
3	1B68-1	端削器	73 × 58 × 35.5	157.00	6							珪化岩	1	
4	1B68-2	剝片	6 × 6 × 2.5	0.23								珪化岩	4	
5	1B68-3	石核	41.5 × 45.5 × 25	52.78	24							珪化岩	7	
6	1B68-4	剝片	60 × 35 × 21	35.21	13	1-0	116°	C → H-2	F	不明	-	安山岩	5	
7	1B68-5	剝片	10.5 × 6 × 1.5	0.12								珪化岩	3	
8	1B68-6	剝片	8 × 11.5 × 1.5	0.10								珪化岩	3	
9	1B68-7	剝片	38 × 29 × 6.5	4.95	15	1-0	82°	C → H-2	F	-	-	珪化岩	4	
10	1B68-8	剝片	7 × 12 × 1.5	0.08								珪化岩	1	
11	1B68-10	剝片	18 × 13.5 × 2.5	0.53								珪化岩	1	
12	1B68-11	剝片	15 × 16 × 6	0.85								珪化岩	1	
13	1B68-12	剝片	47 × 29 × 8	9.33		ハジケ	-	不明-3 → R-1 → H-1	F	不明	-	安山岩	5	
14	1B68-13	剝片	6 × 11.5 × 3.5	0.16								珪化岩	2	
15	1B68-14	剝片	31 × 24 × 4	1.53		2-0	-	H-3	F	-	-	珪化岩	21	
16	1B68-15	剝片	26 × 22 × 3	1.61		3-0	-	不明(断面)-1 → H-2	-	-	t-B	珪化岩	3	
17	1B68-16	剝片	14 × 13 × 4	6.46								珪化岩	3	
18	1B68-17	剝片	10.5 × 9 × 1.5	0.09								珪化岩	3	
19	1B68-18	剝片	15 × 17.5 × 1.5	0.48								珪化岩	1	
20	1B68-19	剝片	10 × 12 × 2	0.19								珪化岩	2	
21	1B68-20	剝片	6 × 8.5 × 4	0.18								珪化岩	1	
22	1B68-21	器	19 × 10 × 7	1.34								珪化岩	26	
23	1B68-22	剝片	17 × 11 × 5.5	0.89								珪化岩	14	
24	1B68-23	剝片	19 × 16 × 4	1.27		1-0	115°	C → H-2	-	-	t-B	珪化岩	1	
25	1B68-25	剝片	23 × 14 × 4	0.99		不明	-	不明-2	F	不明	-	安山岩	5	
26	1B68-26	石核	46 × 58 × 35	9.28	22							珪化岩	8	
27	1B69-4	剝片	18 × 25 × 5.5	1.74		ハジケ	-	不明(断面)-1 → L-2				珪化岩	2	
28	1B77-1	毛器	33.5 × 25 × 7	6.26	4							珪化岩	1	
29	1B77-2	剝片	8 × 12 × 1.5	0.12								珪化岩	1	
30	1B77-3	剝片	9 × 9.5 × 2.5	0.14								珪化岩	1	
31	1B77-4	剝片	7 × 22 × 3.5	0.82		-	-	H-1	-	-	t-H+t-B	珪化岩	21	

No.	遺物 No.	分類	長×幅×厚 (mm)	重(g)	固	打面	打角	背面構成	表面形状	使用痕	折れ面部位	石質	母岩	備考
32	1B78-5	剝片	20 × 13 × 5	1.06		2-0	-	H-2			v-R	珪化岩	23	
33	1B78-2	剝片	23 × 12 × 4	0.72		-	-	L-2	F	-	t-H	珪化岩	1	
34	1B78-4	剝片	16 × 13 × 4	0.92		3-2	112°	H-2	H	-	-	珪化岩	1	
35	1B78-5	使用痕ある剝片	23 × 17 × 6.5	3.21	29	1-0	133°	不明-2→L-2	F	+	-	珪化岩	4	
								→ H-5						
36	1B78-7	剝片	7.5 × 1.9 × 3	0.45		ハジケ	-	不明-1→B-1	F	-	-	珪化岩	2	
37	1B78-8	剝片	22 × 21 × 4.5	1.26		-	-	不明-2→L-1	F	-	-	珪化岩	2	
38	1B78-9	石核	43 × 25 × 21.5	19.75	24							珪化岩	7	
39	1B78-10	剝片	54 × 31 × 7.5	10.60	18	1-0	110°	C→R-1→B-2	F	-	-	珪化岩	4	
								→ H-2						
40	1B78-11	剝片	24 × 21 × 2	1.30		1-0	110°	L-1→H-1	F	-	-	珪化岩	10	
41	1B78-12	使用痕ある剝片	24 × 13 × 4	1.12		-	-	C→H-2	-	+	t-H+t-B	珪化岩	4	
42	1B78-14	剝片	33 × 16.5 × 3	1.79	12	-	-	H-2	F	-	t-H	珪化岩	4	
43	1B78-16	剝片	10.5 × 18 × 3	0.49								安山岩	16	
44	1B78-17	剝片	15 × 20 × 3.5	0.27		ハジケ	-	H-2→B-1	F	-	-	珪化岩	3	
								→ R-2						
45	1B78-18	剝片	15 × 13 × 1.5	0.32		-	-	R-2	F	-	t-H	珪化岩	3	
46	1B78-19	剝片	22 × 15 × 4.5	1.41		1-0	90°	C→B-1→R-2	F	-	-	珪化岩	2	
47	1B78-20	使用痕ある剝片	19.5 × 24 × 7	2.78		1-0	99°	不明(鉛垂面)-1	F	+	-	珪化岩	2	
								→ H-2						
48	1B78-21	削器	31.5 × 15 × 7.5	3.01	7							珪化岩	19	
49	1B78-22	剝片	40 × 32 × 6	5.64		P	96°	不明(鉛垂面)-1	F	-	-	珪化岩	3	
								→ H-3						
50	1B78-23	使用痕ある剝片	21.5 × 27 × 7	3.77	11	1-0	112°	R-2→L-2	-	+	t-B	珪化岩	19	
51	1B78-24	剝片	17.5 × 11 × 2	0.35								珪化岩	2	
52	1B78-25	剝片	12.5 × 16 × 3	0.40								珪化岩	1	
53	1B78-26	剝片	6.5 × 2.2 × 4.5	0.41								珪化岩	2	
54	1B78-27	剝片	7 × 9 × 1	0.04								水晶	13	
55	1B78-28	剝片	18.5 × 16 × 2	0.50		2-0	114°	B-1→H-2	F	-	-	珪化岩	2	
56	1B78-29	剝片	53 × 28.5 × 17.5	7.26		2-0	91°	不明-6	F	不明	-	安山岩	5	
57	1B78-30	剝片	28 × 18.5 × 5.5	2.61		1-0	81°	C→H-2	F	-	-	珪化岩	1	
58	1B78-31	剝片	8 × 10.5 × 1.5	0.09								珪化岩	2	
59	1B78-32	剝片	31 × 28 × 12.5	6.61		1-0	134°	B-1→H-1	F	-	-	珪化岩	7	
60	1B78-33	剝片	22 × 10 × 2	0.34		2-0		H-3	F	-	-	珪化岩	2	
61	1B78-34	剝片	10 × 8 × 1	0.06								珪化岩	21	
62	1B78-35	剝片	13.5 × 23 × 2.5	0.59		-		L-1→H-2	F	-	t-H	珪化岩	3	
63	1B78-36	剝片	19 × 28 × 6.5	2.79		4-1	107°	不明(鉛垂面)-1	-	-	t-B	珪化岩	3	
								→ H-1						
64	1B78-37	剝片	17 × 10 × 1.5	0.17								珪化岩	3	
65	1B78-38	剝片	11 × 9.5 × 1.5	0.12								珪化岩	2	
66	1B78-39	剝片	14.5 × 14 × 3	0.41								珪化岩	14	

No.	遺物 No.	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	図	打面	打角	背面構成	末端形状	使用痕	折れ面部位	石質	母岩	備考
67	1 B78-40	削器	49 × 19 × 9	9.20	2							珪化岩	1	
68	1 B78-41	剥片	18 × 10 × 3.5	0.39								珪化岩	2	
69	1 B78-42	石核	56 × 68 × 25	109.20	23							珪化岩	1	
70	1 B78-43	礫	26 × 25 × 11.5	5.77								珪化岩	26	
71	1 B78-44	剥片	25 × 21 × 3.5	1.38	2-0	90°	不明→H-2	F	-	-		珪化岩	1	
72	1 B78-45	剥片	18 × 19 × 3.5	0.99	1-0	118°	不明→H-3	F	-	-		珪化岩	4	
73	1 B78-46	剥片	13 × 14 × 3	0.60	1-0	100°	H-4	-	-	t-B		珪化岩	2	
74	1 B78-47	剥片	27.5 × 18 × 10	4.43	1-0	112°	不明→H-3	F	-	-		珪化岩	1	
75	1 B78-48	磨薙	42 × 27 × 13	12.61	5							珪化岩	20	
76	1 B78-49	使用痕ある剥片	46 × 31 × 14.5	18.59	16	3-1	122°	不明(節理面)-2 →B-1→H-3	F	+	-	珪化岩	2	
77	1 B78-50	2次加工ある剥片	43 × 20.5 × 6.5	5.46	10	-	H-4	-	不明	-		安山岩	5	
78	1 B78-51	剥片	10 × 14 × 2.5	0.33								珪化岩	1	
79	1 B78-52	剥片	7.5 × 8 × 1	0.05								珪化岩	3	
80	1 B78-53	剥片	13 × 16 × 2.5	0.30								珪化岩	3	
81	1 B78-54	剥片	27.5 × 19 × 3	1.48	1-0	-	不明-2→H-2	F	-	-		珪化岩	1	
82	1 B78-55	剥片	19 × 24.5 × 4	2.14	2-1	77°	H-5	-	-	t-B		珪化岩	1	
83	1 B78-58	剥片	11.5 × 7.5 × 2.5	0.13								珪化岩	2	
84	1 B78-59	剥片	12 × 14.5 × 1	8.20								珪化岩	2	
85	1 B78-60	剥片	17 × 15.5 × 2.5	0.48								珪化岩	2	
86	1 B78-61	剥片	15 × 12 × 2	0.32								珪化岩	1	
87	1 B78-62	剥片	20 × 11 × 7	1.59								珪化岩	9	
88	1 B78-63	剥片	24 × 12.5 × 2.5	0.47	1-0	-	B-2→R-2 →H-4	F	-	-		珪化岩	2	
89	1 B78-64	剥片	11 × 10 × 3	0.18								珪化岩	2	
90	1 B78-65	使用痕ある剥片	35 × 19 × 4.5	2.33	2-0	120°	B-1→H-5	F	+	-		珪化岩	2	
91	1 B78-66	照片	5 × 7 × 3	0.05								珪化岩	1	
92	1 B78-68	剥片	13 × 18 × 6	1.15								砂岩	27	
93	1 B78-69	剥片	5.5 × 9.5 × 2	0.05								珪化岩	2	
94	1 B78-70	使用痕ある剥片	28 × 26.5 × 4.5	3.17	-	-	L-2→R-2	-	+	t-H+t-B		珪化岩	3	
95	1 B78-71	剥片	27 × 19 × 2	0.78	4-2	-	H-2	H	-	-		珪化岩	3	
96	1 B78-72	石核	38 × 17 × 7	3.23	1							珪化岩	7	
97	1 B78-74	剥片	13 × 17 × 1.5	0.27								珪化岩	3	
98	1 B78-75	剥片	18 × 8 × 4.5	0.82								珪化岩	3	
99	1 B78-76	剥片	8 × 8 × 1.5	0.05								珪化岩	2	
100	1 B78-77	剥片	24 × 24 × 5	0.16			117°					珪化岩	3	
101	1 B78-78	剥片	25 × 20 × 5	2.31	1-0	114°	H-4	H	-	-		珪化岩	1	
102	1 B78-79	剥片	26 × 25 × 4	2.04		ハジケ	L-2→H-3	F	-	-		珪化岩	3	
103	1 B78-80	剥片	11 × 12 × 3.5	0.60								珪化岩	3	
104	1 B78-81	剥片	16 × 25 × 5.5	2.54	8-5	106°	C→H-3	-	-	t-H		珪化岩	3	
105	1 B78-82	剥片	14 × 11 × 4.5	0.46								珪化岩	3	

No.	遺物 No.	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	面	打面	刃角	背面構成	末端形状	使用痕	折れ面部位	石質	母岩	備考	
106	1B78-83	削器	16 × 18 × 4.5	1.27	8							珪化岩	3		
107	1B78-84	器	8.5 × 14 × 6	0.66								砂岩	27		
108	1B78-85	削片	7 × 9.5 × 1	0.04		1-0	-	H-3	F	-	-	珪化岩	23		
109	1B78-86	剥片	33 × 17 × 5	2.97	19	ハジケ	-	L-1→H-3	F	-	-	珪化岩	4		
110	1B78-87	削片	12.5 × 6 × 1.5									珪化岩	2		
111	1B78-88	削片	9.5 × 10 × 2									珪化岩	3		
112	1B78-89	剥片	19 × 15 × 3	0.75		1-0	91°	R-2→L-3 →H-2	F	-	-	珪化岩	2		
113	1B78-90	削片	15 × 13 × 1.5	0.29								珪化岩	2		
114	1B78-91	剥片	15 × 9 × 5.5	0.31								珪化岩	2		
115	1B78-92	剥片	9 × 5.5 × 2.5	0.09								珪化岩	2		
116	1B78-93	剥片	13.5 × 22 × 4	0.75								珪化岩	2		
117	1B78-94	剥片	23 × 8.5 × 3.5	0.71								珪化岩	2		
118	1B78-95	剥片	59 × 48 × 15	38.91	17	1-0	114°	H-5	F	-	-	珪化岩	18		
119	1B78-96	剥片	35 × 21 × 7	3.50		ハジケ	-	C→H-2	F	-	-	珪化岩	2		
120	1B78-97	剥片	10 × 16 × 3.5	0.46								珪化岩	3		
121	1B78-98	剥片	20 × 16 × 7.5	1.61								珪化岩	2		
122	1B78-99	剥片	45 × 21 × 12	11.47	14	1-0	93°	R-1→H-5	F	-	-	珪化岩	12		
123	1B79-1	剥片	17 × 37 × 4.5	3.12						-	-	t-H+t-B	珪化岩	1	

第1・第2ブロック (第30~35図、表6・7、図版3~5)

出土状況 1B59グリッドに散漫に剥片類を中心とする分布が認められ、これを第1ブロックとした。石器としては水晶製の楔形石器が1点含まれている。この南側に濃密な分布地点があり、第2ブロックとする。第2ブロックは1B78グリッドにあり、東に開口する馬蹄形を呈している。両ブロック共に産出層準はソフトローム層であるが、特にその中位に集中している。

出土遺物 両ブロックの遺物の組成は付表に譲るとして、代表的な資料について説明する。説明は図の番号に従う。両面打製の石器が2点ある(1・2)。1は小型石槍の尖頭部破片で、細身の柳葉形尖頭器かと見られる。2は削器としたが、槍先の可能性もある。3は石錐、4・5は折れ面を打面として、側縁に沿って刻打を加えた彫器である。6は大型の端削器、7・8は側削器と見られる。9は第1ブロック産の楔形石器で、本地域では稀な水晶を素材にしている。なお、第2ブロック外縁に水晶の剥片が1例あり、同一母岩と認めた。10は器種不明。11~21は剥片を例示する。このうち、21は第1ブロック検出で、両面打製の石器から剥離された剥片で、石槍削片と考えられる。22~24は石核である。

接合資料は3組6点と少ない。このうち剥片2点の接合状況(18+19)と、石核どうしの接合状況(24)を示した。ブロック間の接合関係は認められないが、両ブロックの間には4個体の共有母岩が存在する。石材は珪化岩が主体である。

第3ブロック（第36～39図、表8、図版3・5・6）

出土状況 第2ブロックの南西、1B97グリッドを中心としている。やはり剝片類が多いが、削器や石錐なども含まれている。珪化岩1と珪化岩6が目立つが、13種もの母岩が含まれている。特に器種別、母岩別の偏在性は認められない。産出層準は第1、第2ブロックと同一である。

出土遺物 石錐が1点ある(25)。26～30は削器あるいは使用痕のある剝片で、32にも刃こぼれが観察される。削器としたものも、その2次加工は繊細で、剝片の形状を変えるものは認められない。31～35に剝片のうち特に大きめのものを選んで図示した。36・37は石核である。ブロック内に接合するものはない。ブロックを構成する13母岩のうち、第3ブロックに単独で存在するものは4種であり、他は第2ブロック、あるいはそれを媒介として第1ブロックと母岩を共有している。

第1文化層のまとめ

第1文化層はソフトローム層を産出層準とする3つのブロックから構成されているが、第2ブロックを中心とする3ブロック1単位のユニットと理解することができる。第2ブロックは特定母岩の集中度が高いこと、馬蹄形の分布状況がニューカマーらによる剝片剝離に伴う飛散パターンに近いこと（Newcomer and Sieveking 1980¹）などから剝片剝離の場とも考えられるが、削器と使用痕のある剝片、彫器の分布等を検討すると、大きく3つの集中域が区別され、これが弧状に連続していることから、中央の無遺物域を炉址と想定し、その周囲を作業空間と理解することもできよう（Gamble 1986²）。

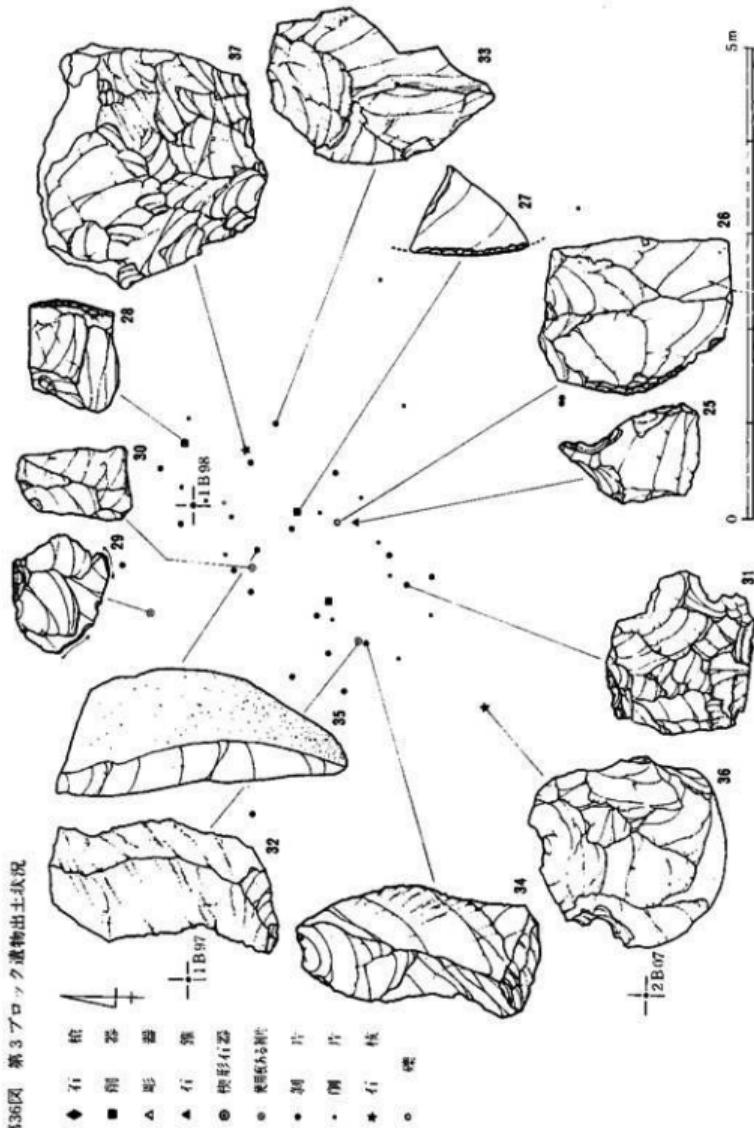
性格の今ひとつはっきりしない第1ブロックは、しばらく措くとして、第3ブロックはどのように理解されるであろう。このブロックの器種構成は、第2ブロックにおいて分離した各集中域の組成とほぼ一致していることから、その作業内容に大きな差異を指摘することはできない。従って、このブロックもまた何らかの工作を背景に成立したものと如く理解され、第2ブロックにおける炉の存在から、そこに住居施設を仮想するなら、第3ブロックは屋外での作業空間であることが予測されるであろう。第1ブロックもまた、第3ブロックの性格に従うものとしたい。かくして、第2ブロック周辺での居住施設に随伴する2つの屋外作業の場が復原されるとともに、この3ブロックからなるユニットの主体は、1単位から構成される自然家族であることが考察されることになろう。

石器群の技術的基盤やその編年的位置にまつわる問題についても触れる予定であったが、紙面の都合もあり今回は見送らざるを得なかった。産出層準と21が東内野方尖頭器の石槍削片であることから大略の位置付けは可能であろう。

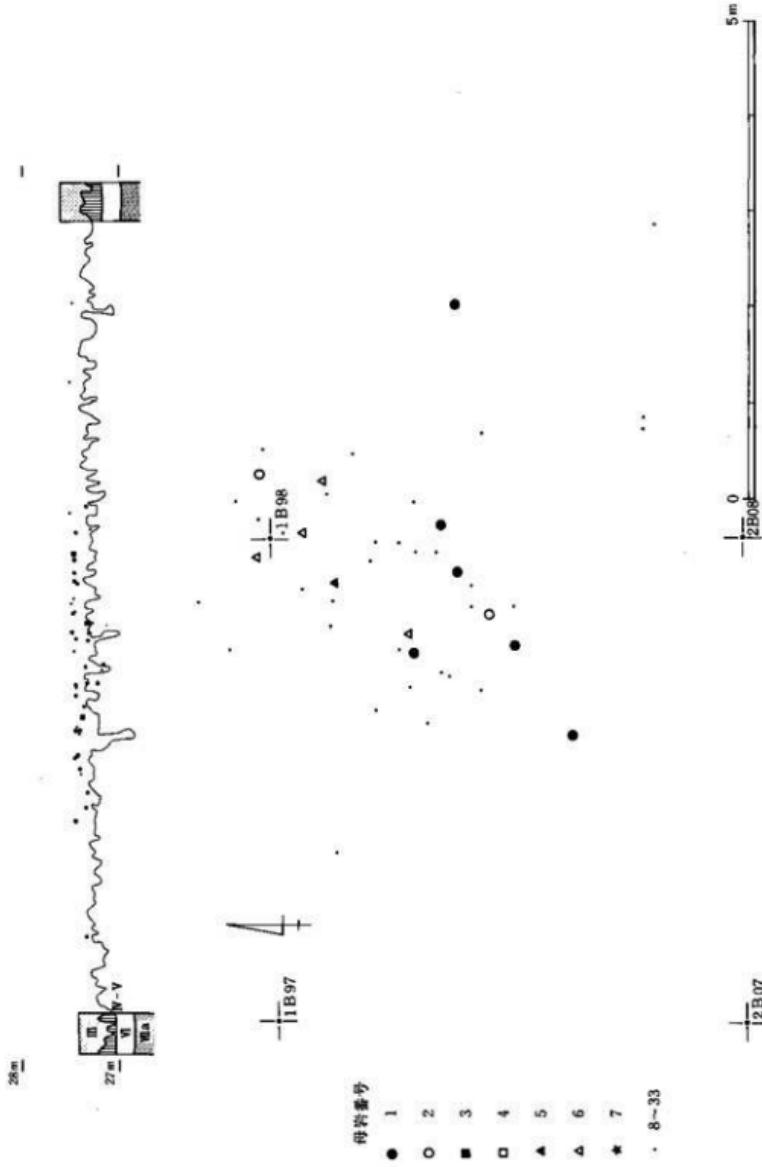
1. Newcomer, M.H., and Sieveking, G. (1980) Experimental flake scatter-patterns: a new interpretative technique. *Journal of Field Archaeology*, F.

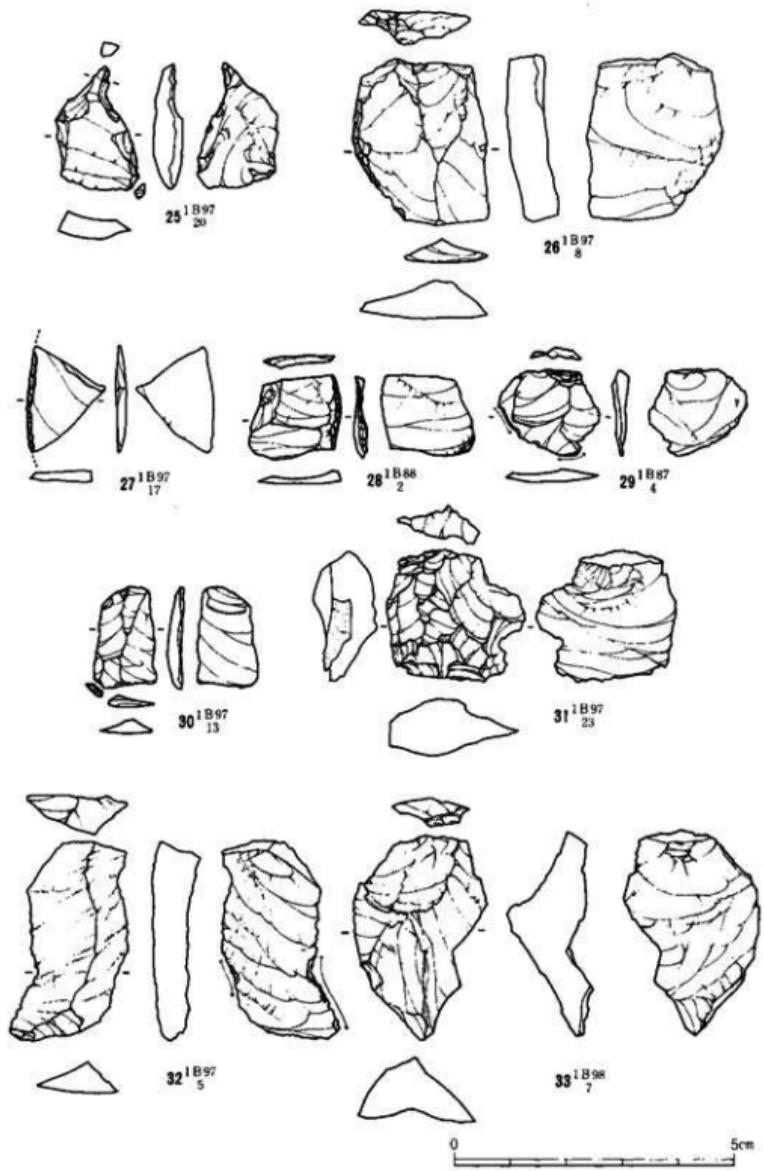
2. Gamble, C. (1986) The Palaeolithic Settlement of Europe. Cambridge World Archaeology.

第36図 第3アロツク遺物出土状況

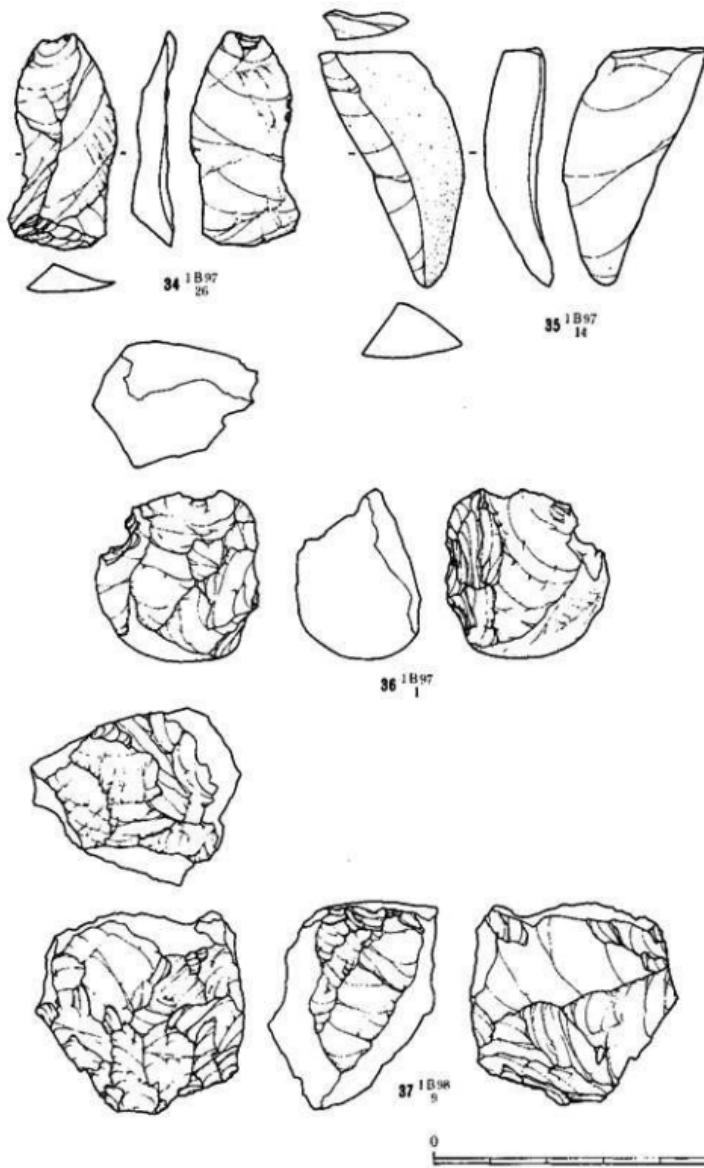


第3アロック母岩別分布状況





第38図 第3ブロック出土遺物(1)



第39図 第3ブロック出土遺物(2)

表8 第3ブロック遺物属性

No.	遺物 No.	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	固	打面	打角	背面構成	末端形状	使用痕	折れ面部位	石質	母岩	備考
1	1B87-1	剝片	24 × 15 × 5	1.3	-	-	-	不明-3→H-2	F	-	t-H	珪化岩	6	
2	1B87-3	剝片	34 × 12 × 4	1.1	-	-	-	H-2→R-4 →H-1	F	-	-	珪化岩	21	
3	1B87-4	使用痕ある剝片	22.5 × 27 × 3	1.4	29	1-0	98°	R-1→H-2	F	+	-	珪化岩	21	
4	1B88-1	剝片	8 × 12 × 2	0.2								珪化岩	23	
5	1B88-2	剝片	24 × 24.5 × 3.5	2.0	28							珪化岩	2	
6	1B88-3	剝片	9.5 × 15 × 2	0.3								珪化岩	23	
7	1B88-4	剝片	28 × 33 × 13	9.0		1-0	-	B-2→H-2	F	-	-	珪化岩	21	
8	1B97-1	石核	44 × 40 × 37	64.4	36							珪化岩	1	
9	1B97-2	剝片	11 × 20 × 2.5	0.4								珪化岩	1	
10	1B97-3	剝片	9.5 × 7.5 × 1.5	0.1								珪化岩	14	
11	1B97-4	剝片	25 × 15 × 2	0.7		2-0	-	H-4	F	-	-	珪化岩	22	
12	1B97-5	使用痕ある剝片	55 × 28 × 11	14.0	32	2-0	10°	不明-2→B-2	F	+	-	珪化岩	21	
13	1B97-6	剝片	32.5 × 24 × 4	3.1		4-4	10°	H-7	F	-	-	珪化岩	22	
14	1B97-7	剝片	12.5 × 10.5 × 3	0.3								珪化岩	1	
15	1B97-8	側面削	48 × 36 × 9.5	16.8	26							珪化岩	6	
16	1B97-9	剝片	32 × 23 × 10	5.9		1-0	11°	C→R-1	F	-	-	珪化岩	21	
17	1B97-10	剝片	19 × 32 × 7	4.0		-	-	R-1→L-1 →H-2	F	-	t-B	珪化岩	22	
18	1B97-11	剝片	20 × 15 × 2.5	0.7		3-2	-	不明-1→H-3	F	-	-	珪化岩	22	
19	1B97-12	剝片	29 × 46 × 6.5	4.8		-	-	R-5→H-1	F	-	t-B	珪化岩	22	
20	1B97-13	使用痕ある剝片	26 × 16 × 3	1.4	35	ハジケ	-	H-5	-	+	t-B	珪化岩	21	
21	1B97-14	剝片	68 × 30 × 15	24.1	35	1-0	103°	C→H-1	F	不明	-	安山岩	5	
22	1B97-15	剝片	7 × 11.5 × 1.5	0.1								珪化岩	22	
23	1B97-16	剝片	25 × 25 × 3	1.1		ハジケ	-	H-4	F	-	-	珪化岩	22	
24	1B97-17	側面削	27.5 × 21 × 2.5	1.1	27							珪化岩	17	
25	1B97-18	剝片	24.5 × 13 × 3.5	0.9								珪化岩	23	
26	1B97-19	縫	28 × 16 × 14.5	6.5								頁岩	26	
27	1B97-20	石核	33 × 20 × 7	4.7	25							珪化岩	15	
28	1B97-21	剝片	10 × 11 × 2	0.3								珪化岩	1	
29	1B97-22	剝片	13 × 9.5 × 1.5	0.1								珪化岩	7	
30	1B97-23	剝片	37 × 35 × 15.5	15.5	31	1-0	-	H-6→L-2 →R-1	F	-	-	珪化岩	2	
31	1B97-24	剝片	22 × 34 × 16	7.2		3-2	-	L-2→H-2				珪化岩	21	
32	1B97-25	剝片	8 × 7 × 3.5	0.4		1-0	-	H-1	-	-	t-B	珪化岩	23	
33	1B97-26	剝片	57 × 30 × 11	12.5	34	ハジケ	-	B-1→H-3 →L-2(横上)	F	-	-	珪化岩	22	
34	1B98-1	剝片	25 × 27 × 3.5	2.2		2-0	-	B-1→H-3	-	-	t-B	珪化岩	23	
35	1B98-1	剝片	29 × 28 × 5	2.85		2-0	-	不明-1→H-1 →R-2	F	-	-	珪化岩	21	

No.	遺物 No.	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	圓	打面	打角	背面構成	末端形状	使用痕	折れ面部位	石質	母岩	備考
36	1B98-2	刮片	10 × 14 × 2	0.3								珪化岩	14	
37	1B98-3	刮片	12.5 × 10 × 1.5	0.2								珪化岩	14	
38	1B98-4	刮片	13.5 × 9.5 × 1.5	0.2								珪化岩	1	
39	1B98-5	刮片	6 × 10 × 1.5	0.1								珪化岩	1	
40	1B98-6	刮片	13.5 × 18 × 5	0.9	ハジケ	-	B-1→H-3	F	-	-		珪化岩	21	
41	1B98-7	刮片	53 × 35 × 15	18.4	33	3-2	110°	R-1→H-3	F	-	-	珪化岩	24	
42	1B98-8	刮片	15 × 20 × 2.5	0.7		2-0	-	H-2	H	-	-	珪化岩	22	
43	1B98-9	石核	52 × 62 × 43	137.2	37							珪化岩	6	
44	1B98-10	刮片	30 × 12 × 7.5	1.9		1-0	-	不明-2→L-1 →不明-1	F	+	-	珪化岩	6	
45	1B98-11	刮片	18 × 15 × 3	0.6								珪化岩	23	

ブロック外出土の遺物（第13・14図、表9、図版6）

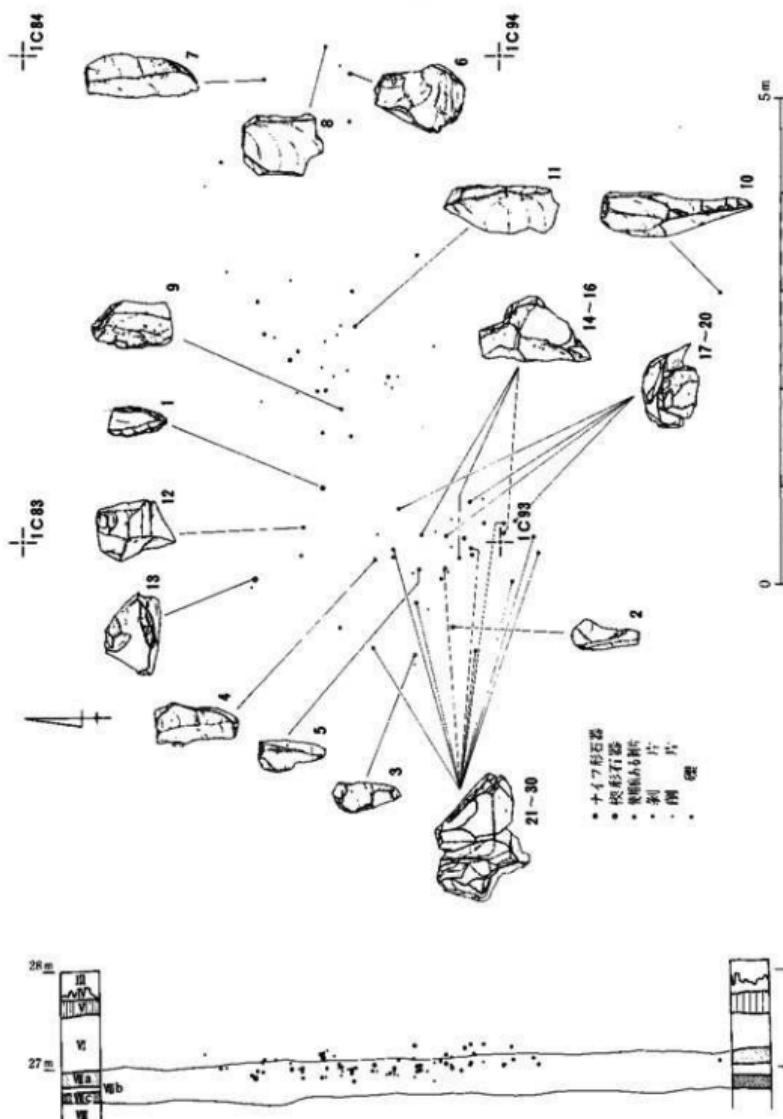
2号住居跡から集中的に出土した先土器時代の石器のうち石核5点を示した（第13・14図12～16）。石材はいずれも第1文化層に特有の珪化岩である。多打面の多面体石核で、その技術的特徴は第2、第3ブロック検出の石核とよく一致している。縄文人達が遺跡の一角を掘削した際に拾得したものと想定される事例として、興味の尽きぬ資料であろう。

表9 ブロック外出土遺物属性

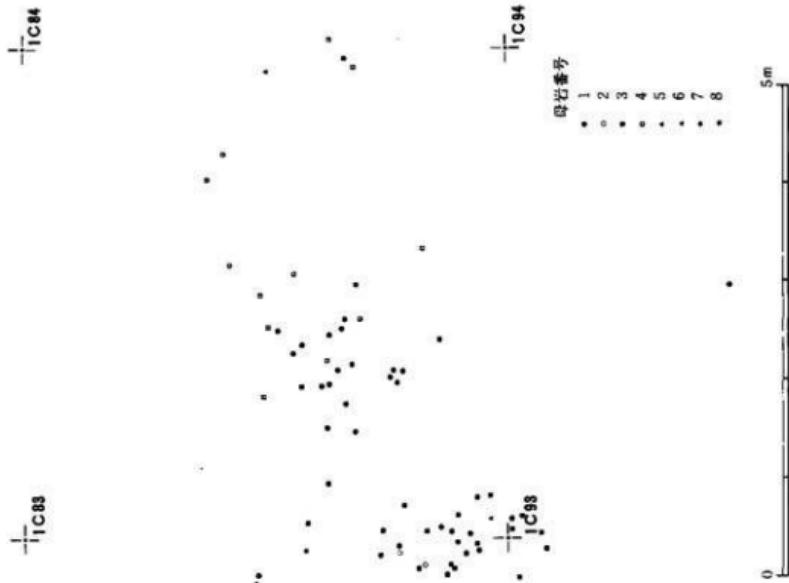
No.	遺物 No.	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	圓	打面	打角	背面構成	末端形状	使用痕	折れ面部位	石質	母岩	備考
1	SD-3-1	刮片	36 × 61 × 10	21.7		3-1	121°	C→H-2	F	-	-	安山岩	11	
2	SB-5-10	使用痕ある刮片	37 × 35 × 20	18.5		-	-	R-6→H-1	F	+	t-H	珪化岩	28	
3	SB-5-11	刮片	29 × 30 × 14	10.7		2-0	-	不明(筋理面)-2 →H-3→L-1				珪化岩	28	
4	SB-5-12	石核	41 × 33 × 32.5	31.0	14-15							珪化岩	31	
5	SB-5-13	石核	47 × 46 × 32.5	67.7	13-13							珪化岩	36	
6	SB-5-14	石核	52 × 44 × 46	87.7	14-14							珪化岩	29	
7	SB-5-15	石核	47 × 38 × 33	62.9	13-12							珪化岩	32	
8	SB-5-16	石核	39 × 41 × 33	66.2	14-16							珪化岩	33	
9	SB-5-17	刮片	26 × 17 × 3.5	1.1		1-0	-	H-5	F	-	-	珪化岩	29	
10	SB-5-19	刮片	9.5 × 8 × 2	1.2								珪化岩	2	
11	1A79-1	刮片	23 × 17.5 × 5.5	1.8								安山岩	11	
12	1C82-4	刮片	19 × 11 × 4.5	1.1								珪化岩	1	
13	1C82-2	縫	29 × 5 × 3	0.3								珪化岩	25	
14	1C82-3	縫	26.5 × 12 × 7	2.6								珪化岩	25	
15	1C82-4	縫	23 × 9 × 7	1.1								珪化岩	25	
16	1C82-6	縫	31 × 11.5 × 6	2.1								珪化岩	25	
17	1C83-33	縫	29 × 12 × 6.5	1.6								珪化岩	25	
18	1C83-36	縫	30 × 17 × 10	4.3								珪化岩	25	
19	表 摂	刮片	33 × 31 × 6	6.2		5-2	88°	B-1→R-1 →H-2	F	-	-	珪化岩	3	

(2) 第2文化層

VI~VIIa層出土の遺物である。総数78点を数え、地点の離れた2ブロックが検出された。



第40図 第1ブロック遺物出土状況



第41図 第1ブロック母岩別出土状況

第1ブロック (第40~46図、表11、図版3・6・7)

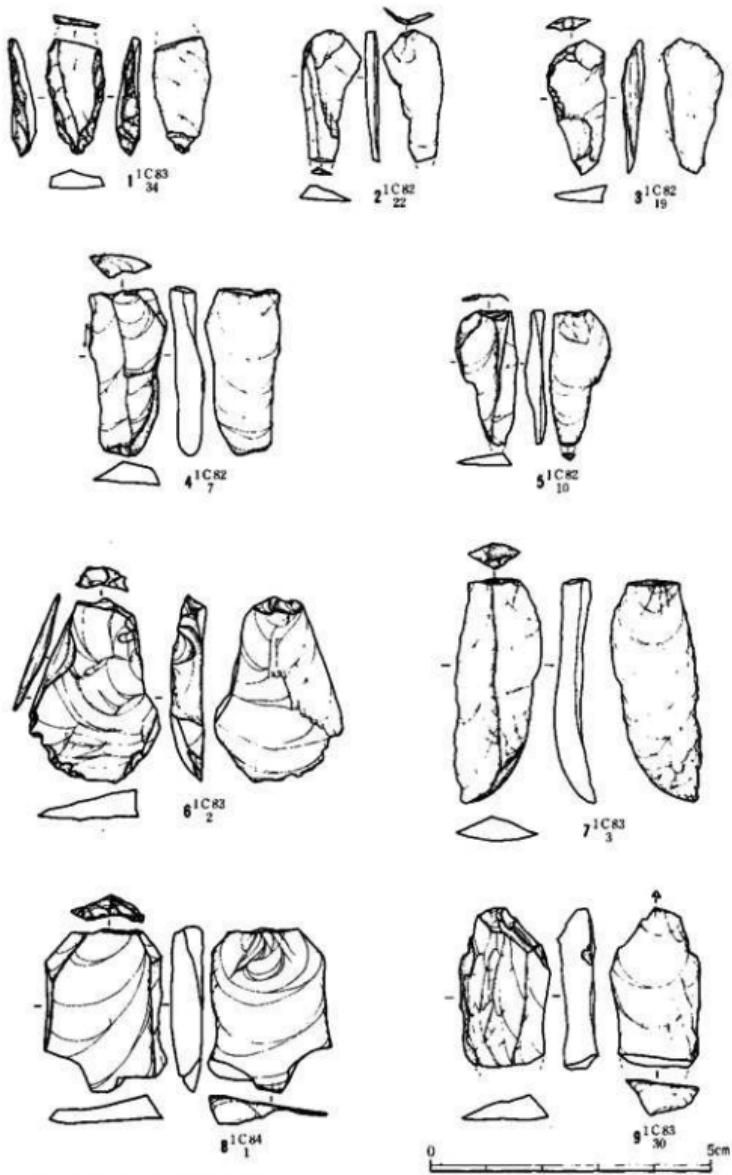
出土状況

表10 第2文化層母岩別資料内訳

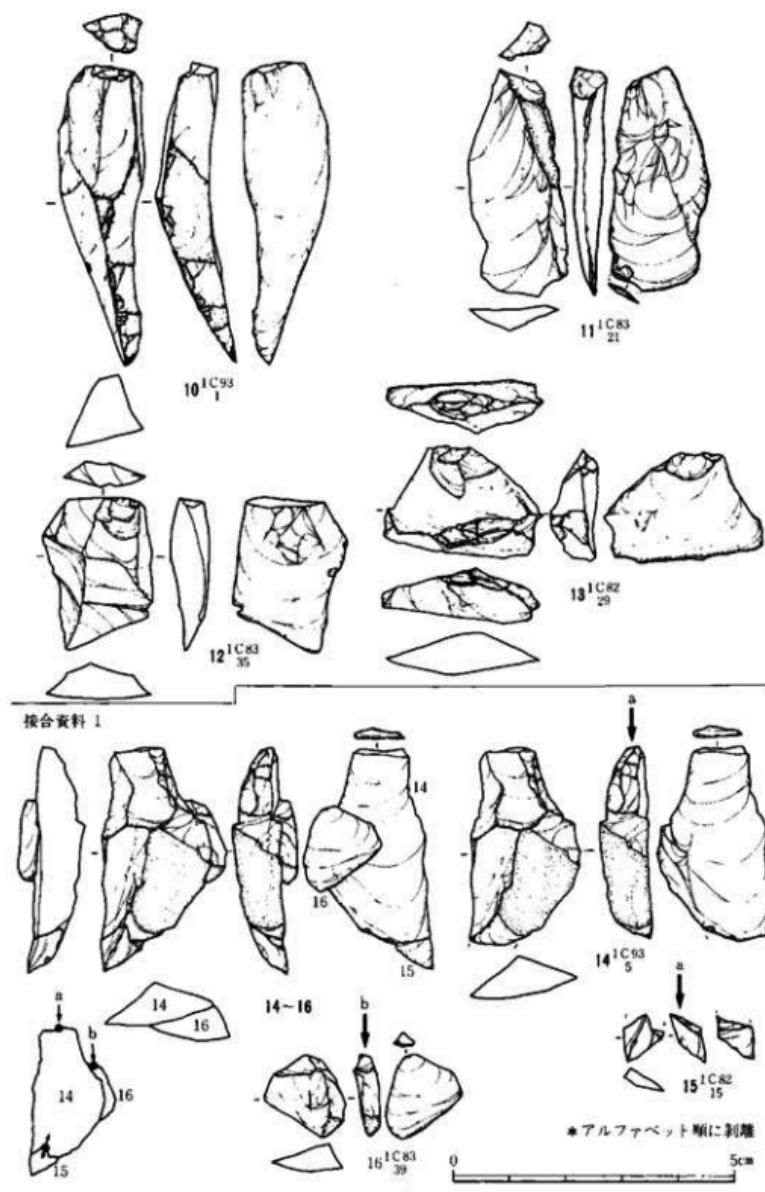
1C-83グリット ドを中心に約7 m×3 mの北東 から南西にのび る範囲に76点出 土した。母岩別 出土状況(第41 図)は、母岩別資	母岩 番号	石質	ナイフ形 石器	楔形 石器	剝片	削片	礫	总数	数量比%	総重量(g)	重量比%	関連ブロック
1 珪化岩	1	1	12	12	—	—	26	33.3	64.90	25.12	1	
2 珪化岩	2	—	—	3	—	—	3	3.8	2.84	1.10	1	
3 珪化岩	3	—	—	21	9	—	30	38.5	124.12	48.04	1	
4 珪化岩	4	—	—	7	5	—	12	15.4	36.04	13.95	1	
5 安山岩	5	—	—	1	1	—	2	2.6	8.02	3.10	1・2	
6 珪化岩	6	—	—	2	1	—	3	3.8	1.76	0.68	1	
7 珪化岩	7	—	—	—	—	1	1	1.3	19.78	7.66	1	
8 安山岩	8	—	—	—	1	—	1	1.3	0.91	0.35	2	
	計	1	1	46	29	1	78	100	258.37	100	—	—

料1が北東部に集中し、母岩別資料3が南西部に集中する。産出層準は、VI層からVIIa層に及ぶが、VIIa層(第2黒色帶上部)に最も集中し、VIIa層に生活面をもつ文化層といえる。

出土遺物 石器組成は、ナイフ形石器1点、楔形石器1点、使用痕のある剝片10点、剥片36点、削片27点、礫1点である。1は縦長剝片を素材とするナイフ形石器である。2側縁に急角度の粗い調整が連続的に施され、打点部分は除去され腹面側まで調整がおよんでいる。10は斜上調

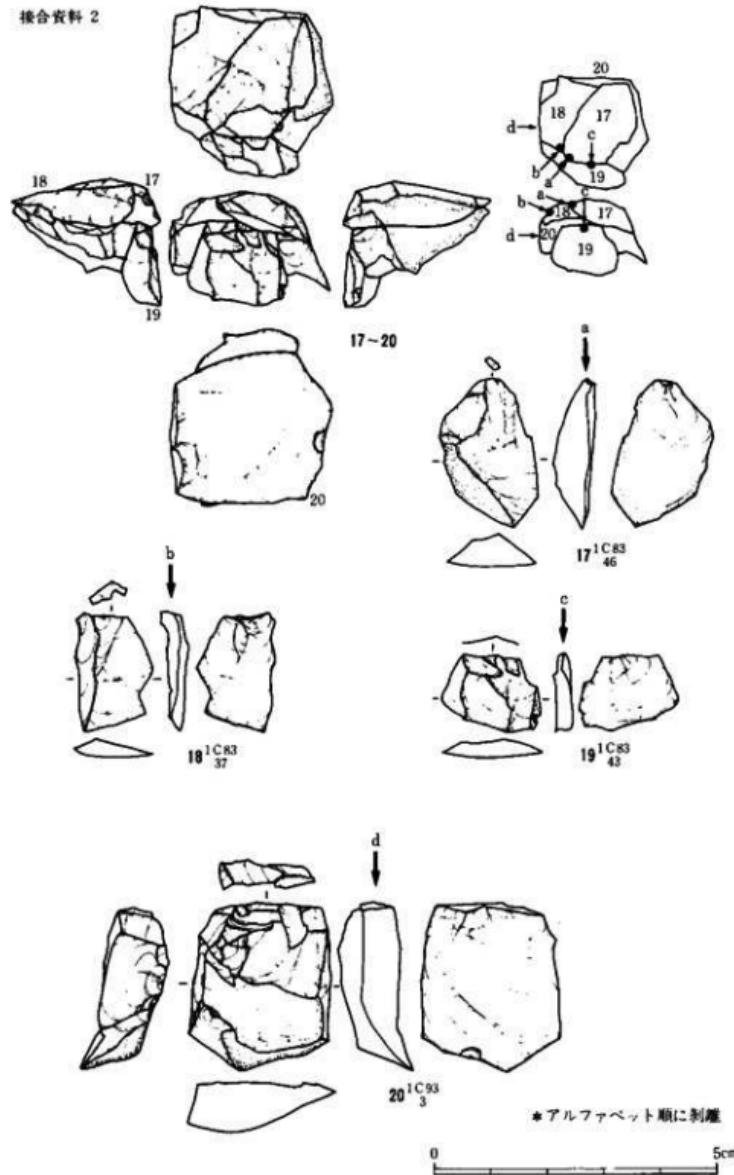


第42図 第1ブロック出土遺物(1)



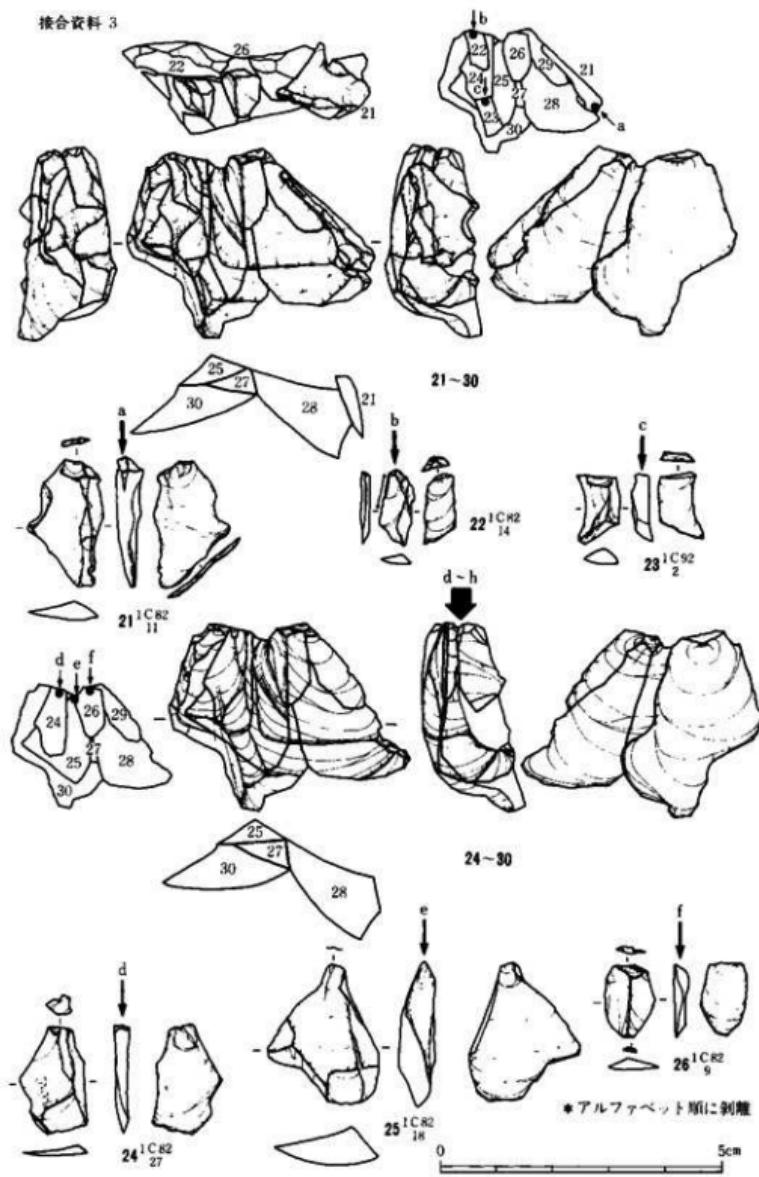
第43図 第1ブロック出土遺物(2)

接合資料 2

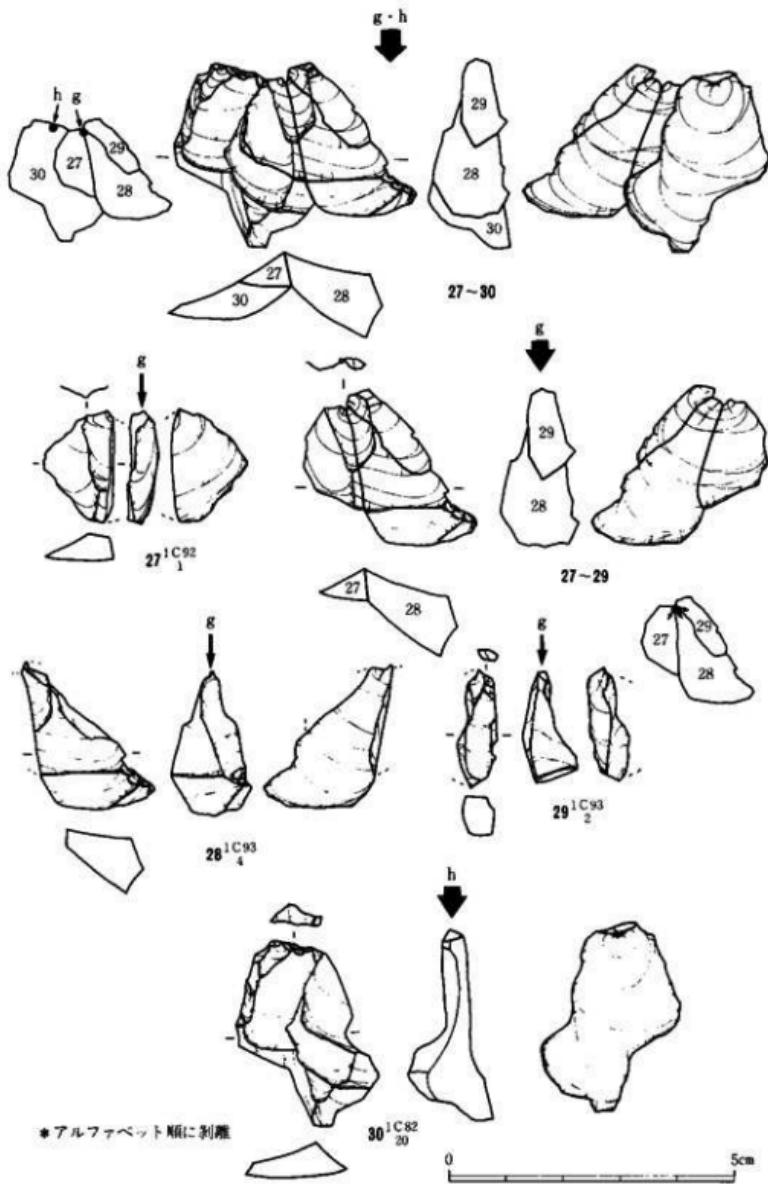


第44図 第1ブロック出土遺物(3)

接合資料 3



第45図 第1ブロック出土遺物(4)



第46図 第1ブロック出土遺物(5)

表11 第1ブロック遺物属性

No.	遺物No.	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	屈	打面	打角	背面構成	末端形状	使用痕	折れ面部位	石質	母岩	備考
1	1 C82-1	剝片	14.2×4.6×2.9	0.12								珪化岩	6	
2	1 C82-5	剝片	25.3×7.8×5.0	1.08		-		H-1, C		-		珪化岩	6	
3	1 C82-7	使用痕ある剝片	42.4×19.6×5.2	5.01	4	2-1		H-4	H	+		珪化岩	1	
4	1 C82-8	剝片	35.8×18.6×4.2	1.52		1-0	99°	H-3		-		珪化岩	2	
5	1 C82-9	剝片	19.1×14.0×4.8	0.92	26	1-0	112°	H-1→L-1 →H-1	H	-		珪化岩	3	被3
6	1 C82-10	使用痕ある剝片	34.6×15.7×3.0	0.08	5	1-0	74°	H-4		+	t-H	珪化岩	2	
7	1 C82-11	使用痕ある剝片	33.8×19.0×5.0	1.96	21	1-0	95°	H-5→L-1	F	+	t-H	珪化岩	3	被3
8	1 C82-12	剝片	11.8×6.0×2.0	0.10								珪化岩	1	
9	1 C82-13	剝片	28.6×19.4×3.2	1.37		1-0		B-1→H-1		-		珪化岩	3	
10	1 C82-14	使用痕ある剝片	19.3×8.6×2.8	0.46	22	3-0		H-3		+		珪化岩	3	被3
11	1 C82-15	剝片	14.8×9.4×5.0	0.45	15	-	104°			-	t-B	珪化岩	3	被1
12	1 C82-16	剝片	30.9×20.8×4.8	2.17		1-0	96°	B-2→H-2	H	-		珪化岩	1	
13	1 C82-18	剝片	35.6×29.8×8.8	6.04	25	缺		R-1→H-4	H	-	v-L	珪化岩	3	被3
14	1 C82-19	使用痕ある剝片	35.6×15.0×5.1	2.02	3	4-0	90°	B-1→L-1 →H-2		+	v-L	珪化岩	3	被3
15	1 C82-20	剝片	51.0×35.3×11.8	13.48	30	2-0	96°	R-2→H-10	F	-		珪化岩	3	被3
16	1 C82-21	剝片	10.0×6.1×1.2	0.36								珪化岩	3	
17	1 C82-22	使用痕ある剝片	34.7×14.6×2.8	1.24	2	2-0	92°	H-3		+	t-H	珪化岩	2	
18	1 C82-24	剝片	17.4×9.8×3.1	0.48								珪化岩	3	
19	1 C82-25	剝片	29.0×15.6×3.0	0.64								珪化岩	3	
20	1 C82-26	剝片	10.2×4.8×1.2	0.08								珪化岩	3	
21	1 C82-27	剝片	27.6×17.2×5.0	1.26	24	1-0	90°	H-4	F	-		珪化岩	3	被3
22	1 C82-28	円盤	34.3×26.3×15.6	19.78								珪化岩	7	
23	1 C82-29	複形石器	41.3×28.2×11.5	11.21	13	-		H-1	H	+		珪化岩	1	
24	1 C83-1	剝片	10.3×9.0×3.6	0.36								珪化岩	3	
25	1 C83-2	使用痕ある剝片	48.0×34.2×7.4	11.58	6	3-3	115°	H-1	F	+	v-R	珪化岩	4	
26	1 C83-3	剝片	58.0×21.1×6.2	7.94	7	3-3	103°	H-2	F	-		安山岩	5	
27	1 C83-4	剝片	23.0×18.7×2.5	1.02		-		H-2	H	-	v-L	珪化岩	4	
28	1 C83-5	剝片	13.8×9.0×4.0	0.46								珪化岩	4	
29	1 C83-6	剝片	10.6×7.0×2.6	0.19								珪化岩	4	
30	1 C83-7	剝片	28.2×24.6×6.6	2.60		-		R-1→H-1	H	-	t-B	珪化岩	4	
31	1 C83-8	剝片	12.8×9.6×1.4	0.14								珪化岩	4	
32	1 C83-9	剝片	20.4×13.2×5.6	1.07		-		H-1		-	t-B	珪化岩	4	
33	1 C83-10	剝片	8.0×6.8×1.7	0.56								珪化岩	1	
34	1 C83-11	剝片	25.6×25.5×2.0	1.71				C		-		珪化岩	1	
35	1 C83-12	使用痕ある剝片	26.0×18.0×4.8	1.28		1-0		B-1→R-1 →H-1		+		珪化岩	1	
36	1 C83-13	剝片	16.8×10.5×2.5	0.45								珪化岩	3	
37	1 C83-14	剝片	13.5×6.7×1.7	0.13								珪化岩	4	

No.	遺物 No.	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	因	打面	刃角	背面構成	末端形状	使用痕	折れ面部位	石質	母岩	備考
38	1C83-15	剝片	26.4×19.8×3.7	2.17	—		R-L, C	H	—	t-B	珪化岩	1		
39	1C83-16	剝片	25.4×16.9×3.8	1.61	繩状		H-4→B-3	H	—		珪化岩	1		
40	1C83-17	剝片	20.8×6.5×2.6	0.23							珪化岩	4		
41	1C83-18	剝片	7.0×2.1×1.2	0.01							珪化岩	1		
42	1C83-19	剝片	19.5×7.7×2.2	0.29							珪化岩	1		
43	1C83-20	剝片	11.2×5.4×1.6	0.07							珪化岩	1		
44	1C83-21	剝片	59.0×25.1×7.2	8.31	11	1-0	90°	H-2		—	珪化岩	4		
45	1C83-22	剝片	18.6×16.6×2.6	0.74	—		B-L, C	F	—		珪化岩	3		
46	1C83-23	剝片	25.1×14.3×3.8	1.16	—	1-0	90°	H-2	H	—	珪化岩	4		
47	1C83-24	剝片	15.8×5.2×4.5	0.30							珪化岩	1		
48	1C83-25	剝片	19.8×6.8×1.2	0.06							珪化岩	1		
49	1C83-26	剝片	12.4×10.5×1.5	0.22							珪化岩	1		
50	1C83-27	剝片	20.5×20.4×3.6	1.32			B-1→H-1		—	t-B	珪化岩	1		
51	1C83-28	剝片	12.0×5.7×1.2	0.08							珪化岩	1		
52	1C83-29	剝片	8.9×4.6×1.2	0.05							珪化岩	1		
53	1C83-30	剝片	41.8×24.4×8.3	8.95	9	1-0	90°	H-2, C	—	—	t-H	珪化岩	1	
54	1C83-31	剝片	23.6×11.5×4.0	0.89	—		B-1→R-1		—	v-R	珪化岩	1		
55	1C83-32	剝片	29.0×24.4×3.6	1.83	—	1-0	R-1→H-2	H	—		珪化岩	1		
56	1C83-34	ナイフ形石器	30.6×15.4×5.8	2.98	1	—	H-1→L-1		+	t-H	珪化岩	1		
57	1C83-35	剝片	39.0×31.2×9.6	9.85	12	1-0	90°	B-1→H-5→ B-2→H-3		—	珪化岩	3		
58	1C83-37	剝片	31.2×22.2×5.8	3.84	18	1-0	90°	H-2→	H	—	珪化岩	3	接2	
59	1C83-38	剝片	10.0×7.2×0.8	0.02							珪化岩	3		
60	1C83-39	剝片	23.6×20.1×7.8	3.10	16	1-0	70°	H-2→L-1	F	—	珪化岩	3	接1	
61	1C83-40	剝片	10.5×4.7×1.0	0.05							珪化岩	1		
62	1C83-41	剝片	19.6×13.8×3.6	0.68							珪化岩	3		
63	1C83-42	使用痕ある剝片	18.0×12.8×3.3	0.82	—	1-0	90°	H-3	H	+	珪化岩	1		
64	1C83-43	剝片	28.1×22.2×3.9	3.03	19	繩状		H-7	F	—	珪化岩	3		
65	1C83-44	剝片	18.0×11.6×3.2	0.56	—						t-B	珪化岩	6	
66	1C83-45	剝片	16.2×12.0×5.0	0.65							珪化岩	1		
67	1C83-46	剝片	41.4×28.0×9.8	9.68	17	1-0	101°	H-4			珪化岩	3	接2	
68	1C83-47	剝片	9.0×7.4×1.0	0.09							珪化岩	3		
69	1C94-1	剝片	42.0×30.2×9.35	9.15	8	8-4	90°	R-1→H-4		—	t-H	珪化岩	4	
70	1C92-1	剝片	28.3×19.0×5.9	2.78	27	繩状		H-3	H	—	v-L	珪化岩	3	接3
71	1C92-2	剝片	18.0×11.7×5.1	0.89	23	—			F	—	t-B	珪化岩	3	接3
72	1C93-1	(継上調整)剝片	29.4×22.5×10.4	26.51	10	5-3	90°	R-1→L-4 →H-4		+	珪化岩	1		
73	1C93-2	剝片	28.5×7.8×9.8	2.63	29	1-0	100°	H-2		—	v-R	珪化岩	3	接3
74	1C93-3	剝片	42.8×38.8×14.6	35.34	20	4-0	100°	L-2	F	—	珪化岩	3	接2	
75	1C93-4	剝片	47.4×31.2×8.1	6.70	28	繩状		H-4	F	—	v-M	珪化岩	3	接3
76	1C93-5	剝片	51.0×30.5×10.5	14.62	14	—				—	t-H-B	珪化岩	3	接1

整のされた剥片であるか、90度打面転移の行われた痕跡を残す剥片であろう。13は楔形石器である。底面を残す剥片を素材として、上下両端から両極剥離を行い、背腹両面ともポジティブな面である。また、使用痕と思われる微細剥離痕のあるものが多い(46点中12点)。このことは、明確な二次加工の少ないこの石器群の中での一つの特徴といえる。

接合資料は3組ある。いずれも母岩別資料3である(14~16, 17~20, 21~30)。

接合資料2(17~20)は、90度の打面転移を少なくとも3回行い、最後に打面再生を行った資料である。それは、正面下端を打面にして数回剥離後、90度打面転移を行い、a・bの剥離によって17・18を作り出し、その後も数回の小さな剥離を行っている。その後、90度打面転移して17の剥離面を打面として少なくとも7回の剥離後、cの剥離によって19を作り出す。その後また、90度打面転移してdの剥離によって打面再生を行い20が作られる。このような剥片作出過程によって作出されたと思われるものは、1・6・10・13の資料がある。

接合資料3(21~30)は、両股打面によって縦長の剥片を連続的に剥離した資料である。それは、まず正面下端を打面として少なくとも5回の剥離後、aの剥離によって21が作られる。その後、180度打面転移して、同一の大きな剥離面を打面とするb~hの剥離によって22~30が作出される。これらの打点は、b~fは正面左側から右側に移行し、g~hは逆に右側から左側に移行する。このような剥片作出過程によって作出されたと思われるものは、2~5・11・12・接合資料1(14~16)の資料がある。なお、27~29はgの剥離時の同時折れである。

剥片の特徴は、打面調整はあまり行われず(30点中5点)、頭部調整が頻繁に行われている(29点中21点)。背面構成は、腹面の剥離方向と同方向のもの(H)の割合が高く(71%)、また、腹面と同方向のもののみで構成されるものの割合も高い(52%)。打面は薄くやや幅が狭いものが多く、線状のものが5点(30点中)ある。剥離角は90°~100°の範囲に集中し、平均は96°(24点)である。平面形状は、縦長で細長く先端はペン先状のものが多い。最大長:幅が2:1の付近に集中する。厚さは薄いものが多い。これらは、接合資料2・3の特徴と一致する。

これらのことから、この石器群の剥片生産技術の特徴は、頭部調整を頻繁に行い、打面が薄くやや幅狭で、縦長の細長い剥片を同一打面から連続的に剥離するものを主体とする。このように、この石器群は石刃技法をもつ石器群として位置付けることができる。

第2ブロック(表12)

第1ブロックから約75m離れた地点から2点出土した。出土層準はVIIa層である。第1ブロックとの共伴関係は把えられなかった。

表12 第2ブロック遺物属性

No.	遺物No.	分類	長×幅×厚(mm)	重(g)	圓	打面	打角	背	腹	構成	末端形状	使用痕	折れ面部位	石質	母岩	備考
1	1A99-1	剥片	8.8×8.5×1.2	0.08										安山岩	5	
2	1A99-2	剥片	16.6×14.5×4.4	0.91										安山岩	8	

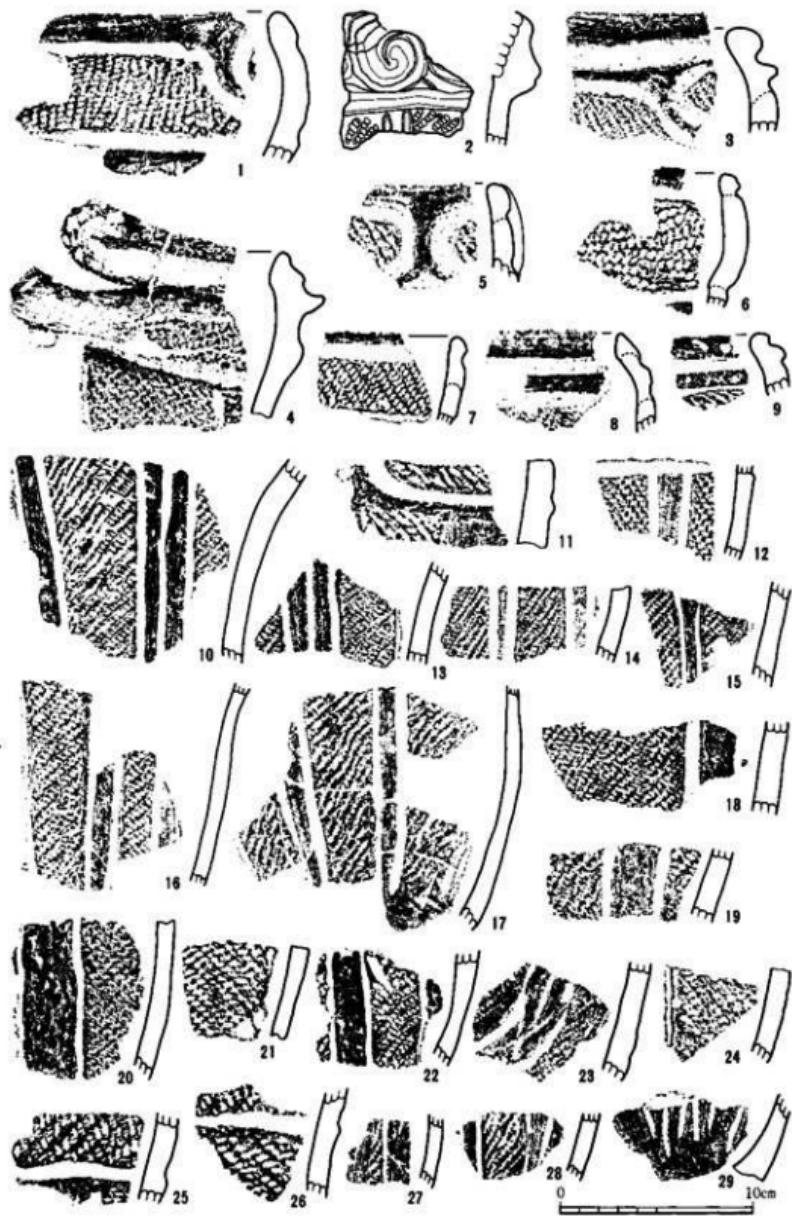
2. 繩文時代

遺物包含層として層位的には捉えられなかつたが、調査区内の各グリッドから土器片をはじめとする遺物が検出された。

土器（第47～49図、図版18～20）

大型の破片は僅かであり、ほとんどが小片の状態で出土した。復元可能なものも無い。縄文時代以外の遺構の覆土内から出土したものも加えて、出土総点数1,526点にすぎず、そのうち99.5%までが中期末葉・加曾利E式期後半のものである。

1～7・11・12は隆帯文あるいは沈線文によって口縁部文様帯を形成する深鉢の口縁部片である。11・12は胴上半部片。1は上下2本の幅広の沈線によって口縁部を区画し、区画間に渦巻文を配するものと思われる。渦巻文は外周に隆帯を貼付し、幅広の沈線によって描かれている。渦巻文直上の口縁部はやや盛り上がり、小さな波状を呈する。2は隆帯と幅広の沈線によって渦巻文とその両側の梢円区画文を描出する。口唇部は失われている。胴部は2本の沈線間を磨消した懸垂帯が垂下する。1・2の内面は丁寧なミガキ。3は口唇部に隆帯を貼付けて肥厚させ、直下に幅広の沈線が巡る。口縁部文様帯は隆帯と内側に沿った沈線で梢円区画文を形成する。1～3の地文はいずれも単節RL。4は口縁部直下に断面「几」状の貼付隆帯による渦巻文を口縁部から盛り上るように描出する。渦巻文は横位S字状文の一端かもしれない。口縁部文様帯と胴部文様帯は幅広の沈線によって区画され、口縁部直下の隆帯との間は沈線によって梢円区画文が描かれる。胴部は2本一組の沈線区画による磨消懸垂帯が垂下する。地文は前々段合撫R_L[L_R]。5・11は貼付隆帯と内側の沈線による梢円区画文を描出する。11は口縁上半部が失われている。胴部は2本一組の沈線区画による磨消懸垂帯が垂下する。5・11とも地文は無節R。6・7は上下2本の沈線による区画が描かれる。12は口縁上半部が失われているが、口縁部文様帯と胴部文様帯を区画する沈線がみられる。胴部は2本一組の沈線区画による磨消懸垂帯が垂下する。地文は6・12が複節LRL、7は単節RL。8・9は口縁部文様帯が喪失し、隆帯と両側に沿った沈線を巡らせたもの。8は内外面とも丁寧なミガキ。地文は8が単節LR。9は単節RL。10・13～19は沈線文をもつ深鉢胴部片である。10・13は3本一組の沈線区画による磨消懸垂帯が垂下する。同一個体と思われる。地文は単節RL。14～22・24・27・28は2本一組の沈線区画による磨消懸垂帯が垂下する。16と17、18と19は各々同一個体と思われる。18・19は内面のミガキを丁寧に行う。地文は14～19・22が単節RL、20・21は複節LRL、24は前々段反撫LRR。27・28は単節RLを地文として施した後、縦位の条線を加えている。23・46は沈線間を磨消した曲線文が描かれた深鉢胴部片で、23の沈線は3本一組である。地文はいずれも単節RL。25・26は非常に浅い幅広の沈線を横位に巡らす。内面のミガキは丁寧に行われている。同一個体と思われる。地文は複節LRL。29は深鉢胴下半部片である。2本あるいは3本一組の沈線区画による磨消懸垂帯を垂下させたものと思われる。地文は単節LR。30～33は口縁



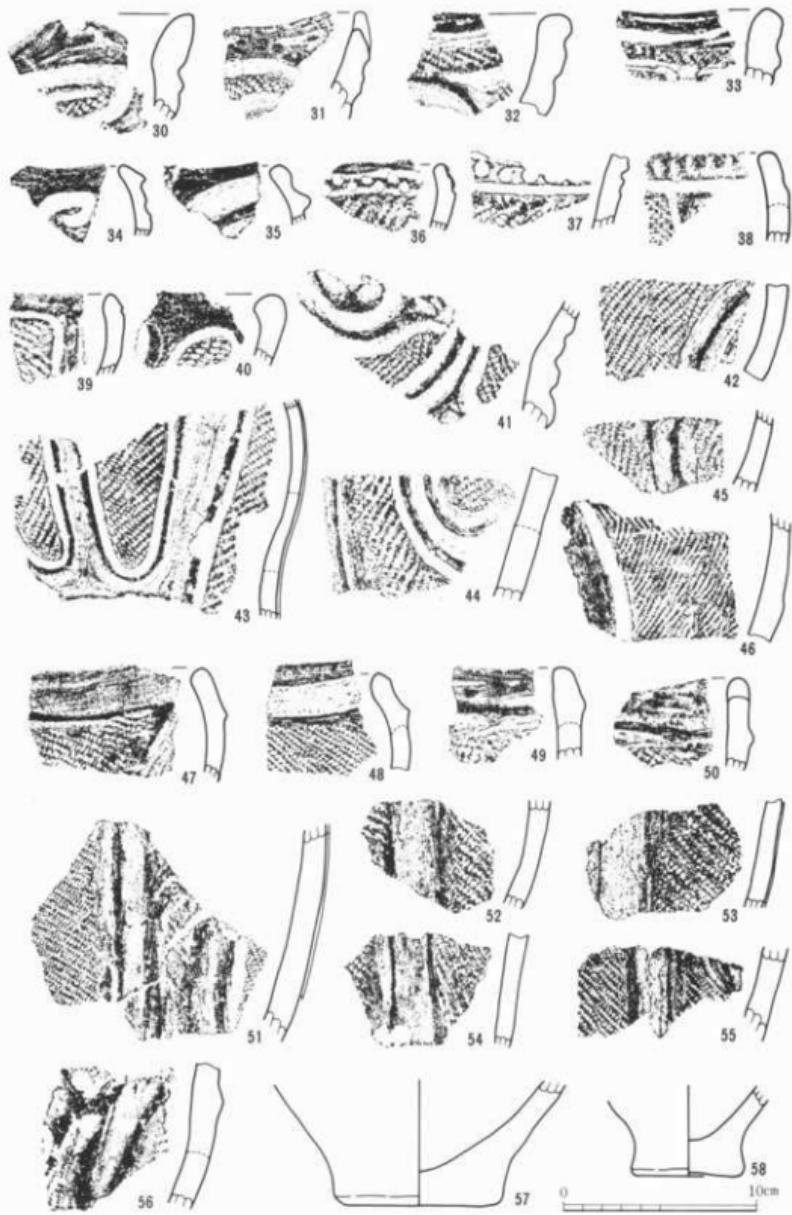
第47図 橢文土器(1)

部直下に幅広の沈線を上面に繩文を施文した断面「~」状の隆帯によって文様を描出した波状口縁をもつ深鉢の口縁部片である。文様帶としての口縁部区画は退化し、胴上半部の文様へスマーズに移行する。30・31は口縁部直下に渦巻文が描出される。30の渦巻文は波頂部直下に配される。32・33は口縁部直下に沈線が巡り、以下に隆帯とそれに沿う沈線とで胴上半部へ続く文様を描出する。30の波状部内面には粗いミガキ痕が残り、31の内面は丁寧なミガキが行われている。32・33の内面には単位幅の明瞭なミガキ痕が残されているが、いずれも幅5mm以上の幅広の工具を用い、口縁と平行に横位に行われている。外面の沈線を施文したものと同一工具である可能性が高い。地文は30が単節LR、他は単節RL。34・35は隆帯とそれに沿った沈線によって口縁部直下に渦巻文を描出する深鉢の口縁部片である。内外面とも丁寧なミガキが行われている。36・37は2本一組の沈線区画内に円形点列を刺突したもので、36は上下2段の点列が交互に配される深鉢口縁部片。沈線以下は単節RLが施される。37は深鉢口辺部片で、地文は単節LR。38は口縁部に縱位の爪形文を刺突し、直下に沈線を巡らした深鉢口縁部片である。胴部には2本一組の沈線区画による磨消懸垂帯が垂下する。地文は複節LRL。内面器壁の粗れが著しい。39・40は口縁部文様帯が消失し、沈線区画による胴部文様帯が口縁部直下にまでおよぶ深鉢の口縁部片である。39は口唇部が内側に突出気味に肥厚する。内面は丁寧なミガキが横位に行われている。地文は39が無節R、40は単節RL。

41～45は隆帯とそれに沿った沈線で曲線文を描出した深鉢胴部片である。41は幾何学的文様区画が描出される。区画内には地文、複節LRLが施されている。内面には横位のミガキ痕が残されている。43は隆帯とその内側に沿った沈線でU字状区画文が描出される。区画外は磨消されている。内面には幅広のミガキが横位に密に行われた後、底部から口縁部に向かって斜位に細いミガキが疎に行われている。44は2本の隆帯区画による磨消帯とそれに沿った沈線で曲線文が描かれている。42・44・45の内面は丁寧なミガキが横位に行われている。42～45はいずれも単節RLを地文としてもつ。

47～56はいわゆる微隆起線文をもつ深鉢の胴部及び胴部片である。47～50は口縁部直下に微隆起線が巡り、以下に地文の繩文が施されるもので、47は胴部にも微隆起線区画の磨消帯によるU字状区画がみられる。地文は49が複節LRL、他は単節LR。48は外面口縁部から内面にかけて丁寧なミガキが行われる。51～56は微隆起線区画の磨消帯をもつもので、51・56は幅広の磨消帯の中に微隆起線による逆U字状あるいは幾何学的文様が描かれている。51・52・55・56は内面の器壁の粗れがひどく、特に52・56では直径10mmほどの円形の剥落が多くみられる。また56は外面の磨減が著しい。地文は56のみ単節RL、他はいずれも単節LR。57・58は突出気味の底部をもつ深鉢底部片である。遺存部には文様は認められない。底径は57が8.0cm、58は推定6.1cm。

59～64は地文のみが認められる深鉢胴部片である。59・61は単節RL、60は単節LR、62は結



第48図 縄文土器(2)

束縄文 L {^R_L + {^L_R}, 63は反燃 LL, 64は前々段反燃 RLL が各々施文されている。62は内面器壁の粗が著しく、直径 5 mm 以下の円形の剥落が多くみられる。他はいずれも内面に横位のミガキを行っている。とりわけ 63・64 のミガキは非常に丁寧である。

65~76は櫛状工具によって施文された条線を地文としてもつものである。65は口縁部直下に非常に浅い沈線の巡る深鉢口縁部片である。条線は沈線以下斜位に施され、斜格子状の文様を描出する。66・67・71は沈線文をもつもので、66は 2 本の沈線区画による磨消懸垂帯を垂下させる深鉢胴部片。67は 1 本あるいは 2 本単位の沈線を垂下させる深鉢胴部片である。沈線間の磨消は行われていない。71は横位の沈線区画をもつ深鉢口縁部片と思われ、沈線区画以上には無文部がみられる。条線のうち最も多いのは疎密の違いはあるものの縦位の平行条線であり、66~70・72 が該当する。73・74は斜位の平行条線。65は 2 方向の斜位の条線で斜格子状の文様を描出している。71は部分的に斜位の平行条線を施した後、縦位のものを重ねている。75・76 は波状の平行条線を施している。67は内面の器壁の粗がひどく、直径 5 mm 以下の円形の剥落が多くみられる。他はいずれも丁寧なミガキが行われ、とりわけ 70・71・73~75 に著しい。

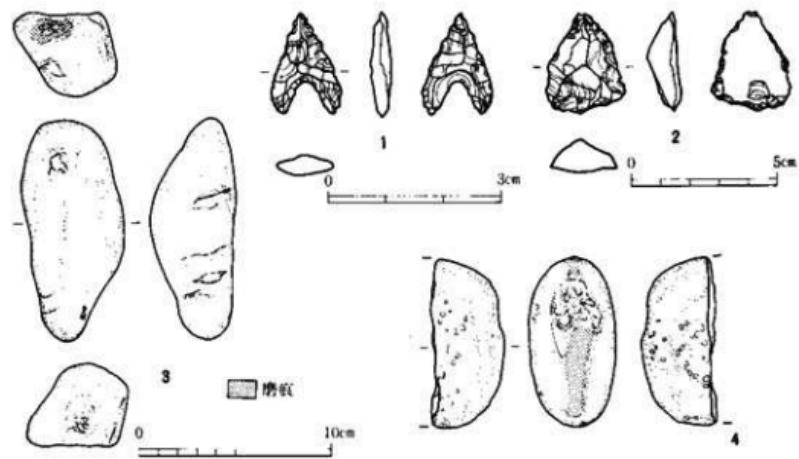
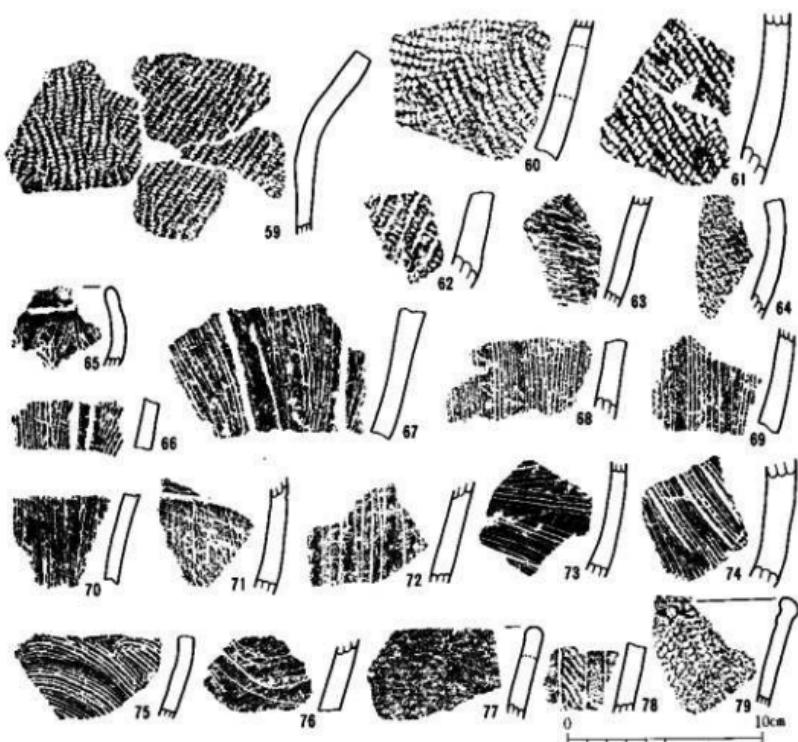
77 は無文の深鉢口縁部片である。内外面とも磨消している。内面には横位のミガキを施す。

78・79 は後期初頭～中葉の土器である。78は細沈線による帯状区画を描出し、充填繩文帯と無文帯を交互に繰り返す。深鉢胴部片。帯状区画は文様区画を構成すると思われるが、遺存部からは推測不可能。79は口縁上部に 1 本の貼付紐線文が巡る深鉢口縁部片である。紐線上には指頭により交互押捺が加えられ、紐線以下は単節 RL が全面に施文されている。内面は口縁直下に凹線を上面に加えた貼付紐線とそれに沿うナゾリ痕が認められる。

石器（第49図、図版15）

器種の判明及び推定できるものは図示した 4 点のみである。他に器種不明の礫石器と思われるものの小片及び破碎礫等 42 点が検出された。なお破碎礫等の中で焼成を受けた痕跡の認められるものは検出されていない。

1 は四基無基盤である。基部の抉りこみが比較的深く、均整のとれた脚部をもつ完形品である。石材はチャート。最大長 1.7cm、重量 0.44g を測る。2 はスクレイパーである。石材は玉髓。折損面は認められず、完形品であると思われる。最大長 3.3cm、重量 7.74g を測る。3・4 は敲石及び磨石的な利用がされたと思われる礫石器である。3 は上下端に敲打痕及び上端に磨痕が認められるもので、完形品である。石材は砂岩。最大長 11.2cm、重量 292.5g を測る。片方の掌で握る時に適当な形状と重量をもつものと思われる。4 は円礫の周側縁を利用したもので、約 1/2 の遺存であると思われる。遺存する側縁部には磨痕が全周し、敲打痕の集中する部分も認められる。また、礫表面にはアバタ状の潰痕が看取される。石材は安山岩。遺存最大径 8.5cm、重量 209.5g を測る。



第49図 繩文土器(3)・石器

土製品（第50図、表13、図版20）

土器片錐 8 点及び土製円板 4 点が検出された。すべて図示した。

1～8 はいずれも深鉢形土器の一部小片を利用した土器片錐である。3 は口縁部から胸上半部片、5・6 は口縁部片、他は胸部片が用いられている。7 は短辺側に 2 対の抉をもつもの、他はいずれも短辺側に 1 対の抉をもつものである。

9～12 は土製円板である。いずれも土器片を再利用したもので、深鉢胸部片を用いている。周縁の調整は、12 が最も丁寧で、側面が滑らかに磨かれている。9・11 の周縁の一部には形を調整したと思われる磨痕が認められるが、10 は打ち欠いた状態のままである。



第50図 土器片錐・土製円板

表13 土器片錐・土製円板計測値

検査番号	種類	遺存状態	計測値(cm)	块幅(cm)	重量(g)	時期	出土位置	備考
50-1	土器片錐	完存	7.1 7.1 1.2	6.6	93.50	加曾利E	1C74	
50-2	土器片錐	完存	7.9 6.0 1.3	6.6	71.70	加曾利E	1号墳	
50-3	土器片錐	完存	6.8 4.7 1.0	6.2	44.56	加曾利E	1A96	
50-4	土器片錐	—	4.6 5.8 1.1	—	40.25	加曾利E	1C81	1短辺側欠損
50-5	土器片錐	—	6.0 4.7 1.3	—	35.53	加曾利E	1A96	1短辺、1コーナー欠損
50-6	土器片錐	完存	5.2 4.7 1.3	4.4	42.65	加曾利E	1C96	
50-7	土器片錐	ほぼ完存	5.9 5.5 1.5	左 5.1 右 5.2	50.51	加曾利E	1B97	短辺側に2対の抉
50-8	土器片錐	完存	5.7 4.0 1.0	5.5	36.35	加曾利E	1B98	
50-9	土製円板	少	5.4	1.2	30.63	加曾利E	1A81	
50-10	土製円板	完存	4.0	1.1	19.01	加曾利E	3号土墳	
50-11	土製円板	完存	4.0	1.1	20.30	加曾利E	表採	
50-12	土製円板	少	(4.4)	0.9	5.30	加曾利E	1A96	

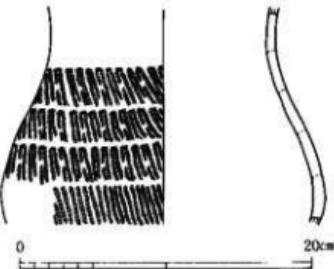
* () 内は推定値

3. 弥生時代

調査区の西端1A93グリッドより土器が1点のみ検出された。破片状態であったが、すべて接合した。

土器（第51図、図版24）

菱形土器の頸部～胴上半部である。胴部最大径推定22.5cm、残存高14.4cmを測る。頸部くびれ部以下胴部にかけて付加条縞文が施される。付加条縞文は1周毎に完結する横位文様帯を構成しており、遺存部分においては4段看取される。原体はR [L + L]と思われる。



第51図 弥生土器

4. 古墳～奈良・平安時代

包含層として層位的には捉えられなかったが、調査区内の各グリッドより土器をはじめとする遺物が若干量検出された。

土器（第52図、図版24）

土師器で器形の復元できたものは図示した6点のみである。他には544点を数える小破片が検出された。そのうち口縁部片によって個体数を数えると、壺・壺類38点、壺・高壺類16点、壺4点を認ることができた。

1はやや長胴化した胴部に外湾気味に大きく開く口縁部をもつ壺である。口唇部は内面に段をもって肥厚する。胴下半部以上約1/2が遺存する。口径推定16.4cm、胴部最大径推定23.2cm。

口縁部から頸部にかけてヨコナデ。胴部は外面が縱位のヘラケズリ、内面はヘラケズリ後ナデ。ヘラ状工具端痕を明瞭に残す。外面下半部には、器表面に煤の付着部分及び大きな剥落部分が認められる。2は頸部の収縮が弱い「く」字状を呈する壺である。胴上半部以上約1/2が遺存。口径推定18.0cm。口縁部ヨコナデ。頸部外面には指頭による接合時のおさえ痕が僅かに残る。胴部は内外面ともヘラケズリ後ナデ。外面頸部から肩部にかけては丁寧なナデ。3は台付壺の脚部片である。転用器台としての使用が考えられ、台上面及び壺胴部へ立ち上がる割れ口は丁寧に磨かれて滑らかである。壺端部を除く約1/2のみ遺存。脚部外面は縱位のヘラケズリ、上位には横位のナデ。内面及び割れ口は黒色を呈する。4は上げ底気味の小さな底部から内窓気味に立ち上がり、やや深い体部に内窓気味に終る口縁部をもつ壺である。口径約1/2欠損。口径推定14.8cm、底径5.3cm、器高6.1cm。調整及び整形が難で、歪みが大きい。口縁部ヨコナデ。体部外面はヘラケズリ後ナデ。部分的に指頭による強いナデが施される。内外面とも体下半部以上赤彩。5は扁平な体部に外縁以上が内窓する口縁部をもつ壺で、約1/3のみ遺存する。口径推定15.4cm。口縁部ヨコナデ。体部はヘラケズリ後ナデ。内面には多方向の細かいミガキが密に行われる。内面は黒色を呈する。6は浅い弧状の体部と、外窓する外縁から直立気味に立上がり僅かに外反して終る口縁部をもつ壺である。体上半部以上約1/2のみ遺存。外縁以上ヨコナデ。体部はヘラケズリ後丁寧なナデ。内面には細かいミガキが密に加わる。内面は暗褐色を呈する。

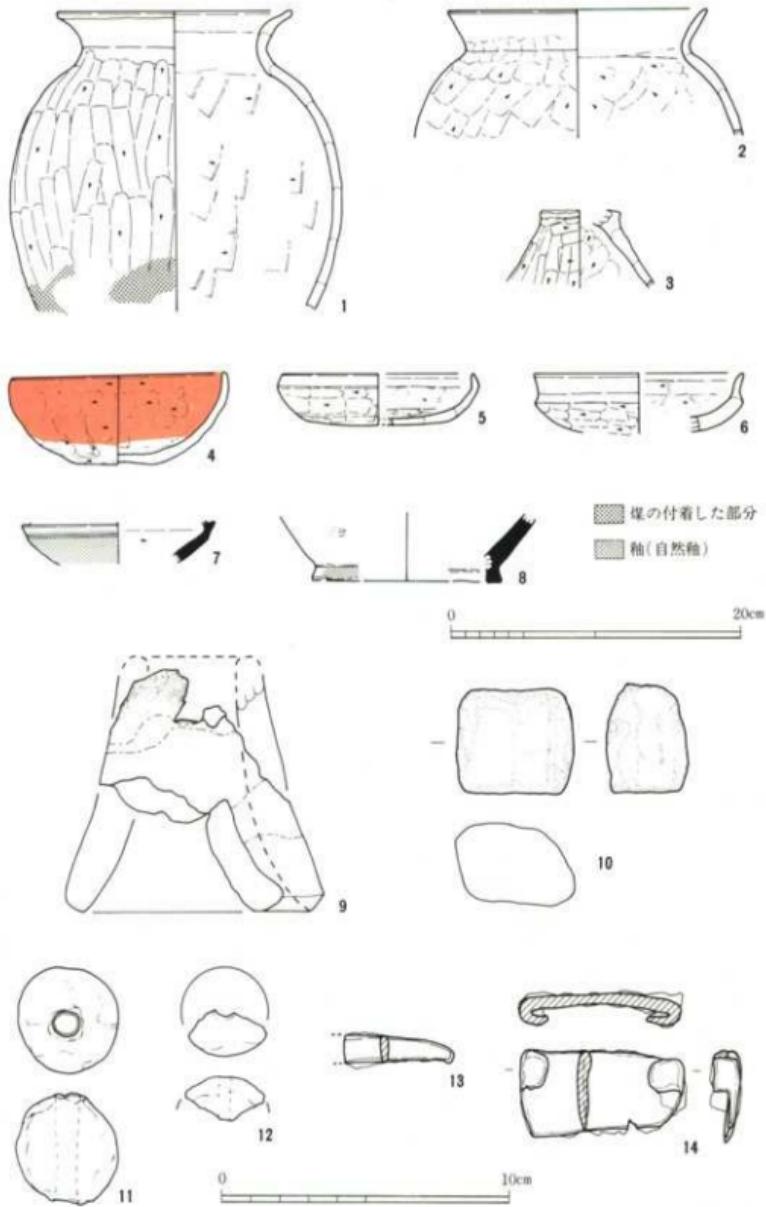
須恵器は3点を数えるのみである。いずれも小片であるが、辛うじて器形の復元できる2点を図示した。他の1点は壺の胴部小片である。7は反りをもつ蓋壺である。壺として扱ったが、極めて小片であるため蓋としての可能性も否めない。最大径推定13.4cm。外面には暗緑色の自然釉が認められる。8は貼付けによる高台をもつ長頸壺の底部片である。高台外径推定13.0cm。高台外面に暗緑色の自然釉がみられる。

羽口、土製品、鉄製品（第52図、表14、図版24・25）

表14 古墳～奈良・平安時代遺物計測値

擇図番号	種類	遺存状態	計測値*			重量(g)	備考
			外径 （cm）	通風口径 （cm）	高さ （cm）		
52-10	羽口	△	片 （8.1）	5.7 （4.8）	3.0 （7.8）	1.0~1.4	—
52-11	支脚	—	長 3.5	短 4.0	—	27.3	砥石として転用か？
52-12	球状土錐	完存	横径 3.7	3.5	0.8	40.69	—
52-13	球状土錐	△	（3.0）	（3.8）	（0.6）	—	—
52-14	脚先	完存	長 3.0	幅 4.5	0.1	20.18	小型
52-15	刀子	基一部のみ	3.9	5.7	0.5	3.54	—

* () 内は推定値



第52図 古墳～奈良・平安時代遺物

5. 近世以降

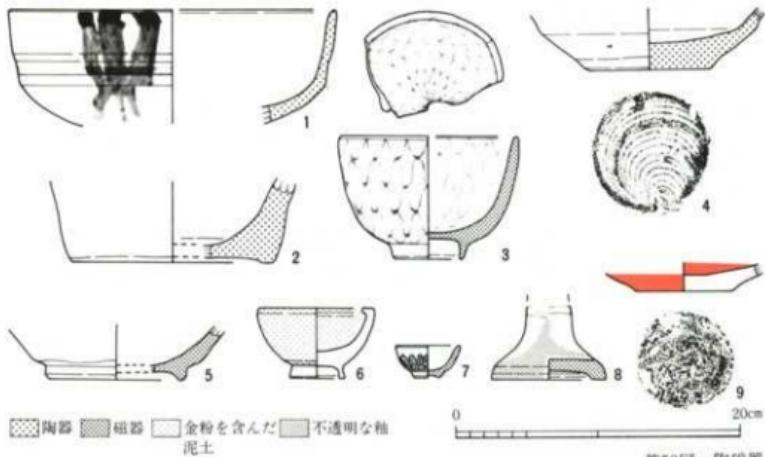
近世以降の遺物としては次のようなものを挙げることができる。陶磁器片等98点、熔岩・かわらけ等素焼の土器183点、砥石2点、瓦54点、泥面子等の素焼の玩具と思われるもの41点、手捏の不明土製品61点、錢貨1点。これらの遺物はほとんど盛土・表土及び擾乱中より検出されたものであり、遺存状況も極めて悪いものが多い。時代的には、18~19世紀にかけての遺物が主体的である。

以下、主なものをとりあげて、若干の説明を加えたい。

陶磁器（第53図）

いずれも小片であるが、そのうち図化することのできた9点について説明を加えてみたい。

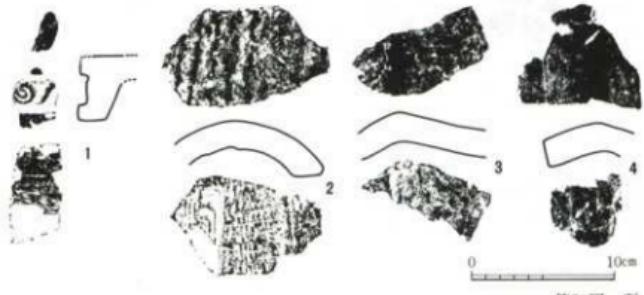
1・5は御深井釉茶碗片である。1は口縁部から体部にかけて約1/4が遺存し、外面に呉須流しが認められる。口径推定10.8cm、遺存高4.0cm、器厚3~4mmを測る。胎土は灰白色を呈し、呉須の発色は淡いコバルトである。5は体部から底部にかけて約1/2が遺存する。底径推定4.6cm、遺存高1.8cm、器厚は胴部5mm、底部2.5mmを測る。低い高台をもつ。胎土は灰白色を呈し、緻密である。外面底部・高台部を除き釉がかっている。いずれも19世紀前半の瀬戸の製品と思われる。2は美濃灰釉篠利片である。底部約1/3が遺存する。底径推定7.2cm、遺存高2.9cm、器厚は胴部8mm、底部4mmを測る。非常に低い高台を作りだし、高台角が僅かに磨耗している。胎土は明淡黄色を呈し、灰白色釉が外面上位に認められる。18世紀後半以降の製品と思われる。3は伊万里染付小碗片である。約1/2が遺存する。口径推定6.3cm、底径推定2.4cm、器高4.3cm、器厚3~4mmを測る。胎土は白色を呈し、緻密。呉須の発色は良く、内外面に網目文様が描かれる。18世紀後半の製品と思われる。4は陶器油皿片である。口縁部を欠損している。底径4.3cm、遺存高2.2cm、器厚は胴部4mm、底部10mmを測る。底面には回転糸切痕を有し、底部角がやや磨耗している。胎土は灰白色を呈し、口縁部内外面には灰釉がかけられていたと思われる。19世紀前半以降の瀬戸の製品と思われる。6は素焼の盃片である。口縁部から体部上半部にかけての約1/2を欠損する。口径4.2cm、底径1.0cm、器高2.4cm、器厚は体部3mm、底部5mmを測る。胎土は明淡褐色を呈し、外面底部を除く全面に金泥（金粉を含む泥土）が塗られる。7は伊万里紅皿片である。約2/3が遺存する。口径2.4cm、底径1.8cm、器高1.1cm、器厚2mmを測る。胎土は白色を呈し、緻密である。全面に釉がかかる。19世紀後半の製品と思われる。8は伊万里染付仏飯具片である。脚部のみの遺存である。底径4.0cm、遺存高2.5cm、脚径1.6cmを測る。胎土は白色を呈し、緻密である。呉須による二条の線が左廻りに引かれる。全体の約2/3に不透明な釉がかけられている。19世紀前半の製品と思われる。9は素焼の皿片である。口縁部を欠損する。底径3.4cm、遺存高1.0cm、器厚は体部4mm、底部6mmを測る。底面には回転糸切痕、体部はクロ痕が明瞭である。内外面朱塗の皿であり、内面には部分的に漆状の物質が認められる。割れ口の磨滅が著しい。



第53図 陶磁器

瓦 (第54図)

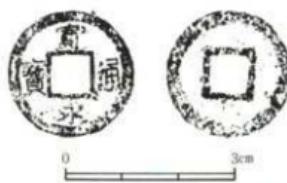
調査区内の各グリッドより総数64点が検出された。内訳は、軒平瓦1点、丸瓦5点、棟瓦58点である。また全体の84%に相当する54点が素焼きのものである。いずれも小片であり、僅かに特徴の窺える4点を図示した。



第54図 瓦

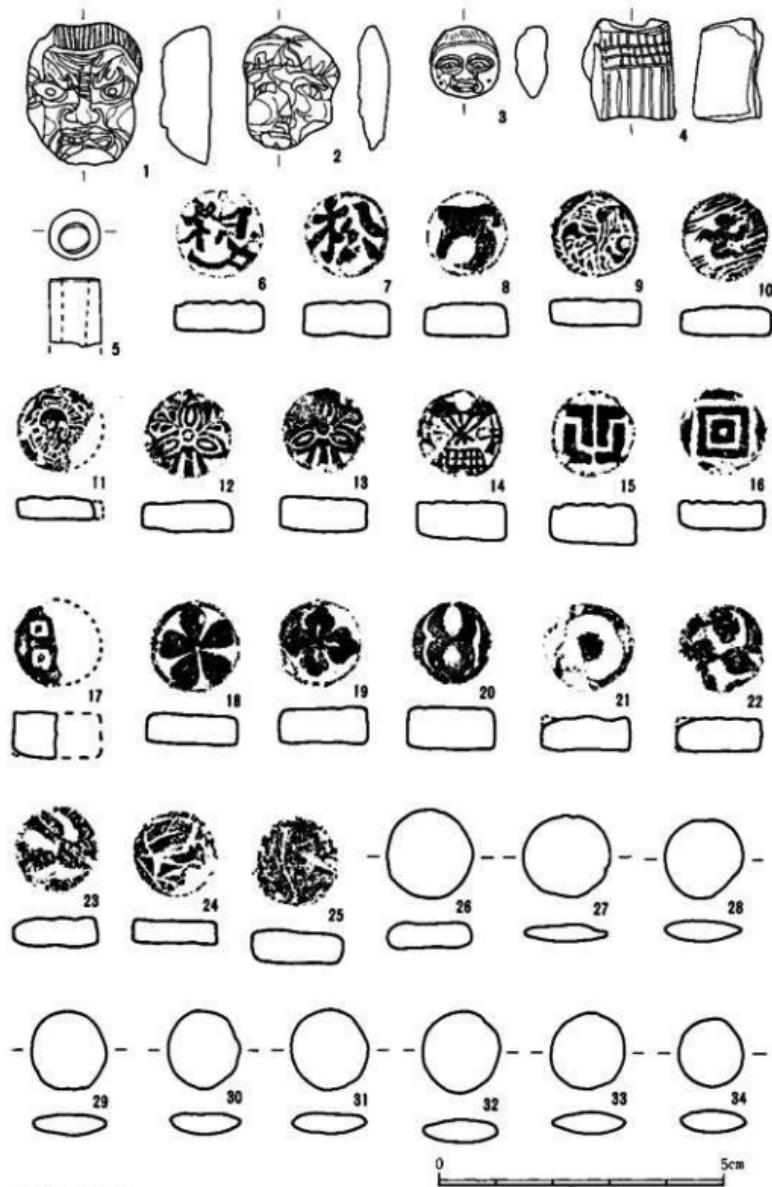
銭貨 (第55図)

調査区の西端1A54グリッドから寛永通寶1点が検出された。元禄京輕目銭。腐蝕・鉄化は少ない。各部計測値は次のとおり(重量以外は平均値)。外縁外径: 22.29mm, 外縁内径: 18.09mm, 内郭外径: 8.28mm, 内郭内径: 6.57mm, 外縁厚: 1.98mm, 文字面厚: 0.08mm, 重量: 2.12g。



第55図 銭貨

泥面子（第56図、表15、図版25）



第56図 泥面子

表15 泥面子計測値

探査番号	種類	絵柄	材質	成形	遺存状態	計測値*(mm)	重量(g)	出土位置
56-1	泥面子	面	素焼	型押	ほぼ完存	底 横 厚 37.1 32.0 12.9	13.20	1A54
56-2	"	"	"	"	ほぼ完存 表面磨耗	27.3 26.5 7.9	5.40	1B61
56-3	"	"	"	"	光存	19.1 18.4 7.9	2.64	1B98
56-4	"	ミニチュア(不明)	素焼	型押	一部分のみ 底 横 厚 27.8 22.5 17.2	7.18	1A76	
56-5	"	" (円筒?)	"	"	" 長 幅 厚 16.8 13.9 7.8	2.31	1B72	
56-6	"	文字(柏戸)	素焼	型押	完存	底 横 厚 23.3 7.4	4.58	1B61
56-7	"	" (松)	"	"	"	23.4	9.1	5.68 1B50
56-8	"	" (万)	"	"	"	22.7	8.6	4.83 表探
56-9	"	形象(鳥?)	"	"	"	23.7	6.2	3.90 表探
56-10	"	" (鳥)	"	"	"	23.8	7.5	4.93 1C92
56-11	"	" (面?)	"	"	"	22.3	5.8	2.79 1A76
56-12	"	紋草(沢園)	"	"	ほぼ完存	23.3	7.9	4.54 1B61
56-13	"	" (？)	"	"	ほぼ完存 表面磨耗	23.2	8.7	5.42 1C90
56-14	"	形象(崩 - ?)	"	"	完存	23.7	9.2	6.31 1B94
56-15	"	紋草(曲尺)	"	"	"	22.7	10.0	6.11 1A54
56-16	"	" (入れ子折)	"	"	"	22.3	7.2	4.25 1B54
56-17	"	" (菅)	"	"	表面磨耗	22.8	10.9	3.48 1A83
56-18	"	" (梅?)	"	"	完存	24.7	7.9	5.67 1C74
56-19	"	" (花菱)	"	"	表面磨耗	23.4	9.5	6.23 1C90
56-20	"	" (弓?)	"	"	完存 表面磨耗	22.8	10.2	6.52 1A69
56-21	"	" (蛇の目輪)	"	"	ほぼ完存 表面磨耗	23.6	9.0	5.46 1B54
56-22	"	" (三つ巴)	"	"	ほぼ完存 表面磨耗	23.1	8.9	5.24 1号住居跡
56-23	"	" (？)	"	"	完存 表面磨耗	22.4	7.1	4.03 1A76
56-24	"	形象(葉?)	"	"	ほぼ完存 表面磨耗	22.2	6.2	3.43 1B72
56-25	"	不明(縦刻あり)	"	"	ほぼ完存 表面磨耗	24.2	9.1	5.35 表探
56-26	基石	——	素焼	手捏	光存	底 横 厚 22.5 6.5	3.51	表探
56-27	"	——(両面指紋あり)	"	"	"	21.8	5.2	2.09 1B94
56-28	"	——(？)	"	"	"	20.1	5.9	1.97 1B76
56-29	"	——(？)	"	"	"	20.2	6.1	2.04 2B05
56-30	"	——(？)	"	"	"	19.8	5.4	1.75 1C87
56-31	"	——(？)	"	"	"	19.9	5.6	2.11 2B07
56-32	"	——(？)	"	"	"	20.5	6.2	2.13 1B72
56-33	"	——(？)	"	"	"	19.9	6.1	1.79 1C76
56-34	"	——(？)	"	"	"	16.7	6.4	1.69 1B94

*計測値は遺存最大値

V 一括サンプル内出土の自然遺物

1. 資料の採取方法と集計方法

今回報告する資料は、貝殻を覆土中に含む遺構内堆積物の一括サンプルから水洗分離されたもので、以下にサンプルの採取方法と水洗処理の方法について記す。

サンプル採取の対象となった遺構は1号、2号住居跡と3号、4号、6号土壙である。サンプル採取地点の選定とその大きさ等については発掘担当者の判断によって決められた。それによると一括サンプルは、いずれも45×30cm大のビニル袋に七分～八分目ほどの量ずつに分割され、いくつかのグループごとに遺物番号がふられているが、2号住居跡の炉址内サンプル2袋を除くとどれにも採取地点の位置や深度、大きさなどが記録されていない。さまざまな制約があったものと推定されるが、各遺構に堆積する貝層をほぼ全部採取したものらしく、サンプル総数は95袋に達し、上記の2袋を除いたすべてのサンプルに多量の貝殻が含まれている。与えられた整理期間内にこれらの全サンプルを調査することは困難であるので、今回は、各遺構ごとに全部のサンプル袋に符号をふり分け、採取したサンプル量に応じて調査対象とする袋を抽選した。抽選は任意に開いた本の頁数の下2ケタによって行った。その結果、19袋が調査対象に選ばれたが、各遺構ごとのサンプル量については次項に記した。

水洗は直徑250mm、メッシュ寸法9.52, 4.0, 2.0, 1.0, 0.5mmの5種類のステンレス製同規試験フリイ（三田村理研工業製）を用いて流水下で行った。各メッシュ面上における分離物は自然乾燥後に白紙上に広げてのぼし、この中から肉眼的に識別しうる資料を採集した。

資料の集計は以下のように行った。貝類資料は9.52と4.0mmメッシュ分離物だけを採集対象とし、腹足綱は体層を保存するものを、また二枚貝綱は主歯を保存するものを集計した。しかし、從来筆者がとってきたこの方法では、個体数が少なくても肉量の多い貝種の占める割合がほとんど評価できない。そこで今回は、既述した2種類のメッシュ面上に分離した全部の貝資料を貝種別に計量し、両者の結果を比較することにした。破片資料の同定は技術的に高い練度を必要とするが、当遺跡における産出貝類の種組成が比較的単純であること、補助員の選別作業の大部分を筆者が直接チェックできることなどの条件に恵まれたので今回はこれに踏み切った。なお、有肺亜綱、フジツボ類、炭化物等は2.0mm以下の各メッシュ面上の分離物も集計対象とし、その重量を計量した。

脊椎動物資料は各メッシュ面上の分離物をすべて精査したが、魚類資料は闊節部を保存するものを集計した。椎体は $\frac{1}{2}$ 以上を保存するものとそれ未満のものを別々に集計し、後者は破損資料として扱った。集計は資料の出現頻度数で表し、重量の計量は行わなかった。

なお、資料の計量には島津製作所製電子ばかり LIBROR EL-600 を使用し、計測には田島製作所製ダイヤル式カーボンファイバーノギス DIAL-15 を使用した。また、調査した一括サンプ

ルの大きさを客観的に示すために水洗前の湿重量を計量したが、これには秤量100kg、最少目盛500gの家庭用体重計（メーカー名不明）を用いた。

2. 同定結果

今回調査したサンプルからは第16表に示す動物遺存体と炭化物、土器剝片等が採集された。

表16 産出動物一覧

軟体動物

腹足綱

前鰐亞綱

イボキサゴ	<i>Umbonium (Suchium) moniliferum</i>
スガイ	<i>Lunella coronata coreensis</i>
カワニナ	<i>Semisulcospira libertina</i>
カワアイガイ	<i>Cerithideopsis djadjariensis</i>
ウミニナ	<i>Batillaria multiformis</i>
イボウミニナ	<i>Batillaria zonalis</i>
ツメタガイ	<i>Neverita (Glassaulax) didyma</i>
アカニシ	<i>Rapana venosa</i>
イボニシ	<i>Reishia clavigera</i>
アラムシロ	<i>Reticunassa festiva</i>
パイ	<i>Babylonia japonica</i>

有肺亞綱

有肺亞綱種不明もしくはヤマタニシ科、ゴマガイ科などの陸産貝

二枚貝綱

サルボウ	<i>Scapharca subcrenata</i>
マガキ	<i>Crassostrea gigas</i>
オキアサリ	<i>Gomphina (Macridiscus) veneriformis veneriformis</i>
アサリ	<i>Ruditapes philippinarum</i>
オキシジミ	<i>Cyclina sinensis</i>
カガミガイ	<i>Dosinorbis (Phacosoma) japonicus</i>
ハマグリ	<i>Meretrix lusoria</i>
シラオイガイ	<i>Circe scripta</i>
オニアサリ	<i>Notochione jedoensis</i>
バカガイ	<i>Mactra chinensis</i>
シオフキ	<i>Mactra veneriformis</i>
マテガイ	<i>Solen strictus</i>
オオノガイ	<i>Mya (Arenomya) oonogai</i>

腔腸動物

花虫綱

キクメイシモドキ	<i>Oulastrea crispata</i>
----------	---------------------------

節足動物

甲殻綱

フジツボ	<i>Thoracica fam. indet.</i>
------	------------------------------

脊椎動物

硬骨魚綱

マイワシ	<i>Sardinops melanostictus</i>
真骨類種不明	<i>Teleostei order indet.</i>

a. 1号住居跡

本号跡から得た一括サンプルは既述のビニール袋にして49袋に分かれているが、今回はその約20%に相当する10袋35kg分を調査した。ただし、このうち3袋分については計量できなかつたので、実際に調査したサンプル重量は40kg以上になるものと思われる。

これらのサンプルからは第17表に示す腹足綱10種、二枚貝綱11種、フジツボ1種類、炭化物が同定された。同表横欄に示した各サンプルの番号は、既述のように採取地点や深度を表すものではないので記載順自体はほとんど意味をもたない。貝類は同定が困難な破片資料を含めて総量約10.3kgに達するが、貝種別重量では約2.9kgのオキアサリが最も大きな割合を占め(約29%)、これについてハマグリ約24.5%、アサリ約20%、シオフキ約18%の順につづく。二枚貝綱では検査した各サンプルにおける出現頻度が高い貝種ほど総重量の割合も高い傾向にあって、ある特定の貝種があるサンプルだけに集中的に出現する傾向はみられない。

一方、同表右欄に示した最少個体数によって貝類組成を検討すると、アサリ、イボキサゴ、オキアサリ、ハマグリ、シオフキの順に個体数が多い。これを上記の結果と比較すると両者の順位に大きな変動がみられる。すなわち、個体数比で上位にあったものが重量比で地位が落ち込むものは、ツメタガイを除く腹足綱すべて、アサリ、オキシジミ、シラオイガイなどであるが、特にイボキサゴとアサリの低下が著しい。これとは逆に重量比で地位が上がったものは、マガキ、オキアサリ、カガミガイ、ハマグリ、バカガイ、シオフキなどで、特にオキアサリ、

表17 動物遺存体同定結果（1号住居跡）

(単位: g)

種名	遺物番号						重量	相対値 (%)	最小個体数 (二枚貝綱) (左側数-右側数)	計
	027 1.0	078 5.0	079 —	080 11.0	081 9.0	082 9.0				
イボキサゴ	0.2	8.8	12.8	43.6	3.7	35.1	3.9	148.1	(1.47)	1943
スザギイ	*	0.3	0.7	4.3	0.1	0.2	*	5.6	(0.06)	11
カワニナ	*	*	1.1	*	*	*	*	1.1	(0.01)	1
カワアイ	*	*	*	0.2	*	*	*	0.2	(0.00)	1
ウミニナ	0.1	2.0	2.7	24.8	3.1	1.0	0.1	33.8	(0.39)	74
イボウミニナ	*	*	*	0.4	0.2	*	*	0.6	(0.01)	7
ツメタガイ	*	*	*	*	*	3.5	1.7	5.2	(0.05)	1
アカニシ	*	*	*	1.3	*	*	*	1.3	(0.01)	2
アラムシロ	*	1.5	0.3	13.7	0.8	2.4	0.4	19.1	(0.19)	53
バ	*	*	1.0	*	*	*	*	1.6	(0.01)	1
マガキ	5.9	21.4	48.1	286.6	100.5	*	10.7	473.2	(4.71)	97
オキアサリ	36.0	435.5	237.0	488.3	485.4	807.9	398.4	2886.5	(28.76)	716
アサリ	5.0	377.4	337.8	906.6	172.3	86.5	55.4	1991.0	(19.82)	1343
オキシジミ	*	0.6	*	*	*	*	*	0.6	(0.00)	1
カガミガイ	*	13.0	7.5	59.3	*	48.9	25.7	154.4	(1.54)	7
ハマグリ	9.3	151.7	313.5	752.0	534.8	573.1	130.0	2464.4	(24.54)	598
シラオイガイ	*	*	*	0.0	*	*	*	0.0	(0.00)	1
オニアサリ	*	0.6	*	0.0	*	*	*	0.6	(0.00)	1
バカガイ	*	*	*	*	*	11.2	*	11.2	(0.11)	1
シオフキ	14.0	140.5	274.8	710.8	168.4	350.3	186.6	1845.4	(18.37)	309
マテガイ	*	*	0.1	*	*	*	0.1	(0.00)	1	(+ +)
計	70.5	1152.1	1237.3	3382.0	1469.3	1920.1	812.9	10044.2	(100.05)	4267
未同定目数	1.5	10.4	15.2	56.8	34.4	79.7	15.7	233.7	*	*
フジツボ	*	0.1	0.2	2.5	0.2	*	*	3.0	*	*
炭化物	*	*	0.1	0.2	0.8	0.1	0.0	1.2	*	*

ハマグリ、シオフキの3種が顕著である。後述するように今回調査したサンプル内に出現したアサリは比較的小形で殻質も薄質なものが多かったことからすると、前者にはおおむね1個体あたりの平均殻重量が相対的に軽いものが属しているものと思われる。

貝類以外にはフジツボと炭化物が採集されたが、ともに少量で炭化物は細片に分かれている。なお、本号跡から出土した土器資料のほとんすべては加曾利E式後半に属しており、覆土サンプルの堆積時期は縄文時代中期後葉と推定される。

b. 2号住居跡

本号跡の一括サンプルは4袋に分かれており、総重量は約12.8kgである。このうち2袋約9.3kgは覆土中から採取したもので、残りの2袋約3.5kgは炉址内に堆積する灰層と炭化層から採取したものである。第18表に示す覆土サンプルの記載順は任意であるが、炉址内堆積物は覆土サンプルよりも下位に堆積し、また、灰層は炭化層よりも上位に堆積する。今回はこれらの全サンプルを調査できたが、本号跡覆土から出土した土器資料の大部分が加曾利E式後半に属しており、各サンプルの堆積時期は縄文時代中期後葉と推定される。ただし、1号住居跡の出土資料に比べると本号跡の出土資料の方が相対的に新しい型式に属することが明らかであるので、覆土の堆積時期は本号跡の方が若干下がる可能性がある。

調査した各サンプルからは、表18、表19に示す腹足綱4種、二枚貝綱8種、有肺亜綱、フジツボ、炭化物、土器剥片、硬骨魚綱6種類が同定された。表18から明らかのように、貝類は有肺亜綱を除くと覆土中のサンプルに集中して出現し、炉址内のサンプルからはほとんど出現しないのに対して、脊椎動物の骨と土器剥片は炉址内のサンプルだけに出現した。採集資料のなかでは貝類が最も大きな重量を占め総量約1.3kgに達した。貝種別では0.9kgを記録したオキアサリの重量が最も大きく、全体の約69%を占める。これについて、イボキサゴ(約14%)、マテガイ(約8%)、ハマグリ(約4%)の順で重量が大きい。この傾向は、1号住居跡のサンプルにおける同定結果とかならずしも一致しないが、これが両住居跡の時期差を反映するものかどうかは明らかではない。

魚類資料は、従来どおり採集頻度を表現する方法を採用した(表19)。次項に詳述するように同表に示した7種類の魚類のうちニシン科種不明は将来すべてマイワシに統合される可能性が強く、また真骨類種不明(B)(以下では真骨類Bと略す。他も同じ)とB'はともに同一魚種になる可能性が強い。したがって、今回のサンプル中に出現した魚類資料は少なくとも5種の魚に由来するものと考えられるが、これらの中ではニシン科種不明(=マイワシ)の出現頻度が圧倒的に高い。つぎに層序別と魚種別に資料の出現頻度をみると、各資料とも灰層サンプルからの出現頻度が高く、炭化層サンプルからの出現頻度は極端に低いかまったく出現しない。ただし、真骨類Cは灰層サンプルから同定できなかった。なお、炉址内から出土した脊椎動物の遺存体はすべて強い熱をうけた痕跡がある。

表18 動植物遺存体同定結果（2号住居跡）

(単位:gr)

種名	部位(遺物番号) 換算サンプル重量(kg)				合計		
	住居跡覆土(021)	住居跡覆土(022A)	住居跡灰層(022B)	住居跡炭化層(023)	重量	相対量 (%)	最小個体数 (二枚貝類 +骨格)
	4.75	4.5	2.0	1.5			
イボキサゴ	134.1	51.7	1.1	•	186.9	(14.42)	1032
ウミエナ	0.2	•	•	•	0.2	(0.02)	1
足	0.3	•	•	•	0.3	(0.02)	1
網	アラムシロ	0.3	•	•	0.3	(0.02)	1
マガキ	12.4	10.6	•	•	23.0	(1.78)	6 (5-2)
オキアサリ	530.9	362.8	1.7	•	895.4	(69.11)	532 (521-537)
アサリ	14.4	3.6	0.4	•	18.4	(1.42)	15 (15-10)
枝	カガミガイ	4.5	0.6	•	5.1	(0.39)	1 (- - -)
貝	ハマグリ	31.5	17.6	0.2	49.3	(3.89)	34 (19-34)
網	バカガイ	3.9	2.6	•	6.5	(0.56)	1 (- - -)
シオフキ	5.0	4.2	•	•	9.2	(0.71)	2 (- - 2)
マテガイ	43.7	57.4	•	•	101.1	(7.86)	23 (23-15)
計	781.2	511.1	3.4	•	1296.7	(99.99)	1654
未同定貝類	12.0	13.8	4.2	•	30.0	•	•
その他	筋	骨	肉	網	0.0	•	•
の	フジワラ	•	0.1	0.0	0.1	•	•
地	炭化物	0.1	•	—	0.1	•	•
土	骨片	•	•	0.3*	2.6*	2.9*	•
ニシン科	•	•	V	•	•	•	•
後	真骨類不明A	•	•	RR	•	•	•
骨	B	•	•	RR	•	•	•
魚	C	•	•	RR	•	•	•
網	D	•	•	R	•	•	•
脊椎動物種不明	•	•	C	R	•	•	•

V:非常に多い。C:多い。R:稀れ。RR:非常に稀れ。(詳細は第19表参照)

*皮膚破壊度を含む

表19 2号住居跡一括サンプル内出土脊椎動物

種名	同定部位	炭層			炭化層			合計	
		a*	b	c	a	b	c		
マイワシ	第1脊椎標本	•	6	•	•	•	•	6	
	同破損資料	•	4	•	•	•	•	4	
	第2脊椎標本	•	6	•	•	•	•	6	
	同破損資料	•	2	1	•	•	•	3	
ニシン科種不明	腹椎	8	200	7	•	8	•	223	
	尾椎	4	213	4	•	5	•	226	
	椎体破損資料	•	123	•	•	3	•	126	
	真骨類不明(A)	椎体a(破損)	1	•	•	•	•	1	
種不明(B)	椎体b(破損)	1	•	•	•	•	•	1	
	椎体b'(破損)	•	1	•	•	•	•	1	
	椎体c(破損)	•	1	•	•	1	•	1	
	椎体c'(破損)	•	1	•	•	1	•	1	
	椎体d(破損)	•	4	1	•	•	•	5	
種不明(D)	遊離円錐歯	1	9	2	•	•	•	12	
	遊離臼齒	1	9	2	•	•	•	12	
脊椎動物		骨片			R** C V *			R *	
網以下不明	骨片	—	0.2g	0.1g	•	2.0g	0.6g	2.9g	
土	骨片	—	—	—	—	—	—	—	

* a: 2.0mmメッシュ分離資料 b: 1.0mmメッシュ分離資料 c: 0.5mmメッシュ分離資料

** V:非常に多い C:多い R:稀れ

c. 3号土壤

本号跡のサンプルは5袋15.5kgであるが、今回はその約25%に相当する1袋4kgを調査した。土器の出土状況等にもとづくと、本号跡覆土の堆積時期は古墳時代中期と推定される。

調査したサンプルからは、表20左欄に示す腹足綱4種、二枚貝綱6種、有肺亜綱、炭化物が同定された。このうち重量では貝類の割合が最も大きく、重量約1.6kgに達したが、このうちの約77%にあたる約1.2kgをハマグリ1種が占め他を圧倒している。最少個体数でもハマグリが最も頻度数が大きいが、重量比では下位にあるウミニナが個体数ではシオフキよりも上位になり、ハマグリについて高い頻度となる。炭化物は、いずれも小破片である。

d. 4号土壤

本号跡のサンプルは量的に最も多く、33袋102.3kgであるが、今回はその約12%に相当する4袋12.3kgを調査した。その結果は、表20中央欄に示すとおりで、腹足綱2種、二枚貝綱6種、有肺亜綱、炭化物が同定された。採集した貝類の総量は約5.4kgに達し、3号土壤のサンプルよりも単位重量あたりの貝重量は大きいが、3号土壤のサンプルで比較的出現頻度が高かったウミニナは同定できなかった。貝種別重量ではハマグリが1種で全体の約93.5%に当る約5kgを占め他を圧倒する。ハマグリについて、シオフキ(約3.2%)、アカニシ(約1.6%)がつづくが重量差は大きい。

なお、本号跡覆土の堆積時期は出土土器にもとづいて古墳時代中期と推定される。

e. 6号土壤

本号跡からは4袋17kgのサンプルが採取されたが、今回はその約18%に相当する1袋3kgを調査した。本号跡は出土土器がなく、覆土の堆積時期は不明である。サンプルからは、表20右欄に示す腹足綱2種、二枚貝綱6種が同定されたが、有肺亜綱と炭化物は確認できなかった。貝重量は約0.6kgに達したが、その約73.5%はハマグリが占めた。シオフキ、オオノガイがハマグリにつぐが、重量差は大きい。

表20 動植物遺存体同定結果 (3号、4号、6号土壤)

種名	3号土壤(サンプル重量: 4kg)			4号土壤(サンプル重量: 12.3kg)			6号土壤(サンプル重量: 3kg)		
	W	(%)	N(左-右)	W	(%)	N(左-右)	W	(%)	N(左-右)
ウミニナ	48.5	(3.08)	38	•	•	•	•	•	•
ツメタガイ	23.9	(1.52)	2	16.7 (0.31)	1	10.3 (1.67)	1		
アカニシ	83.8	(5.31)	3	84.5 (1.58)	1	3.0 (0.49)	1		
アラムシロガイ	0.1	(0.01)	1	•	•	•	•	•	•
サルボウ	8.6	(0.55)	1 (+ -)	3.4 (0.06)	1 (+ -)	•	•	•)
アサリ	2.6	(0.16)	1 (1 -)	1.9 (0.04)	1 (+ -)	16.0 (2.60)	2 (1 - 2)		
カガミガイ	22.0	(1.40)	1 (1 -)	60.8 (1.14)	1 (1 -)	6.2 (1.01)	1 (+ -)		
ハマグリ	1210.7	(76.77)	126 (126-122)	4983.9 (93.45)	231 (231-198)	452.8 (73.63)	34 (27-34)		
シオフキガイ	175.1	(11.10)	18 (18-14)	169.7 (3.18)	21 (21-11)	87.3 (14.20)	10 (10-9)		
マテガイ	1.7	(0.11)	2 (2 - 1)	12.3 (0.23)	7 (7 - 3)	5.8 (0.94)	1 (+ -)		
オオノガイ	•	•	•	•	•	33.6 (5.46)	5 (5 - 5)		
計	1577.0	(100.01)	193	5333.2 (99.99)	264	615.0 (100)	55		
未同定貝殻	28.5	•	•	38.8	•	•	21.4	•	•
有肺亜綱	0.0	•	•	0.0	•	•	•	•	•
炭化物	0.4	•	•	1.1	•	•	•	•	•

併し、Wは重量(gr)、Nは最小個体数を示し、二枚貝綱については括弧内に左右殻別の採集頻度を示した。

3. 同定記載および計測結果

軟体動物 MOLLUSCA

腹足綱 Gastropoda

前鰓亜綱 Prosobranchia

原始腹足目 Archaeogastropoda

ニシキウズガイ科 Trochidae

(1)イボキサゴ *Umbonium (Suchium) moniliferum*

調査資料数：2075

1号、2号住居跡サンプルから出土した。これらはいずれも縄文時代中期後葉の住居跡であるが、3号、4号、6号の各土壌からは出土していない。

破損資料が多く、計測可能なものは殻径6.4～15.5mmの範囲のものが出現した。滑層径は相対的に大きく、近縁のキサゴ *U. (S.) costatum* とは明らかに区別される。

(2)スガイ *Lunella coronata coreensis*

調査資料数：11

いずれも1号住居跡サンプルから出土したもので、今回調査した他の遺構のサンプルからは確認されていない。破損資料が多く計測可能な資料は2点だけで、殻高と殻径はそれぞれ10.9と12.2、7.3と11.0mmである。また、蓋が1号住居跡から1点出土しているが、摩耗や変質などの形跡はみとめられない。臍孔は閉じており、近縁のカンギクガイ *L. granulata* とは明瞭に区別できる。

中腹足目 Mesogastropoda

カワニナ科 Pleuroceridae

(3)カワニナ *Semisulcospira libertina*

調査資料数：1

1号住居跡サンプルから出土した資料である。殻表には細かな螺肋が走行するが、イボ状の隆起などはみとめられない。資料は破損しており、計測は困難である。

ウミニナ科 Potamididae

(4)カワアイ *Cerithideopsis djadjiensis*

調査資料数：1

殻高20.2、殻径7.7mmの資料が1号住居跡サンプルから出土した。体層はほぼ完全で、近縁のヘナタリ *C. cingulata* とは明らかに区別できる。

(5)ウミニナ *Batillaria multiformis*

調査資料数：113

1号、2号住居跡と3号土壌サンプルから出土した。1号住居跡の資料のうち計測可能なも

のは、殻高12.2~31.5mmの範囲のものが出現し、24~27mm前後のものが最も出現頻度が高い。しかし、2号住居跡の資料はいずれも計測が困難である。3号土壌の出土資料は殻高23.2~39.4mmの範囲のものが出現し、32~35mm前後のものの頻度が最も高く、住居出土の資料に比して大形のものが多い。後出するイボウミニナとは殻表の状態や保存の良好な資料では殻口の形態によって区別した。特に加工等の痕跡は観察されない。

(6)イボウミニナ *Batillaria zonalis*

調査資料数：7

1号住居跡サンプルから出土した。計測可能な資料では殻高8.6~10.8mmの範囲で出現した。

タマガイ科 Naticidae

(7)ツメタガイ *Neverita (Glassaulax) didyma*

調査資料数：5

1号住居跡、3号、4号、6号土壌サンプルから出土した。出土資料は破損をうけ計測に向かないものが大部分であるが、割れ口はかならずしも古くなく、破損原因は明らかでない。なお、唯一計測可能な4号土壌出土の資料は殻高30.4、殻径約39mmである。殻口は破損しているが、臍孔はふさがっており、*Neverita* 属に属す他種とは区別される。

新腹足目 Neogastropoda

アキガイ科 Muricidae

(8)アカニシ *Rapana venosa*

調査資料数：7

1号住居跡、3号、4号、6号土壌サンプルから出土したが、ツメタガイと同様に破損をうけており、計測可能な資料は1号住居跡出土の殻高約18、殻径約11mmの稚貝1点にとどまった。

(9)イボニシ cf. *Reishia clavigera*

調査資料数：1

2号住居跡サンプルだけから出土した。破損が著しく計測は不可能である。したがって、種の同定にも正確さを欠く部分が多く、レイシガイ *R. bronni* との混同はないとしても、殻表が類似するクリフレイシ *R. luteostoma* やレイシガイダマシモドキ *Muricodrupa fusca* などとの混同はありうるかもしれない。

オリイレヨフバイ科 Nassariidae

(10)アラムシロ *Reticunassa festiva*

調査資料数：55

1号、2号住居跡、3号土壌から出土したが、1号住居跡出土のものが53点を占めている。保存状態は比較的良好で殻高9.8~17.8mmの範囲のものが出現したが、殻高16mm前後のものが大部分を占めた。

エゾバイ科 Buccinidae

(1)バイ *Babylonia japonica*

調査資料数：1

破損資料で1号住居跡のサンプルから出土した。次体層以上を欠くが、繩帶の形状や殻表の状態などから本種に同定した。ウスイロバイ *B. kirana* の可能性は考慮しなくともよいであろう。

有肺亞綱 Pulmonata

(2)種不明 Order indet.

殻高の低いゼンマイ型の資料と殻高の高いオカチョウジ型の資料であるが、時間的な制約から今回は科以下の種同定を試みなかった。

二枚貝綱 Pelecypoda

翼形目 Pteriomorphia

フネガイ科 Arcidae

(3)サルボウ *Scapharca subcrenata*

調査資料数：1

3号土壤サンプルからの出土資料であるが、殻の半分以上を欠損する。復原される肋数は30本程度と考えられるが、肋間は狭いことなどから肋数がほぼ同数であるクイチガイサルボウ *S. inaequivalvis* とは区別した。割れ口は古いが、加工等の痕跡はみられない。

イタボガキ科 Ostreidae

(4)マガキ *Crassostrea gigas*

調査資料数：181

1号、2号住居跡サンプルから出土した。殻形は比較的小形である。付着地物の性状が明らかなものはなかった。

異歯目 Heterodontia

マルスダレガイ科 Veneridae

(5)オキアサリ *Gomphina (Macridiscus) veneriformis veneriformis*

調査資料数：2443

1号、2号住居跡サンプルから出土した。前後端はややとがること、腹縁の状態などから近縁のコタマガイ *G. (M.) veneriformis melanaegis* とは区別して本種に同定した。殻質が固いためか保存状態は比較的良く、計測可能な資料(左殻のみ)は741点に達した。殻長約8.5～53mmの範囲のものが出現したが、25～35mm前後のものの出現頻度が最も高い。

(6)アサリ *Ruditapes philippinarum*

調査資料数：2686

調査対象となつた5遺構のすべてから出土したが、土壤内サンプルからの出現頻度は低い。殻質の薄い資料は破損の度合が大きい傾向にあるが、1号住居跡サンプルの出土資料のうち計測可能な左殻資料244点の計測結果によると、殻長約10~47mmの範囲のものが出現しており、20~27mm前後のものの出現頻度が最も高い。

(17)オキシジミ *Cyclina sinensis*

調査資料数：1

1号住居跡サンプルから出土した。小形で殻長は6.8mmである。

(18)カガミガイ *Dosinorbis (Phacosoma) japonicus*

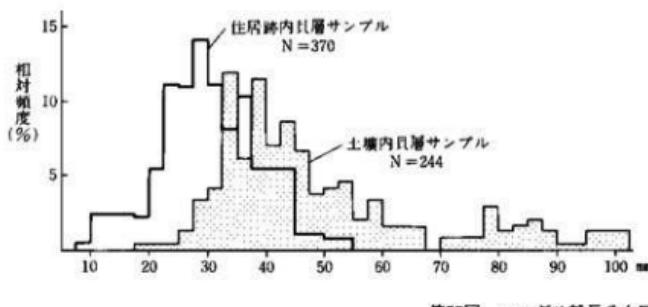
調査資料数：12

5遺構すべてから出土したが、4号土壤サンプル出土資料(殻長83.3mm)以外はいずれも計測が困難である。

(19)ハマグリ *Meretrix lusoria*

調査資料数：1965

本種は今回調査したすべての遺構のサンプルから出土した優占種である。住居跡出土の資料と土壤出土の資料との大きさには若干相違がある(第57図)。各遺構の調査サンプルにおける左殻資料の平均殻長は1号住居跡が約30.5mm、3号土壤が約40.6mm、4号土壤が55.5mm、6号土壤が約44mmである。上記のように各土壤サンプル資料の平均値が住居跡サンプル資料の平均値を上回ったが、これは住居跡サンプルには出現しない大型個体が各土壤サンプルに出現したこと、殻長30mm未満の小型個体の出現頻度が土壤サンプルでは著しく低いことに起因する。



第57図 ハマグリ殻長分布図

(20)シラオイガイ *Circe scripta*

調査資料数：1

1号住居跡サンプルから出土した。殻形および鉗齒の形態はハマグリ型を呈するが、殻質がやや厚いこと、殻表には強い輪脈があることなどから本種に同定した。殻長は6.8mmである。

(1)オニアサリ *Notochione jedoensis*

調査資料数：2

1号住居跡サンプルから出土した。歯齒の形態はハマグリ型とアサリ型の中間型を呈するが、殻質は堅固で殻表には顯著な放射肋があることから本種に同定した。殻長は8mm前後である。

バカガイ科 Mactridae

(2)バカガイ *Mactra chinensis*

調査資料数：2

1号、2号住居跡サンプルから出土した。いずれも破損資料である。

(3)シオフキ *Mactra veneriformis*

調査資料数：701

各遺構のサンプルから比較的高い頻度で出土した。1号住居跡サンプルからの出土量が最も多く、計測可能な左殻資料176点によると殻長約20～50mmの範囲のものが出現したが、平均値は約34.6mmである。各土壤のサンプルから出土した資料は量的には少ないが、殻長の平均値は上記よりも5～10mm大きく、ハマグリと同じような傾向を示した。

マテガイ科 Solenidae

(4)マテガイ *Solen structus*

調査資料数：53

調査した各遺構のサンプルから出土したが、数量的には2号住居跡サンプルからの出現頻度が最も高い。すべて破損しているが、殻質の性状に起因するものと考えられる。背縁、腹縁とも直線を呈し、全体に細長いことなどから近縁のアカマテガイ *S. gordoni* と区別して本種に同定した。

無面目 Adesmacea

オオノガイ科 Myidae

(5)オオノガイ *Mya (Arenomya) arenaria oonogai*

調査資料数：10

6号土壤サンプルから出土した。いずれも破損しており、計測は困難である。

腔腸動物 COELENTERATA

花虫綱 Anthozoa

イシサンゴ目 Scleractinia

キクメイシ科 Faviidae

(1)キクメイシモドキ cf. *Oulastrea crispata*

保存状態は悪く、手で触れると石灰分が付着する。そのため全面が磨滅しており、表面の状態を観察しにくい。莢径は約2～3mmと小さく莢孔は浅いが、莢間の溝の有無は観察できない。

表面は凹凸が著しいが、裏面は平坦に近い。以上のような特徴によると本種に同定するのが最も妥当と思われる。資料は表採品であるので時期は不明であるが、東京湾北岸一帯の縄文貝塚からはしばしばキクメイシ科のサンゴが出土している事実からすると、当遺跡に住んだ縄文人が持ち込んだ可能性が高い。

なお、資料は左右対称に張り出した鈎をもつ尖頭器もしくはその模造品のような形態をとるが(図版26-13)、軸部に相当する部分はいくぶん歪曲しており、また、表面の凹凸も著しいので、ここでは後世の擾乱等の影響によってたまたまこのような形態に変形したものと考えておく。資料の全長は3.7cm、最大厚は約1.2cmである。

キクメイシモドキは、館山湾以南から南太平洋までの内湾の水深1~5mに普通に分布している(内海 1975)。

脊椎動物 VERTEBRATA

硬骨魚綱 Osteichthyes

真骨類 Teleostei

ニシン目 Clupeiformes

ニシン科 Clupeidae

(1)マイワシ *Sardinops melanostictus*

同定資料: 第1脊椎椎体10点、第2脊椎椎体9点(図版27-1,2)

第1脊椎ではすべての資料が椎体の左右側面から後方に突出する突起部を欠損するが、このことをのぞくと第1脊椎、第2脊椎とも資料の保存状態は良好で、細部までの観察が可能である。

なお、以下の記す脊椎動物遺存体はいずれも2号住居跡炉址内から出土したもので、白色~灰白色ないし灰青色を呈し、熱の影響を強く受けたものと考えられる。資料の椎体横径の計測結果は表21のとおりである。この計測値は、大部分が標準体長10~16cmの現生標本と一致するが、体長10cmの標本よりも小型のものが若干含まれている。

表21 2号住居跡炉址灰層内出土の
マイワシ第1、第2脊椎骨計測値

椎体横径(mm)	第1脊椎	第2脊椎
1.5 ~ 1.8		2
1.8 ~ 2.1		
2.1 ~ 2.4	2	4
2.4 ~ 2.7	3	
2.7 ~ 3.0	1	
計	6	6

但し、計測部を破損した資料は除外した

(2)ニシン科種不明 Clupeidae gen. & sp. indet. (cf. *Sardinops melanostictus*)

同定資料：第3脊椎以降の椎体575

ニシン科魚類の腹椎、尾椎に酷似する資料である。尾椎は神經棘、血管棘、顆突起などを欠損するものが大部分であるが、保存状態のよい後半部尾椎資料は顆突起が長く前方にのびる。すでに何度か述べたように、ニシン科魚類では第3脊椎以降の椎体には各種間の形態差が比較的小さいため、貝塚産資料のように突起部の欠損をうけやすい資料では、種レベルの同定が困難になる場合が多い。しかし、今回の資料は上記のような特徴以外に、マイワシ以外のニシン科魚類の第1、第2脊椎が同定されなかつた事実を考慮に入れると、このグループに分類したすべての資料がマイワシに由来する可能性が強い。

真骨類種不明 Teleostei order indet.

以下に分類した各資料は、4ないし5種の魚類に由来すると考えられる。現状では目以下の種同定は困難であるが、ニシン目、ウナギ目、サケ目など原始的なグループに同定される可能性はないと考えられる。

(3)真骨類A Teleostei order indet. (A)

同定資料：椎体a（図版27-5）

椎体後半部（もしくは前半部）を欠損する。前面に粒子の細かい灰が固着し、椎体凹面はそれによって埋められる。資料破損の危険性が高いので今回はあえてクリーニングを行なわなかった。そのため、椎体外表面の構造は不明確であるが、脊索孔が発達しないこと、前面觀はほぼ円形になること、腹面に強い骨性隆線が1本縦走すること、背面部および側面部に骨性突起がみられることなどが明らかである。なお、椎体横径は2.6mm、現存部における椎体全長は3.0mmで、資料は腹椎と思われる。

(4)真骨類B Teleostei order indet. (B)

同定資料：椎体b（図版27-6）

椎体周縁部の破片資料である。内面は成長輪を刻む。外表面には細かい網目構造がみられるが、中央部を縦走する新しい破損面によって連続的な観察は困難である。ただし、これが外部からの衝撃によって平坦な外表面が損傷したものか、側突起などの突起部が損傷することによって生じたものかは明らかでない。なお、保存されている椎体周縁部の任意の3点から推定復原される椎体径は8～9mmである。

(5)真骨類B' Teleostei order indet. (B')

同定資料：椎体b'（図版27-7）

椎体周縁部の破片資料である。外表面には細かい網目構造が連続してみられる。内面は破損し失われる。上記の椎体bとはきわめてよく似た形態と大きさをしており、同一魚種あるいは同一個体に由来する可能性がある。

(6) 真骨類C Teleostei order indet. (C)

同定資料：椎体c（図版27-8）

上記の椎体a～b'までの各資料が炉址灰層のサンプル内から得られたのに対し、本資料はそれよりも下位にある炭化層のサンプル内から得た。外表面は釉質性の光沢を持ち、色調は暗青灰色を呈するなど、資料は強い熱をうけやすい環境下にあったものと推定される。表面に黒褐色の付着物が散在する。全体の約1/2を欠損するが、破損面は鋭利である。椎体外面は平坦である。右側突起と思われる突起が椎体前端から側方へ張り出す。腹面には強い骨性隆線はない。脊索孔は発達しない。腹椎と思われるが、既述の椎体資料とは明らかに異なる外部形態を持つており、これらとは別種の魚に由来するものと考えられる。なお、現存部における椎体長は2.7mmである。

(7) 真骨類D Teleostei order indet. (D)

同定資料：遊離円錐歯、遊離臼歯（図版27-9）

資料はタイ科魚類の門歯、臼歯に酷似するが、検査したサンプル内からはタイ科に同定できる骨は確認できなかった。わが国沿岸にはタイ科以外にもこのようなタイ型円錐歯や臼歯をもつ魚種が数多く生息することが知られている（赤崎 1962），ここでは目以下の同定を行わず、すべてを真骨類Dとして一括した。なお、資料はいずれも歯冠部に相当する部分が淡い橙褐色に変色し脆くなっている。これが熱の影響によるものかどうか明らかでないが、一般の貝塚出土の資料とは性質や色調が異なる。

4. 考察

a. 遺構間における貝類組成の比較

表22と第58図は、今回調査したサンプルから同定した貝類資料の重量を貝種別と遺構別に示したものである。これによると、1号住居跡の貝類組成が最も複雑で、他の4つの遺構の組成とちがってみえるが、住居跡と土壌出土の貝類組成の相違は以下のような点でより顕著であり、本項ではその組成差の成因を検討することにする。2軒の住居跡と3基の土壙から出土した貝類の最も大きな組成上のちがいは以下の3点である。すなわち、住居跡のサンプルに最も多量に出現したオキアサリと腹足類の中で最も多量に出現したイボキサゴの2種が、土壙のサンプルにはまったく出現していないこと、ハマグリの出現頻度が両者で大きく異なること、そして、貝の大きさが異なることである。両者に共通して、出現した貝は、どれも土壙出土のものが住居跡出土のものよりも大きい傾向にあって、第57図はそのうち資料数の豊富なハマグリのデータを示したものである。

住居跡に捨てられた貝と土壙に捨てられた貝にこのようなちがいがあるとすれば、その原因としては2つの可能性が考えられる。その第1は、竪穴住居と土壙が一定期間の使用を経て廃棄されたあと、その跡地に捨てることが許される物質の種類が異なっていた可能性である。こ

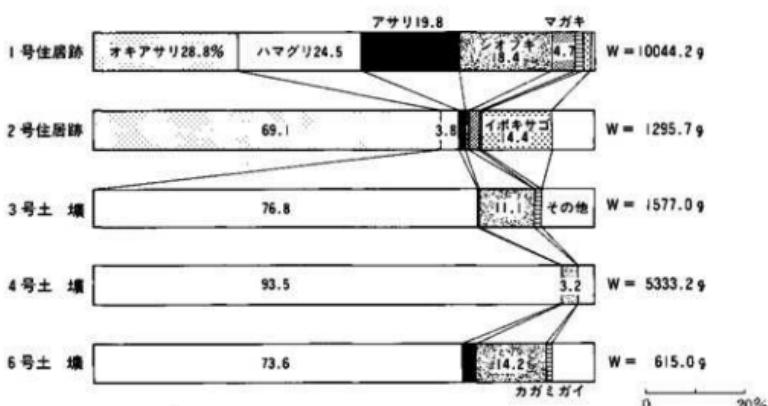
の可能性の成否は、形成時期が同じ住居跡内貝層と土坑内貝層が検出された遺跡を調べて、その組成を比較検討すればよい。しかし、両者の組成が比較可能な報告例はきわめて少なく、松戸市一の谷西貝塚（前田・川名編 1984）と市原市草刈貝塚（千葉県文化財センター 1986）における2例の縄文時代中期のデータをみたかぎりでは、両者の貝類組成に顕著な相違はみとめ

表22 遺構別の貝重量組成比較

(単位: gr)

種名	遺構名				
	1号住居跡 ⁽¹⁾	2号住居跡 ⁽²⁾	3号土塚 ⁽³⁾	4号土塚 ⁽⁴⁾	6号土塚 ⁽⁵⁾
イボキサゴ	148.1 (1.5%)	186.9 (14.4%)	-	-	-
スガイ	5.6 (0.1)	*	-	-	-
カワニナ	1.1 (0.0)	*	-	-	-
カワツアイ	0.2 (0.0)	*	-	-	-
ウミニナ	33.8 (0.4)	0.2 (0.0)	48.5 (3.1%)	-	-
イボウミニナ	0.6 (0.0)	*	-	-	-
ツメタガイ	5.2 (0.1)	*	23.9 (1.5)	16.7 (0.3%)	10.3 (1.7%)
ブカハシ	1.3 (0.0)	*	83.8 (5.3)	84.5 (1.6)	3.0 (0.5)
イボニシ	*	0.3 (0.0)	-	-	-
アラムシロ	19.1 (0.2)	0.3 (0.0)	0.1 (0.0)	*	-
ハイ	1.0 (0.0)	*	-	-	-
サルホウ	*	*	8.6 (0.5)	3.4 (0.1)	-
マガキ	473.2 (4.7)	23.0 (1.8)	*	*	-
オキアサリ	2888.5 (28.8)	895.4 (6.9)	*	*	-
アサリ	1991.0 (19.8)	18.4 (1.4)	2.6 (0.2)	1.9 (0.0)	16.0 (2.6)
オキシジミ	0.0 (0.0)	*	-	-	-
カガミガイ	154.4 (1.5)	5.1 (0.4)	22.0 (1.4)	60.8 (1.1)	6.2 (1.0)
ハマグリ	2464.4 (24.5)	49.3 (3.8)	1210.7 (76.8)	4983.9 (93.5)	452.8 (7.3)
シラオイガイ	0.0 (0.0)	*	*	*	-
オニアサリ	0.0 (0.0)	*	*	*	-
バカガイ	11.2 (0.1)	6.5 (0.5)	*	*	-
シオフキ	1845.4 (18.4)	7.9 (0.6)	175.1 (11.1)	169.7 (3.2)	87.3 (14.2)
マテガイ	0.1 (0.0)	101.1 (7.8)	1.7 (0.1)	12.3 (0.2)	5.8 (0.9)
オオノガイ	*	*	-	-	33.6 (5.5)
小計	10,044.2 (100.1)	1,294.4 (99.9)	1,577.0 (100)	5,333.2 (100)	615.0 (100)
未同定貝類	233.7	30.0	28.5	38.8	21.4
有肺動物	-	0.0	0.0	-	-

検査サンプル重量 (1)5kg < (2)12.8kg (3)4kg (4)12.3kg (5)3kg



第58図 貝類組成の遺構間比較

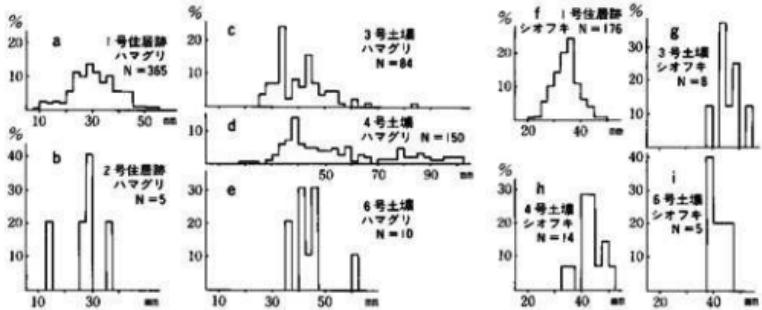
られない。上記の2遺跡のデータが、一般的な傾向を代表しているとは思えないが、現状では第1の可能性はこれ以上検討しなくてもよいと考えられる。

つぎに第2の可能性であるが、今回調査した各遺構は6号土壙を除くと覆土の堆積時期が推定可能で、2軒の住居跡が縄文時代中期後葉、2基の土壙が古墳時代中期であった。以上のように住居跡と土壙では貝層の堆積時期の年代差は大きい。もし、その間に東京湾北岸に生息する貝類群集に何らかの交替要因が発生すれば、同一漁場でも採貝可能な漁獲物にも変化が生じるわけである。しかし、それよりも縄文時代と古墳時代における社会や経済のしくみや漁獲技術、漁具などのちがいが漁獲物組成に与える影響はさらに大きいと考えられる。1つの集落に食用その他の目的でもちこまれる貝の組成や量が、当時の社会の需給バランスや流通等の経済機構のうえにある程度なり立っているとすれば、そのような時代差が組成上に反映される可能性は高い。

たとえば小池（1983）は、弥生時代や古墳時代のハマグリが縄文貝塚産のものよりも大型貝の占める割合が高いのは、それぞれの時代における捕獲圧の差に起因する可能性があると考えている。そして、近世のように貝利用の専業化が進むと、焼きハマグリ用と思われる大型貝で構成される貝層やおすまし用風な小型貝で構成される貝層など、貝の集積ごとに特異な殻高分布があらわされるという。東京都郵政省飯倉分館構内遺跡出土の貝類を解析した桜井（1986）は、江戸時代の大名屋敷におけるハマグリの殻長分布がハマグリ以外の貝にはみられない双峰分布となり、大型ハマグリの中には表面に被熱した形跡のあるものが存在することを明らかにした。そして、このような事実にもとづくと、この遺跡のハマグリは焼き物と吸い物用に使用された可能性があるという。

ところで、当遺跡の土壙サンプルから出土したハマグリの殻長分布も双峰型となり、殻長30～40mmと80～90mm付近で頻度数が高い（第57図）。ただし、この図は3基の土壙から出土した資料の計測結果を総合したものなので、各遺構ごとに異なる分布型が重複して双峰分布になった可能性がある。第59図a～eは、このことを確かめるために遺構ごとの頻度分布に組みかえたものである。これによると、資料数が減った分だけ第57図のような連続性は失われているが、各土壙サンプルの分布は互いに類似しており、縄文住居サンプルとは違う分布型になっている。そうだとすると、各土壙ともハマグリは大型と小型の2種類が存在し、調査資料数をふやせばその殻長分布は第57図のようなきれいな双峰型を描くものと推定される。なお、今回調査した資料をみると、大型貝に被熱痕は認められなかった。しかし、ハマグリについて各サンプルに高い頻度で出現したシオフキの殻長分布は各遺構とも単峰型を呈しており（第59図f～i）、双峰型がハマグリ1種に限定になるらしいことも飯倉分館構内遺跡とよく一致する。

当遺跡の住居跡と土壙の貝層のちがいは、種組成にもみられることは既に述べたが、傾向性としては土壙内貝層を構成する貝種組成は住居跡内貝層よりも単純である。そして、住居跡内



第59図 遺構別ハマグリ、シオフキ殻長分布

貝層に比較的高い頻度で出現するが土壌内貝層にはまったく出現しないか、頻度が下がるもののが現代の東京周辺の店頭や江戸時代初期の食用貝リスト（人見 1969）に上らない貝と一致している。

このように、縄文時代よりも新しい時代につくられた貝層の組成内容が縄文の貝層よりも単純化し、貝の大きさも大型化する事実は、千葉市幕張にある上ノ台遺跡（古墳時代後期）や東京都江戸遺跡（江戸時代）でもみとめられており（小宮 1982、小池 1985）、古墳時代以降に縄文時代とは異なる漁獲システムがつくられた可能性がある。

そのような意味からすれば、当遺跡の土壌に堆積する貝の組成内容は縄文住居に比べてより近世・現代的な性格をもつと考えられる。そうだとすると、時期の明らかな6号土壌の堆積時期は少なくとも縄文時代ではなく、古墳時代以降である可能性が強い。しかし、このような“近世・現代化”が古墳時代から東京湾沿岸に普遍的であったかどうかは検討されねばならない。たとえば、この時代のハマグリの大型貝と小型貝の用途を小池（1983）の解釈どおりに考えることは危険であるし、また、東京湾北東岸にある千葉市ムコアラク遺跡DW11号跡（平安時代）や大道遺跡58号住居跡（8世紀後半）の貝層は、木戸作貝塚や草刈貝塚など同じ地域にある縄文貝塚の貝種組成と比べて基本的なちがいはない（小宮 1979a, 1979b, 1983）。さらに、この地域に住んでいた縄文人の貝に対する選択性に“近世・現代的”な色合いをまったく感じとれないかといえば、かならずしもそうとは言い切れない面がある。この点については別の機会に触ることにする。

b. 2号住居炉址内出土の焼骨について

焼けた骨は炉址内堆積物のうち一括サンプルを採取した灰層と炭化層から出現した。いまのところ魚に由来するものだけが同定可能であるが（第19表）、細片に碎けた資料が多く（図版27），その大部分は種同定が困難な状態にある。焼けた骨を検出した2つの層は、炉底近くに堆積しており、その上位を焼土粒混じりの暗褐色土と住居跡の覆土がおおう（第60図）。これらの

層には大きな搅乱の痕跡がみられないで、出土した骨は、遺跡をつくった縄文人が炉の中に残した脊椎動物に由来すると考えられる。ところで、上述のように焼けた骨は灰層と炭化層の双方のサンプルから出現しているが、その頻度差が大きいこと、炭化層は灰層の下位にあって、両者の直接接觸面が比較的広範囲におよぶことなどから、炭化層に出現した少數の資料は灰層からの混入と考えるのが妥当と思われる。この考えが正しいとすると、このことは灰層中における骨の分布状態を推定する際の逆ヒントとなる。すなわち、一つの層を一括採取したサンプルでは、含まれていた骨がその層内にどのように分布していたかを判断することができないが、炭化層に灰層中の骨が流入するような条件があるとすれば、少なくとも灰層中の骨が上層に集中していた可能性は薄く、灰層全体に均質分布していたか、その下部に集中していた可能性が高いことになる。

現代人の生活概念では炉灰は丁重に扱われるのが普通で、その中に日常的に物を投じたり、なま物を放置したりすることはない。したがって、今回得たデータは、当時の人々の炉の使用法やそれに伴う生活様式の一端を知るうえで貴重と思われる。しかし、本報告書中では貢数の制約等から十分な考察を行えないで、以下ではサンプル中に出現した魚の最小個体数を算定することと、骨の部位別の出現頻度にもとづいて骨がどのような状態で存在していたかの2点を中心に検討することにする。

出土魚類の最小個体数の算定 炉址内堆積物のサンプルから水洗分離された魚類資料は7種類に分類されたが（表19）、ニシン科 *Clupeidae gen. & sp. indet.* に分類した資料はマイワシ *Sandinops melanostictus* と、また真骨類 B' *Teleostei order indet. (B')* とした資料は真骨類 B *Teleostei order indet. (B)* とそれぞれ同種の魚に由来すると考えられるので、サンプル中に出現した魚種は5種となる。

遺跡から産出した魚の最小個体数の算定方法にはさまざまな方法があるが、今回のように堆積物試料の採取がコラム方式によらず一括方法で行われた場合は、全身骨格中の特定部位の出現頻度を基準にして算定する方法が適している。この方法によると個体数が最も多く算出されるのは、第1脊椎が10点出現したマイワシである。表21に示した第1、第2脊椎資料の計測結果をみると、第1脊椎は椎体幅2~3mmのものが連続して出現したものに対し、第2脊椎は椎体幅2mm以上のものと1.8mm未満のものとに分かれて出現している。マイワシの場合、同一個体では第1、第2脊椎の椎体幅はほぼ等しいが、0.2mm程度の較差は計測誤差の範囲内と考えた方が無難があるので、マイワシの最小個体数は10とするのが妥当と思われる。

一方、マイワシ以外の真骨類A~Dはいずれも種の異なる別個体に由来すると考えられるが、最小個体数は、各魚種とも1より大きい値に算定できない。したがって、サンプル中に出現した魚5種の最小個体数の合計は14で、そのうち10をマイワシ1種で占めることになる。

ところで、第60図に示すように今回調査した一括サンプルは、炉内に残されていた灰全体の

約半弱程度しかカバーできていないと考えられるので、魚の骨が灰層中に一様に分布しているとすれば、灰層全体では30尾前後相当の魚骨が存在していたと推定される。

炉址内における焼骨の状態 既述のように筆者が同定可能な動物は5種の魚類にとどまったが、出土した焼骨の性状をまとめると以下の①～②のようになる。

①検出した骨の大部分は細片に砕けている。

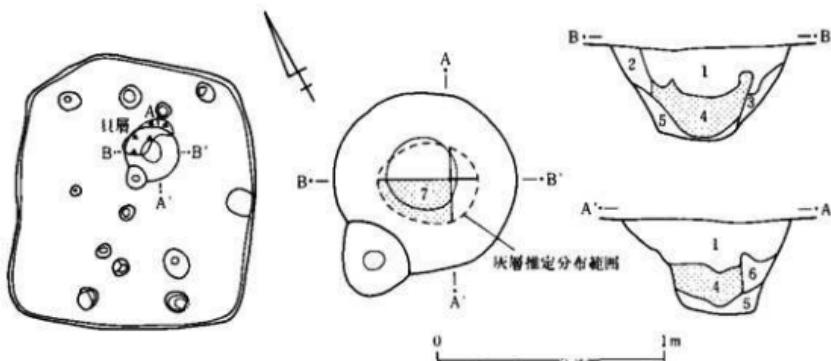
②同定した5種の魚の中ではマイワシの脊椎骨の出現頻度が圧倒的に高いが、脊椎以外の骨は確認できない。

以下では上記の①、②についての説明を加える。

骨の集計結果を示す表19は、破損資料の占める大きさをうまく表現できていない。そこで、今回得た骨の重量を、表19の各項目ごとに計量し、破損していないマイワシの脊椎が占める割合を示すと下記のようになる。この結果から明らかなように、重量別に表現すると資料全体の約48.6%が砕けて破損している。

骨の総重量…1.75 g、マイワシ脊椎重量（非破損）…0.9 g(51.4%)、同（破損）…0.1 g(5.7%)

これまでに筆者が調査する機会のあった縄文貝塚のコラムサンプルにも水洗作業中に生じたとは考えにくい破損資料が見つけられるが、これの方はこれほど顕著でない。ただし、ここで注意を要するのは、小型動物の骨は強い熱をうけると、その部位によっては破損したり、燃焼して分離しやすくなることである。今回得た資料にも、そのような原因で破損したものが含まれているとしても、その全部が熱だけによって壊されたとは考えにくく、おそらく焼けた骨を人為的に打ち碎く行為がその後に加わったものと推定される、しかし、この解釈の難点は同定したマイワシの脊椎の大部分が破損をまぬがれることであるが（表19）、いまのところこの矛盾を解決しうる説明が思ひつかない。



第60図 2号住居跡および炉址内土層断面

1.暗褐色土層 2.暗褐色土層 3.炭化層 4.灰層 5.燒土層 6.褐色土層 7.灰層サンプルと炭化層サンプルの採取範囲

つぎに②の問題である。魚の骨は小型で壊れやすいものが多いので、人や犬などに食べられることなく、その全身の骨が遺跡に残されていたとしても、その全部を回収し、同定することは困難である。そこで筆者の場合は、形態的な特徴が顕著なものを選択的に同定し、その結果を頭部、胸部、鱗部などの各パートごとに集計することで、魚の全身が存在したかを検討することにしている。表19に示した魚のうち、真骨類A～Dまでの各魚種は、骨の出現頻度が著しく低いので検討の対象にはなりにくいが、マイワシ程度の資料数が得られなければ脊椎以外の骨を同定できないのは不思議である。実をいうと筆者がこれまでに行った縄文貝塚のコラムサンプルの調査では、回収のめんどうなマイワシ類の骨は脊椎だけしか回収していないので、マイワシ類の脊椎とその他の骨がどの程度の割合で遺跡から同定できるかを把握していない。しかし、筆者以外の研究者によって縄文時代や江戸時代の遺跡からマイワシの歯骨（宮城県塩釜女子高校社会部 1970？）、前耳骨（金子 1977）、主鰓蓋骨（金子 1985、松井 1985）、楯鱗（金子・秋山 1978）などが対脊椎比では相対的に高い頻度で同定されるので、脊椎以外の骨が遺跡に残されている確率は高いと考えられる。

図版27-9は灰層サンプルを水洗した1.0mmメッシュの分離物の一部の顕微鏡写真である。真骨類の担鱗骨か鱗棘の関節部や遊離状態のニシン科魚類の血道弓門とタイ型をした臼齒状遊離歯などがかろうじて判別できるが、その他の大多数の骨片と0.5mmメッシュの分離物（図版27-10）は正確な同定が困難である。

したがって、このように調査したサンプルからマイワシの脊椎以外の骨が同定できないとすれば、それらの骨がもともと灰層中に存在していなかったか、脊椎以外の骨が徹底して碎かれただため同定が困難になったと考えられる。

まとめ 住居跡内の炉址内や配石遺構、あるいは土壤などから焼けた骨が出土する例はしばしば報告される。高山（1976, 1977）や新津（1985）に集成によれば、それについての考古学者の解釈はさまざまであるが、おおむね何らかの儀式に伴うものとする解釈と食料残滓とする解釈の2つに大別される。

2号住居炉址の灰層のすぐ下位にある炭化層からは、土器から剝離したと思われる微細な剝片（もしくは炭化した粘土粒）や炭化材の破片が多く出土している（図版27-12）。炉はこの住居が廃屋になる直前までさかんに使われていたものと思われる。しかし、灰層にはこのような剝片や炭化材はほとんど含まれていないので、炉を使わなくなったあと大量の灰と焼けた骨がおかれ、その後まもなくして2号住居は廃屋になった可能性が高い。そうだとすると、灰と焼けた骨はこの住居が使われている間に日常的に累積した堆積物ではなく、廃屋に関連した堆積物である可能性が高い。本遺跡の発掘を担当した大野（1985）は、炉址内に堆積する灰層の周縁が盛り上がっていることに注目して（第60図B-B'），2号住居の炉はおそらく土器片（土器）囲いの炉で、住居廃絶時に土器を抜き取ったものと考えられると記録している。もしこの

行為が廃屋の一要素を構成しているとすれば、炉から土器を抜き取っていない1号住居の炉に灰が残されていない点も肯首できるわけで、この遺跡をつくった集団にとって、2号住居との訣別は、1号住居との訣別とは異なった意味をもっていたのかもしれない。

引用文献

- 赤崎正人 1962 タイ型魚類の研究。形態・系統・分類および生態。京都大学みさき臨海研究所特別報告：11-368
- 人見必大 1967 「本朝食鑑」 島田勇雄訳注 1981 東洋文庫
- 金子浩昌 1977 動物遺体。藤崎堀貝塚発掘調査団編「習志野市藤崎堀貝塚」：17-23
- 金子浩昌 1985 一橋高校地点出土の脊椎動物遺体。都立一橋高校内遺跡調査団編「江戸——都立一橋高校地点発掘調査報告——」：875-614, pl.256-279
- 金子浩昌・秋山祐理子 1978 動坂遺跡出土の動物遺体。動坂貝塚調査会編「文京区動坂遺跡」：176-216
- 小池裕子 1983 貝類分析。加藤晋平編「縄文文化の研究 2」：221-237, 雄山閣
- 小池裕子 1985 一橋高校地点出土貝類とその採集季節について。都立一橋高校内遺跡調査団編「江戸——都立一橋高校地点発掘調査報告——」：615-619
- 小宮孟 1979 a 魚類および貝類遺体。千葉県文化財センター「千葉東南部ニュータウン 7——木戸作遺跡(第2次)——」：372-456
- 小宮孟 1979 b DW11出土の貝類遺体について。千葉県文化財センター「千葉東南部ニュータウン 8, ムコアラク遺跡」：322-328
- 小宮孟 1982 上ノ台遺跡産出の魚類および貝類。倉田芳郎編「千葉上ノ台遺跡(付編)」：27-36, 千葉市教育委員会
- 小宮孟 1983 住居址内貝層の調査——動物遺存体の同定結果——。千葉県文化財センター「千葉市大道遺跡・生実城跡発掘調査報告書」：261-263
- 小宮孟 1986 コラムサンブル出土の動物遺存体。千葉県文化財センター「千原台ニュータウン III 草刈遺跡(B区)」：549-598
- 前田潮・川名広文編 1984 「松戸市一の谷西貝塚発掘調査報告書」 158pp., 29pls.
- 新津健 1985 縄文時代後晩期における焼けた骨について。江上波夫・江坂輝彌・乙益重隆・増田精一編「日本史の黎明」：125-153, 六興出版
- 大野康男 1985 小中台遺跡SB 5号跡断面実測図。千葉県文化財センター
- 桜井準也 1986 自然遺物。港区麻布台一丁目遺跡調査団編「郵政省飯倉分館構内遺跡」：316-322
- 塩釜女子高校社会部 1970 ? 「宮城県七ヶ浜町二月田貝塚」 22pp.
- 高山純 1976 配石遺構に伴出する焼けた骨類の有する意義(上)。史学47(4)：301-334
- 高山純 1977 配石遺構に伴出する焼けた骨類の有する意義(下)。史学48(1)：49-74

VI. まとめ

今回の調査区は、北側に延びる舌状台地の基部の一部を横断するような形で設けられた長さ約200m、幅30mの細長い区域内にすぎなかつたが、先土器時代をはじめ縄文時代、弥生時代から近世に至る各時代の遺構及び遺物を検出することができた。道路建設に先行する路線内の調査であることから、調査区域外の同一台地平坦面に展開しているであろう各時代の集落構成等については不明な点を多く残している。

ここでは、今回の調査で得られた成果をもとに、遺構を中心として各時代毎の若干のまとめを試み、派生した問題点をいくつか揚げて先学諸兄の御教示、御叱正を賜わりたい。

先土器時代

小中台遺跡には2枚の文化層があり、ソフトローム層検出の3ブロックを第1文化層、第2黒色帯上部の2ブロックを第2文化層とした。第1文化層の3ブロックは、その個体別資料の分析から単一の時間相にくくられるが、第2文化層のブロックについては相互の関係に不明な部分を残している。

第1文化層は小型石槍を保有する文化層で、炉を中心とした居住の場と、野外の工作空間とから構成される〈景観〉が復原された。石器群の技術的基盤としては、(1)剥離面と打面との置換による反転石核と、(2)打面を回転する多面体石核から得られる剝片を素材として、石槍、削器、石錐などが制作、使用されている。

一方、第2文化層では、組織的な石刃の生産がおこなわれている。石刃には、(1)平坦打面をもち、頭部調整の著明な1群と、(2)顕著な打面調整を有するものとが共存している。下総台地VII層の石刃を見ると、(1)の類が一般的で、(2)は少數の遺跡で知られていたにすぎなかつたが、ここに(1)+(2)という明確な共存例を加え得たことは収穫であった。私たちは、(1)を礫山型の石刃技法と捉え、その分布が北部関東に濃密であることを主張しているが、(2)の系統はどう考え得るであろう。今のところ、東部関東における多様な石刃技法の構成要素であると理解しているが、その出自を訪ねるには、なお資料が不足している。

縄文時代

今回の調査で検出された遺構は、竪穴住居跡が1号住居跡と2号住居跡の2軒、土壙が1号土壙と2号土壙の2基である。土壙の中には、他にも形態や規模、覆土の状況等からみて、該期に属するものがあるかもしれないが、いずれも決定的な伴出遺物を欠いている。

検出された2軒の住居跡は、その廃絶後の埋没過程における後半段階に貝(殻)の廃棄がなされ、覆土最上層近くにブロック状の貝層の堆積をみる地点貝塚を形成するものであった。貝層

は住居プラン中央付近に堆積しており、このことは廃絶住居の自然埋没過程における凹地部分への貝(殻)の廃棄行為を容易に想定させる一方、奇しくも貝層の堆積位置が2軒とも炉址の上部にあたるという事実は、偶然性のみで捨棄することのできない問題一例えは貝(殻)廃棄場所の選地等一を指摘することができるかもしれない。

2軒の住居跡は、いずれも住居の中心的な附属施設ともいべき炉址に特長をもっている。

1号住居跡の炉址は、複数個体の土器片を利用した土器片囲炉で、利用されていた土器片は接合した結果6個体を数える大型の土器片に復元することができた。6個体の土器は、器形・利用部位等バラエティーに富んでいる。時期的には總て加曾利E式期に比定されるものではあるが、型式細分の中での微妙な時期差及び単一土器型式内における地域差を看取することができるものである。一方、本址の構築・使用に関しては、数次に亘る補修の痕跡等は全く認められなかつた。このことは、利用された土器片が一度の機会に埋められ、土器片囲炉として機能していたであろうことを実証するものである。本址構築の背景に土器の型式細分及び地域性を時空的に超えた企画性、選択性の存在を考えるのは早計であろうか。

2号住居跡の炉址は、住居床面の中央や北寄りに位置し、径80cm前後を測る比較的大型のもので、炉内覆土及び堆積物の堆積状況から、埋甕炉、或いは土器片囲炉であった可能性を指摘するとともに、住居廃絶時における炉体土器(片)の抜き取りを想定できるものであった。また、炉内堆積物として良好な状態で残されていた灰層内からは、豊富な自然遺物を抽出することができ、本住居跡の原因者である縄文人達の食生活及び炉の利用法等に貴重な資料を提供したと言えよう。

さらに2号住居跡は、東壁中央付近直下の床面に埋甕として残されていた土器から加曾利E式終末期に帰属時期が求められ、今回の調査で検出された縄文時代の遺構の中では最も後出的なものであるが、住居南西コーナー付近の覆土最下層からは、本遺跡の第1文化層(III層)に特有の珪化岩を素材とする石核を主体とした一括遺物が検出されている。この一括遺物は、本住居跡に直接、或いは間接的に関わりのあった人間(達)によって、住居廃棄後の埋没過程に住居跡内にもちこまれたものとして考えることができる。本来、他の第1文化層の遺物とともに検出されるべきものが、既に遺跡となっていた此地の一隅において、何かの機会に拾集され、遺物のもつ本来的な機能とは全くかけ離れた目的で使用されたものかもしれない。ともかく、その最終形態として時代のかけ離れた住居跡の覆土最下層で、他の遺物と「廃棄の同時性」を捉えられる形で検出されたものと理解できよう。

遺物の出土状況は、一般にその遺物に関わりをもった人間の諸行動様式の最終形態を反映しているものとして理解できよう。しかし、その最終形態に至る背景にあるべき人間の意図は、極めて稀な例を除いて残ることがなく、想定することすら困難なことが多い。また、個々の遺物には各々同一ないし複数に亘る「製作者」、「使用者」、「廃棄者」が存在したはずであり、換

第61図 加曾利E式土器の地文原体組成

遺物総数 1,748点(99.9%)		BL 601点(34.4%)	LR 317点(18.1%)	RL 918点(52.5%)	地文の観察できないもの 369点(21.0%)	不明 346点(8.4%)
		601点(34.4%)	317点(18.1%)	918点(52.5%)	369点(21.0%)	346点(8.4%)

*その他の45点

単純L 5点、R 1点、反燃L 3点、RR 1点、前々段多条R $\left\{ \begin{array}{l} L \\ L \end{array} \right| \begin{array}{l} R \\ R \end{array} \right\}$ 15点、L $\left[\begin{array}{l} R \\ R \end{array} \right]$ 1点、
 前々段複合R $\left\{ \begin{array}{l} L \\ L \end{array} \right| \begin{array}{l} R \\ R \end{array} \right\}$ 1点、結束繩文L $\left\{ \begin{array}{l} R \\ R \end{array} \right| \begin{array}{l} L \\ L \end{array} \right\}$ 1点、

RLとLR 1点、地文不明14点

言すれば、その出土状況は各段階での同時性を具現しているものとして捉えることができよう。

1号住居跡における土器片圓炉のあり方や、2号住居跡における石核を主体とした第1文化層の一括遺物のあり方は、これらのこととより近い形で復原し得る好資料と思われる。

今回の調査で出土した繩文土器の総点数は、1,766点を数えるのみにすぎない。そのうちの1,748点が加曾利E式期後半に属するもので占められていることが確認できた。土器は小片の状態で検出されたものがほとんどで、全体の文様構成の窺えるものは、2軒の堅穴住居跡内より検出された数点を除くと皆無に等しい。そのため1,748点の加曾利E式土器については、地文における施文原体の観察を行うことにした(第61図)。地文を観察できたもののうち最も多く用いられているものは単節繩文RLで、601点(34.4%)を占める。次に多いものは、単節繩文LR317点(18.1%)で、単節繩文を原体として用いたものが918点(52.5%)と全体の半数以上を占めている。次に地文に繩文の認められる1,087点のうち、複雑な繩文原体の出発点とも言える“0段の条”をもとに分類すると、6.5:3.5でr撚りを基本とするものが優位を占めている。単節繩文を施文原体とするものが多いであろうことはある程度予想されたが、その他としたもの中に、前々段反燃をはじめ、前々段合撚や結束繩文等を施文原体としたものを確認できたことは1つの収穫であった。本来ならここで各遺構間における施文原体組成の差から、時期差、地域差へと止揚していくべきであるが、土器生産に携わった人間の個人的な癖や、それを制約するような集団内での規制、土器表面を構成する文様要素としての地文の使い分け等、土器の表面に施された地文としての繩文原体の観察から、繩文社会復原への1アプローチの方向性を指摘するに留める。

土器型式としての加曾利E式は、関東地方における縄文時代中期後葉に位置付けられ、型式細分における「混乱の研究史」が指摘されて久しい。近年の研究動向の中で、現在の行政区画を単位とした集成が盛んに行われ、単位内における縄文の再検討はもちろん、単位間相互における比較検討をすることにより、次第に統一された見解基準に基づいた型式細分が編まれようとしているが、現状では各単位間に生じている微妙な差異を消去しきれていない事

実も否めない。もっとも、各細分の編年の中での前後関係の捉え方は概ね一致していることから、本書では加曾利E式に一切の細分記号を付さずに使用していることを旨及しておきたい。

弥生時代

今回の調査では變形土器が1点検出されただけで、遺構は検出されなかった。變形土器は破片の状態で出土し、總て接合したが、頸部から胴上半部にかけてしか遺存していない。口縁部の形態、口縁部から頸部にかけての輪積痕の有無など不明な点も多いが、胴部に施文された付加条繩文と頸部に発達した無文帯からは、南関東の宮ノ台式末期から久ヶ原式にかけての時期に対比される所謂「印旛・手賀沼系式土器」の特徴が看取されよう。

遺物の検出された1A93グリッドは、調査区の西端に位置し、黒色土の厚い堆積から澗れ谷の存在を想起させた西側調査区域外の直近にあたる。今回の調査では、台地上には該期の集落の存否は捉えられなかつたが、本遺跡の属する横橋谷水系宮野木支谷の最奥部付近には宮ノ台式期の竪穴住居跡を検出した本郷向遺跡があり、本水系に発達した沖積低地は、舌状台地下に拡がる低位水田面として弥生時代中期にまで遡る利用が考えられよう。今回出土した土器は、弥生時代中期末から後期への継続的な沖積低地の水田利用の可能性を示唆するものとなろう。

古墳時代

該期の遺構としては、竪穴住居跡5軒と土塼4基が検出された。

竪穴住居跡で完掘できたものは5号住居跡の1軒のみで、他は後世の擾乱等による損壊を受けたもの、或いは調査区域外に拡がりをもつもの等、遺構の検出状態は良くない。住居跡の平面形態は總て方形を基調とするもので、3号住居跡が最も正方形に近い。規模的に最大のものは、1辺6m以上を測る4号住居跡、最小のものは長軸推定3.45m、短軸3.16mを測る7号住居跡である。主柱穴と思われるピットの位置関係の捉えられたものは、4号住居跡と5号住居跡の2軒のみで、4号住居跡は対角線上に位置する4か所に、また5号住居跡は対角線上よりやや偏在した4か所と、偏った側と対応する壁際には1か所設けられている。他の3軒の住居跡については、3号住居跡のように、床面に柱穴はおろか、炉址や周溝等内部施設及び外部施設等も検出できず、住居址としての機能すら疑問視されるものもあるが、床面にピットが穿たれてはいるものの、柱穴を想定し得るものもつものはない。周溝は、4号住居跡と6号住居跡の2軒において壁直下に全周するものと思われるが、他のものには全く存在していない。炉址は、唯一全掘された5号住居跡のみに検出された。他には住居プランの中央部を貫く攪乱溝によって破壊されてしまったと思われる4号住居跡、炉址にはならなかつたものの僅かに焼土の集中部分が検出された6号住居跡を除けば、その痕跡すら検出することはできなかつた。また、火災を受けた被災住居を想定できるものに4号住居跡と5号住居跡の2軒がある。

土壙は、出土遺物から明確に該期の遺構として掲げられる3A号土壙、4号土壙、5号土壙と、決定的な遺物には欠けるが覆土中に堆積していた貝層の貝類組成及び規模等から判断した6号土壙の4基がある。平面形態は、6号土壙は不整構円形を呈するが、他は比較的形の整った円形を基調とするものである。覆土中に貝層の堆積をみるものには、3A号土壙、4号土壙、6号土壙があり、4号土壙の貝層直上には焼土層の堆積もみられる。底面にピットの穿たれたものには、3A号土壙、5号土壙、6号土壙があり、各々1か所、2か所、5か所のピットを有している。とりわけ6号土壙のピットは、壁直下の4隅に各1か所ずつと、北壁寄りのところに直径20cmを測るものを1か所配するもので、検出状況からのみではどのような目的、或いは機能を有していたのか不明であるが、上屋構造及び何らかの施設の存在を考える上で興味深いものである。

次に、遺構内より検出された数少ない復元可能な土器をもとに、今回の調査区における各遺構の変遷を略観してみたい。該期の遺構中、最も早い時期の所産であると思われるが7号住居跡で、次に5号住居跡・6号住居跡、さらに、3A号土壙、5号土壙が続き、最後に構築されたのが4号土壙となろう。該期における小中台遺跡は、土師器の分類に応じれば、五領期終末段階に始期が求められ、和泉期を主体とした居住域的利用がなされた後、人骨など一義的に裏付ける資料の出土はみていらないものの、5号土壙にみられるような遺物の出土状況を勘案すると、鬼高期最古段階に至る墓域的利用の景観を再現することができるかもしれない。

奈良・平安時代以降

今回の調査では、明らかに該期に属すると思われる遺構は検出されなかった。但し、遺物は全く出土していないものの、1号墳と13号土壙との位置関係が微妙な関わりをもっている可能性も否めない。直径約18mの円墳の存在を推定した1号墳は、その大部分が調査区域外に延びており、調査することのできたのは周溝の一部分にすぎない。一方、13号土壙と同様の形態をとる土壙は、本例をはじめ遺物の検出されないものがほとんどであるが、数少ない伴出遺物のある例の検討から8世紀後半の年代が与えられている。両者の間は約6mの距離をおくだけであり、13号土壙が1号墳の外部主体部と捉えることができるならば、1号墳と13号土壙は該期の遺構となる可能性を指摘しておきたい。

写 真 図 版

昭和3年、大日本帝國陸地測量部發行
検見川、稻毛を縮小・編集して使用した。

図版目次

- 図版 1 遺跡周辺の航空写真 (1/10,000)
- 図版 2 1. 調査前近景 (西から)
2. 調査前近景 (東から)
3~6. 確認調査風景
- 図版 3 先土器時代遺物出土状況
1. 第1文化層第2ブロック
2. 第1文化層第3ブロック
3. 第2文化層第1ブロック
- 図版 4 第1文化層第1・2ブロック出土遺物(1)
- 図版 5 1. 第1文化層第1・2ブロック出土遺物(2)
2. 第1文化層第3ブロック出土遺物(1)
- 図版 6 1. 第1文化層第3ブロック出土遺物(2)
2. 第2文化層第1ブロック出土遺物(1)
- 図版 7 第2文化層第1ブロック出土遺物(2)
- 図版 8 1. 1号住居跡
2. 1号住居跡遺物出土状況
3. 1号住居跡炉
- 図版 9 1. 2号住居跡
2. 2号住居跡炉内貝層堆積状況
3. 2号住居跡埋甕
4. 4号住居跡
5~6. 調査風景
- 図版10 1. 3号住居跡, 1号土壤
2. 5号住居跡
3. 5号住居跡遺物出土状況
- 図版11 1~2. 5号住居跡遺物出土状況
3. 6号住居跡
4. 6号住居跡遺物出土状況
5. 7号住居跡遺物出土状況
6. 7号住居跡
- 図版12 1. 2号土壤
2. 8号土壤
3. 3A・B号土壤
4. 3A号土壤遺物出土状況
5. 4号土壤
6. 4号土壤遺物出土状況
7. 6号土壤
8. 6号土壤遺物出土状況
9. 5号土壤
10. 5号土壤遺物出土状況
11. 12A・B号土壤
- 図版13 1. 9号土壤
2. 10A・B号土壤
3. 13号土壤
4. 11号土壤
5. 1号墳
6. 1号墳周溝堆積状況
- 図版14 遺構内出土土器(1)
- 図版15 遺構内出土土器(2)・石器
- 図版16 1号住居跡出土土器(1)
- 図版17 1. 2号住居跡出土土器
2~3. 1号土壤出土土器
4. 2号土壤出土土器
- 図版18 包含層出土土器(1)
- 図版19 包含層出土土器(2)
- 図版20 1. 包含層出土土器(3)
2. 土製品
3. 1号住居跡出土土器(2)
- 図版21 遺構内出土土器(3)
- 図版22 遺構内出土土器(4)
- 図版23 遺構内出土土器(5)
- 図版24 包含層出土遺物
- 図版25 1. 石器・土製品・鉄製品
2. 泥面子
- 図版26 自然遺物(1)
- 図版27 自然遺物(2)

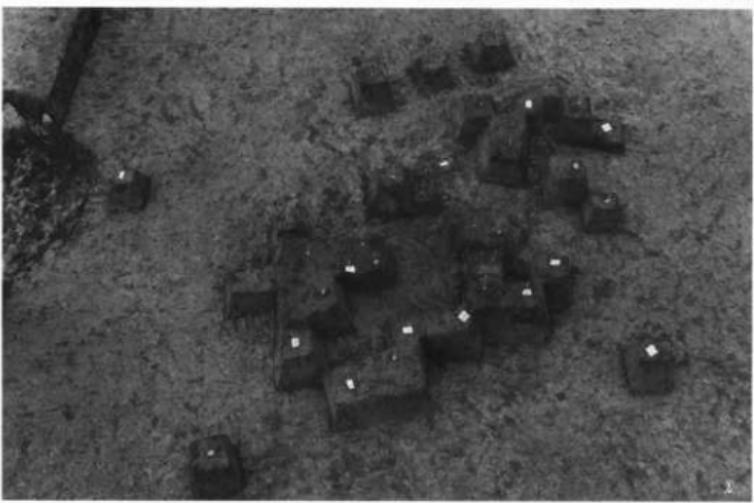
小中古野町



1. 調査前近景(西から)

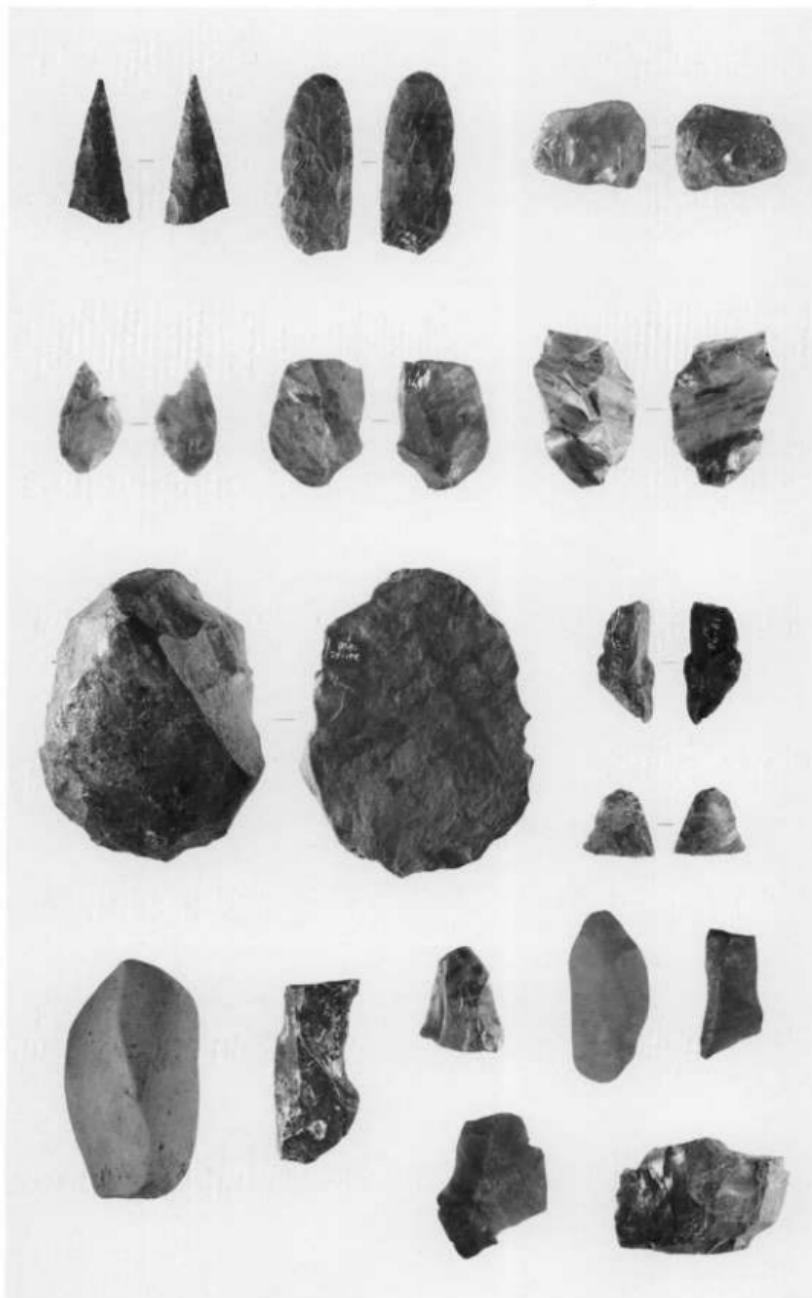
2. 調査前近景(東から)

3~6. 確認調査風景



先土器時代遺物出土状況

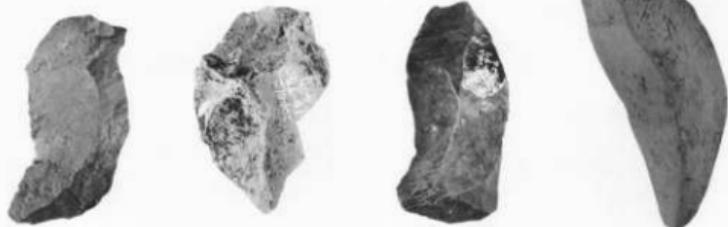
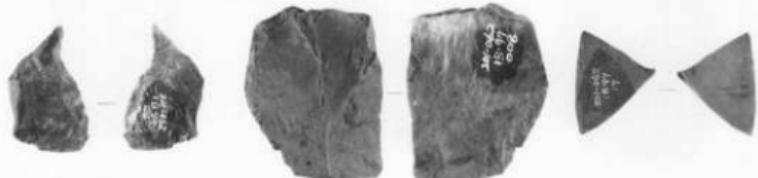
1. 第1文化層第2ブロック
2. 第1文化層第3ブロック
3. 第2文化層第1ブロック



第1文化層第1・2ブロック出土遺物(1)



1



2

1. 第1文化層第1・2ブロック出土遺物(2)
2. 第1文化層第3ブロック出土遺物(1)



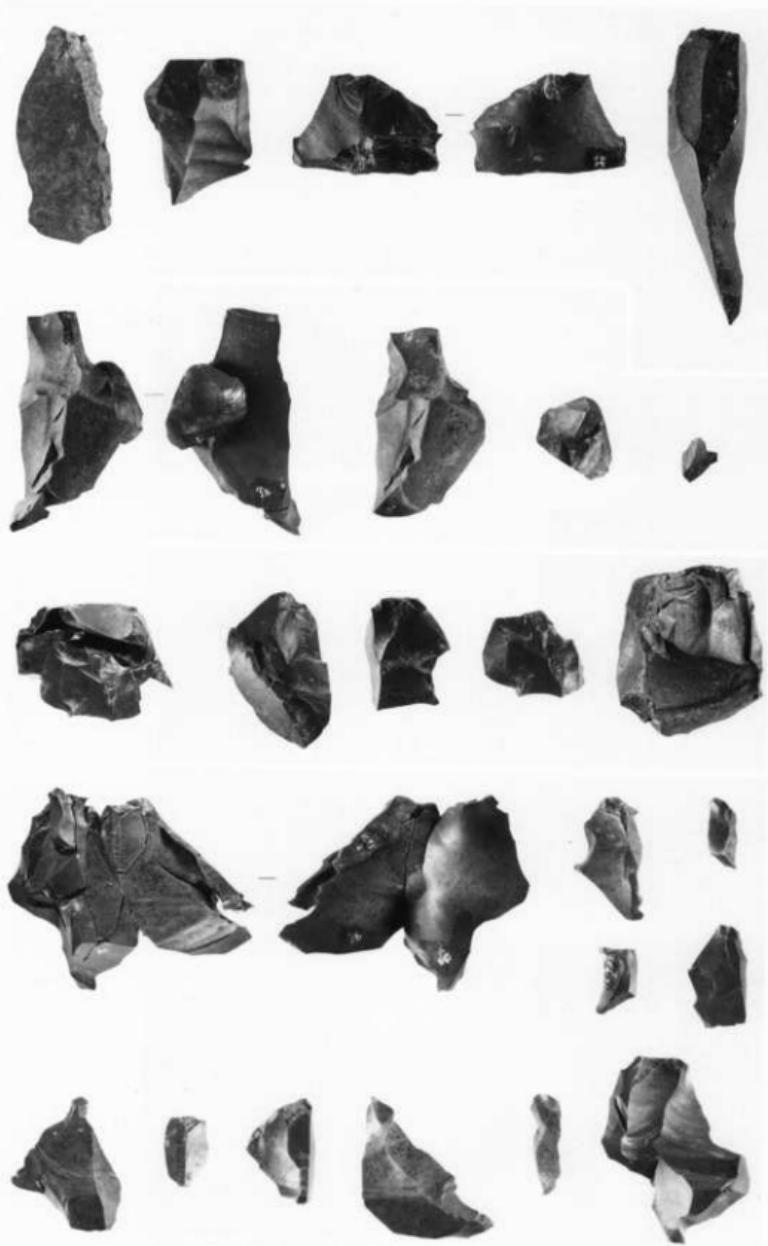
1



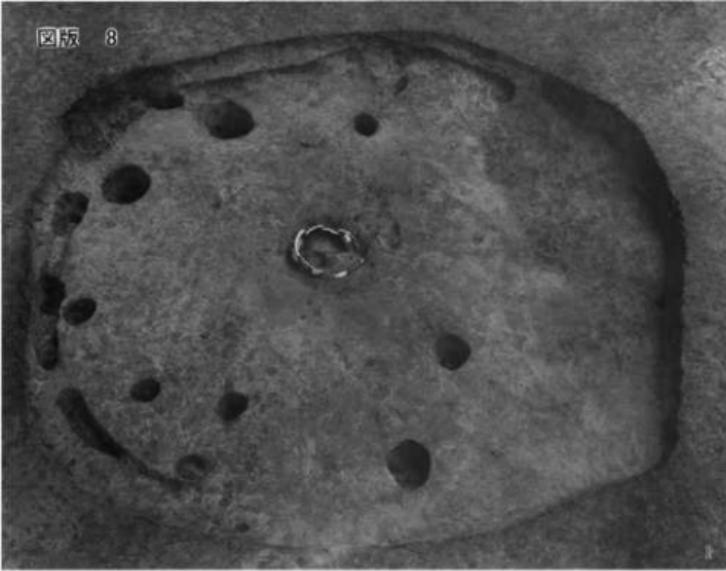
2

1. 第1文化層第3ブロック出土遺物(2)

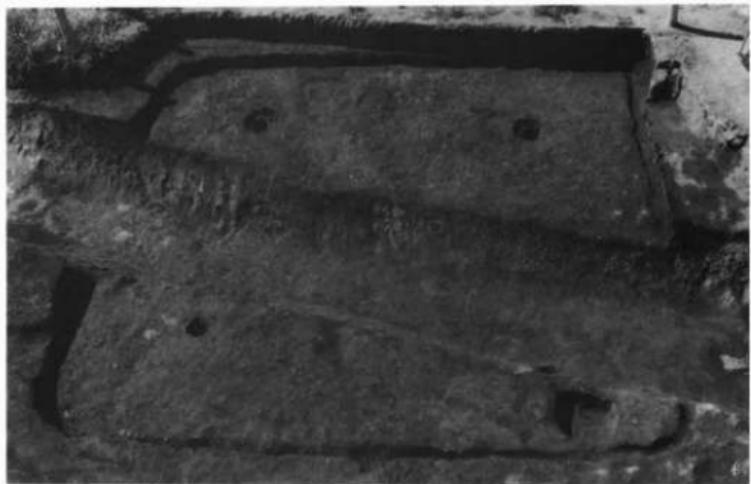
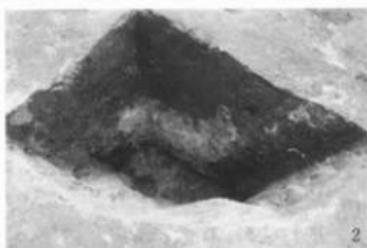
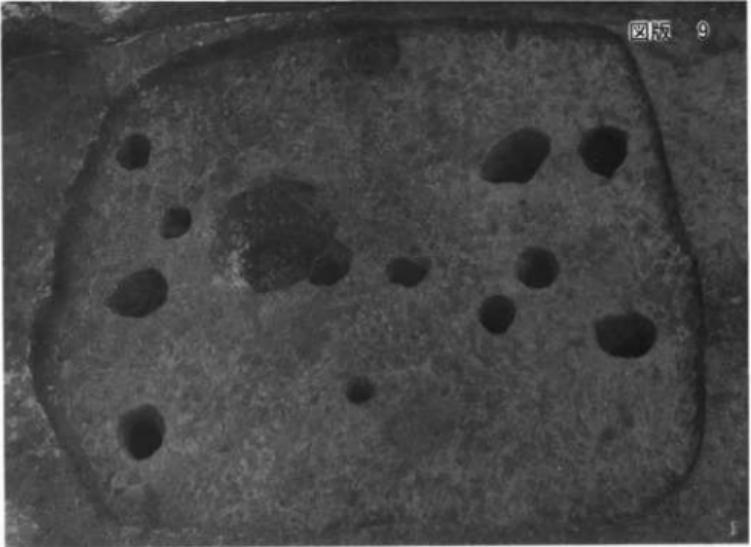
2. 第2文化層第1ブロック出土遺物(1)



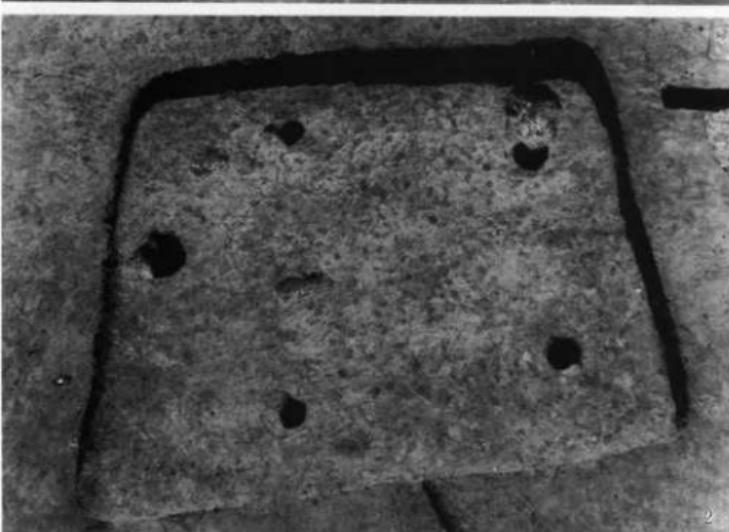
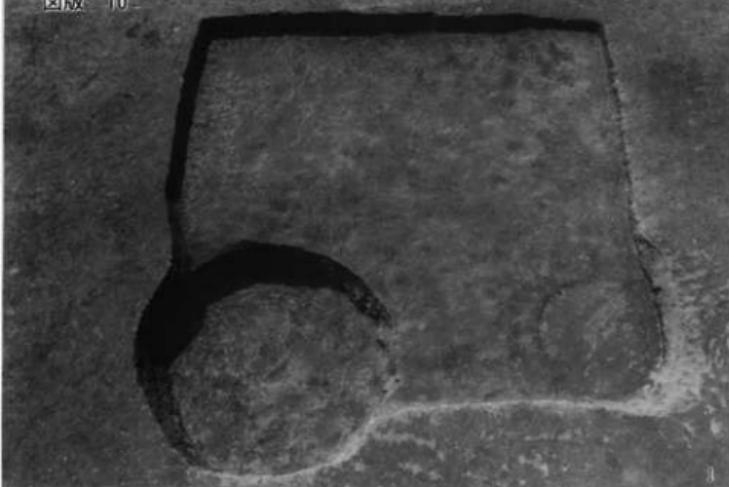
第2文化層第3ブロック出土遺物(2)



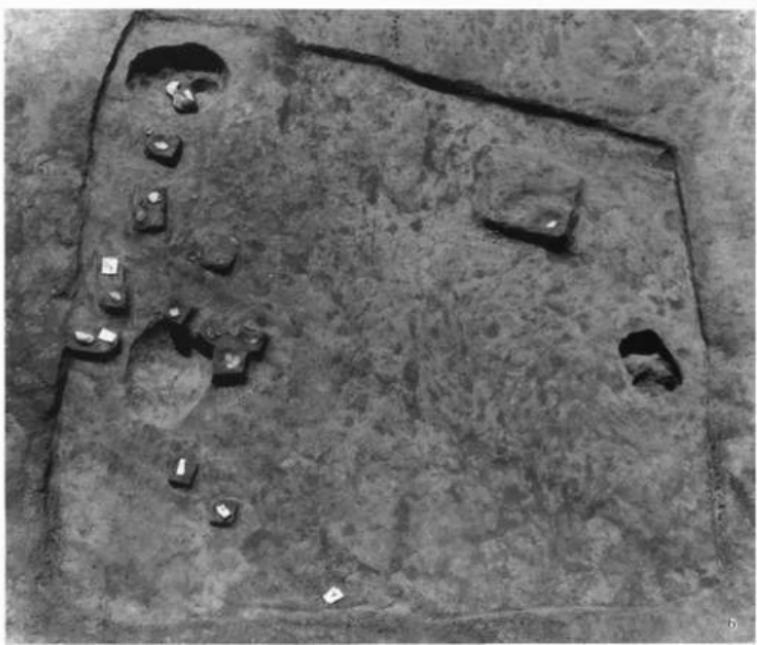
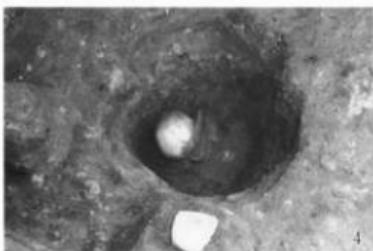
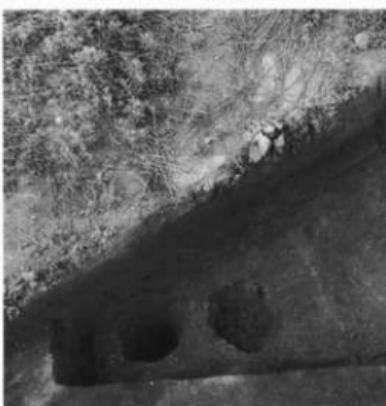
1. 1号住居跡
2. 1号住居跡遺物出土状況
3. 1号住居跡



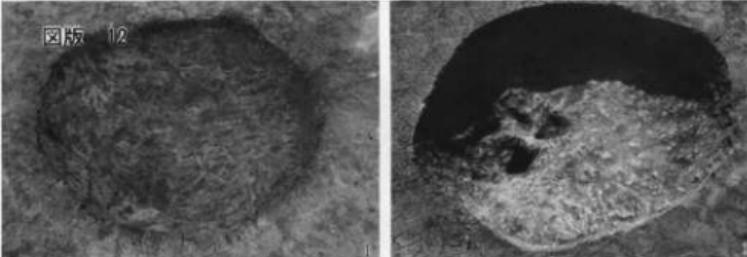
1. 2号住居跡
2. 2号住居跡
炉内貝層堆積状況
3. 2号住居跡埋甕
4. 4号住居跡
- 5-6. 調査風景



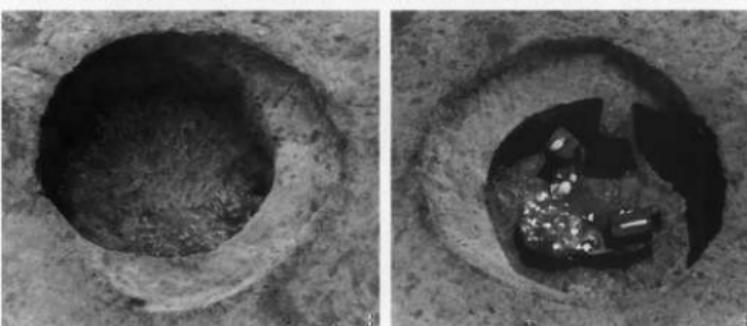
1. 3号住居跡, 1号土壤
2. 5号住居跡
3. 5号住居跡遺物出土状況



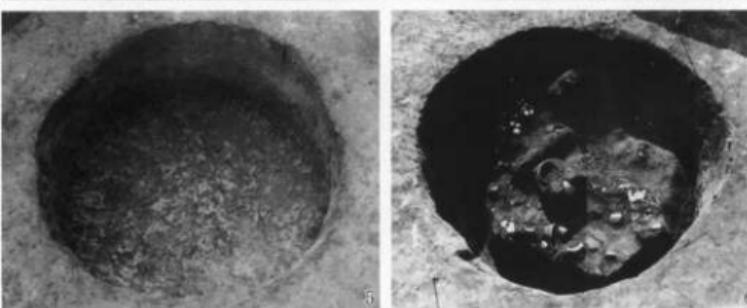
1・2. 5号住居跡遺物出土状況
3. 6号住居跡
4. 6号住居跡遺物出土状況
5. 7号住居跡遺物出土状況
6. 7号住居跡



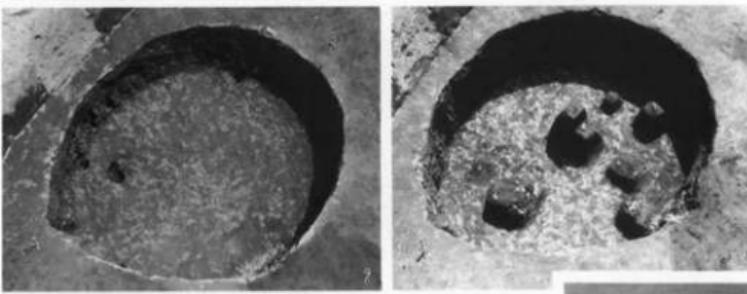
1



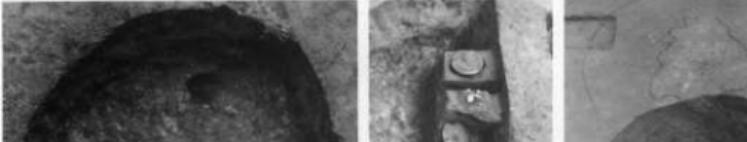
2



3



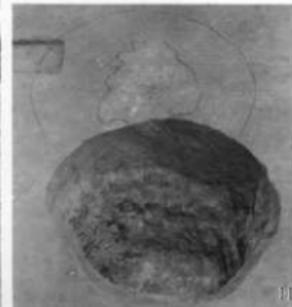
4



5

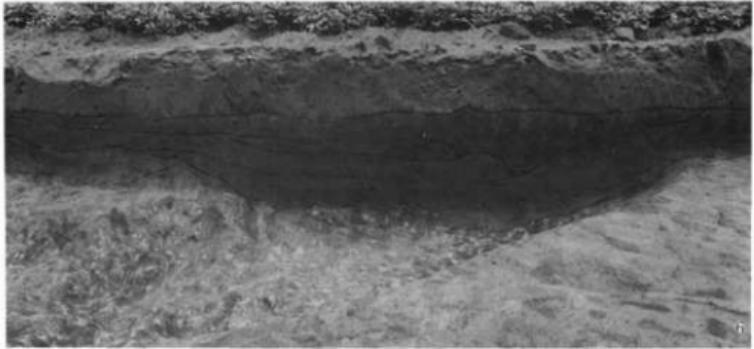
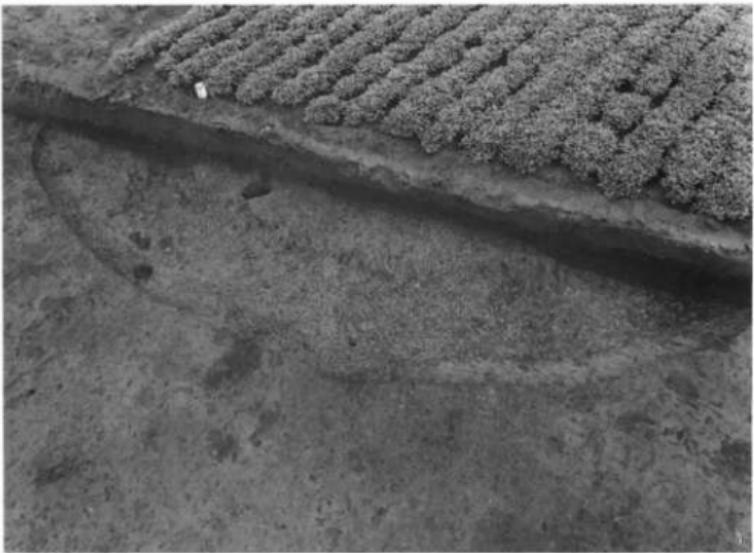
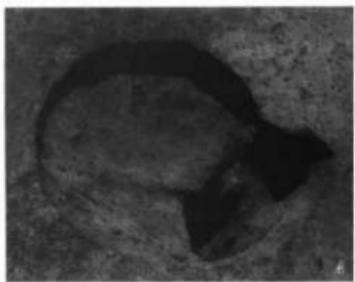
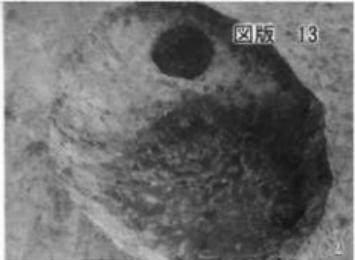
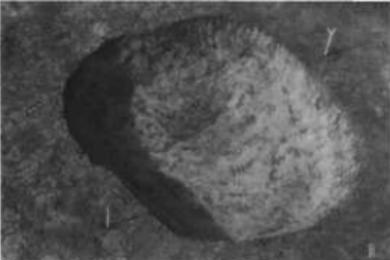


6



7

- 1. 2号土壤
- 2. 8号土壤
- 3. 3A・B号土壤
- 4. 3A号土壤
遺物出土状況
- 5. 4号土壤
- 6. 4号土壤
遺物出土状況
- 7. 6号土壤
- 8. 6号土壤
遺物出土状況
- 9. 5号土壤
- 10. 5号土壤
遺物出土状況
- 11. 12A・B号土壤



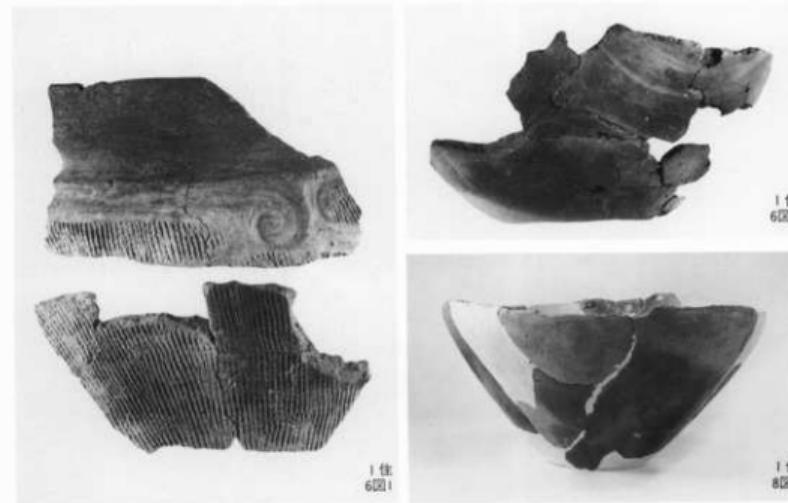
1. 9号土壤
2. 10A・B号土壤
3. 13号土壤
4. 11号土壤
5. 1号墳
6. 1号墳周溝堆積状況



1住
7図4



1住
7図5



1住
6図1

1住
8図7

遺構内出土土器(1)

1住
6回21住
6回62住
12回12住
12回21住
10回38

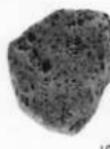
49回3

2住
13回10

49回1

1住
10回39

49回4

1住
10回411住
10回40

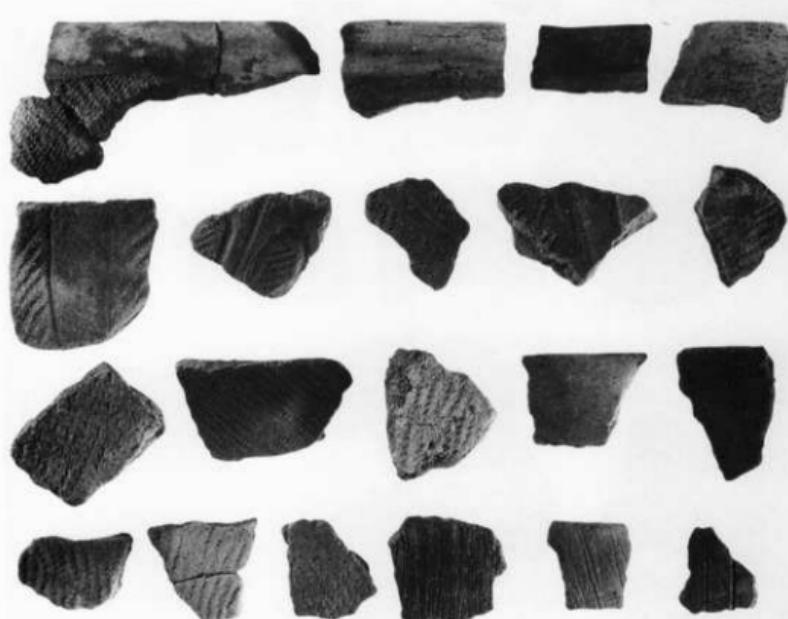
49回2



1号住居跡出土土器(1)



1



2

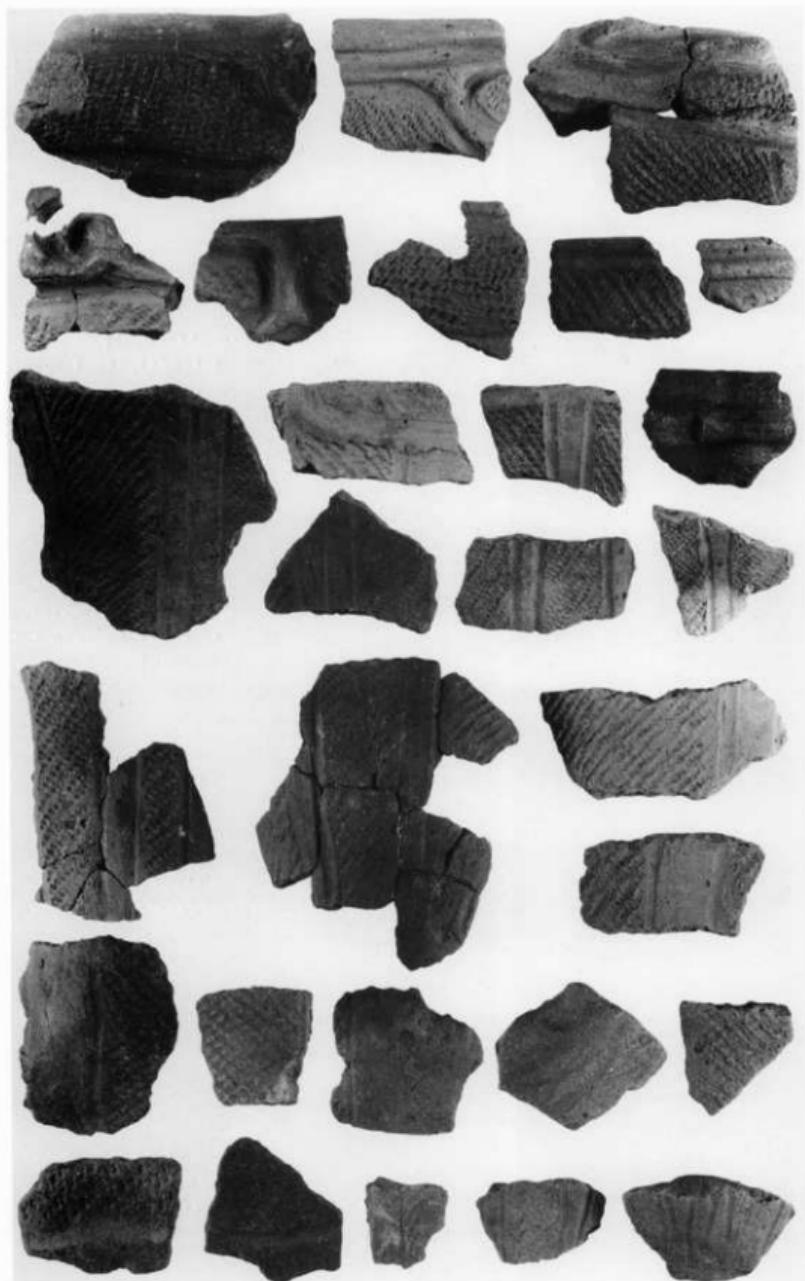


3

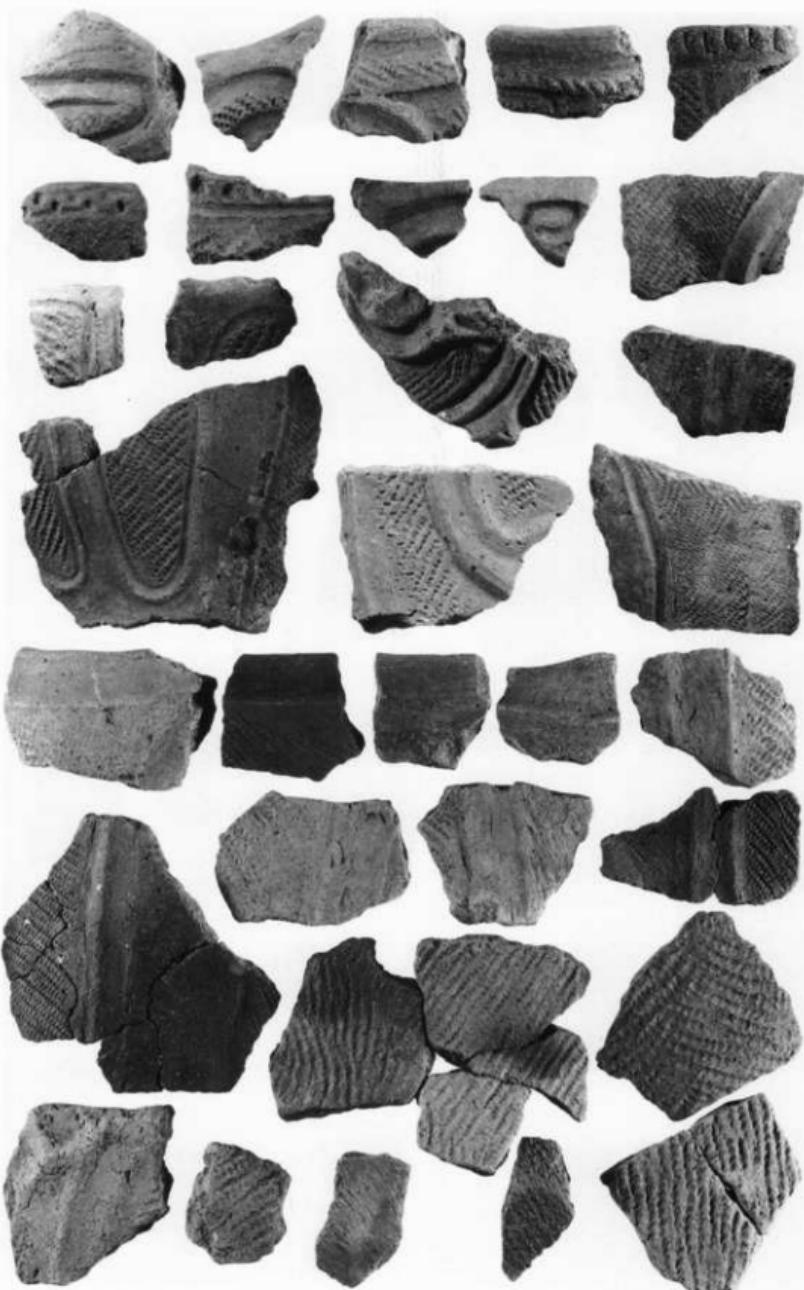


4

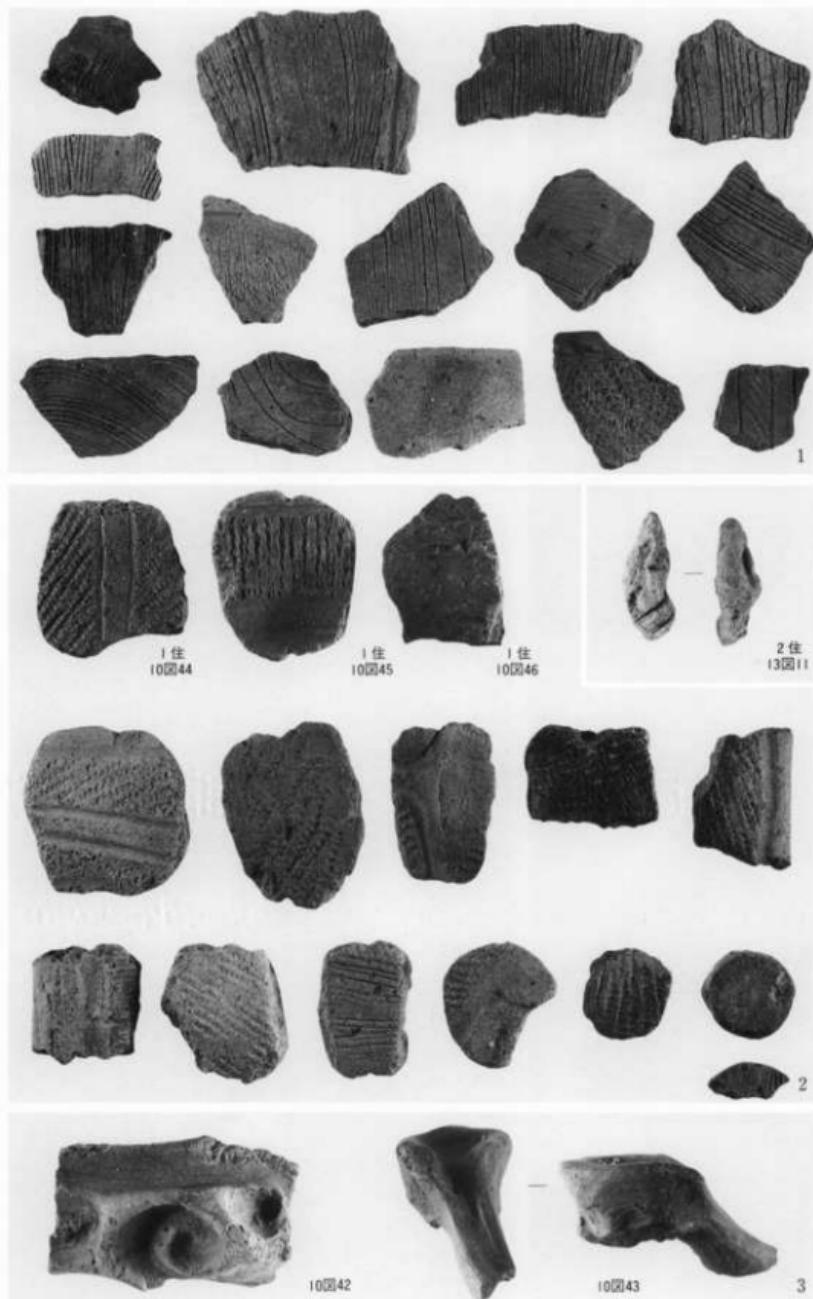
1. 2号住居跡出土土器
2・3. 1号土壤出土土器
4. 2号土壤出土土器



包含層出土土器(1)



包含层出土土器(2)



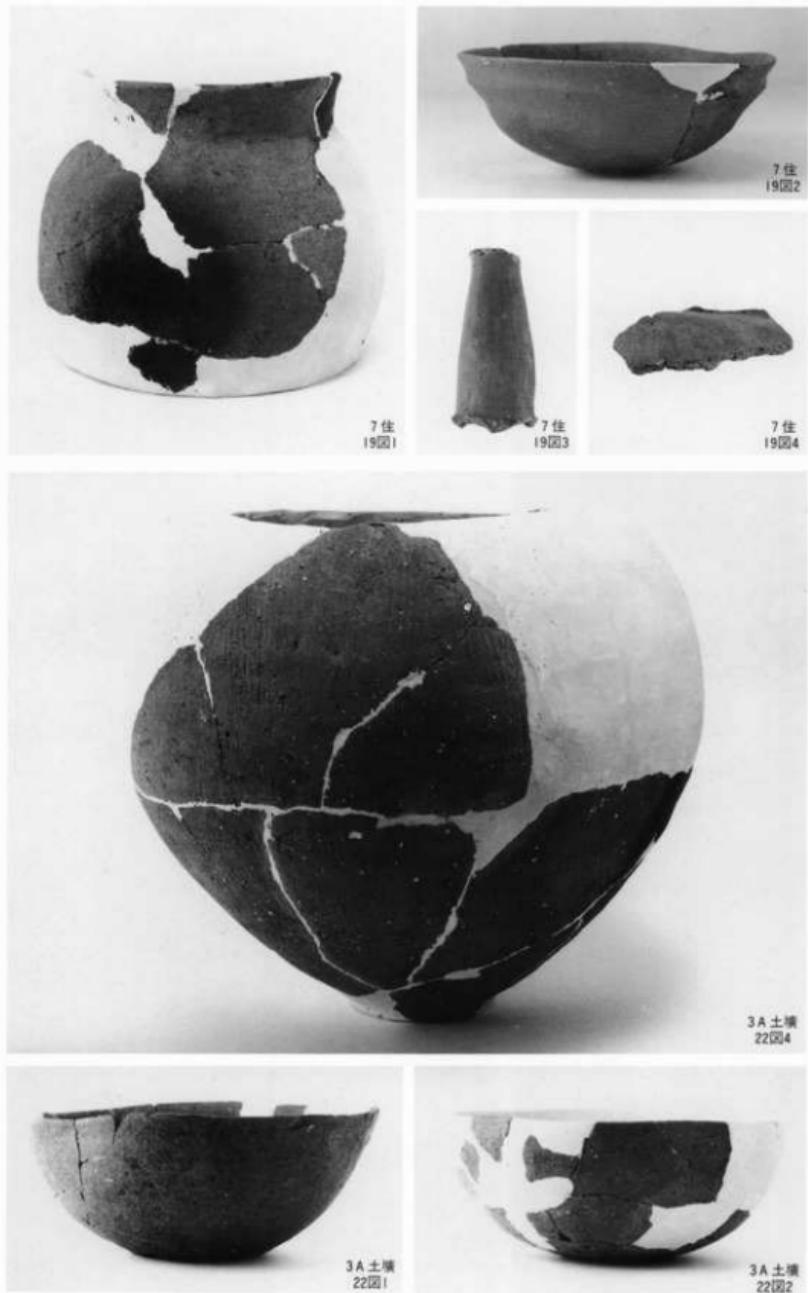
1. 包含層出土土器(3)

2. 土製品

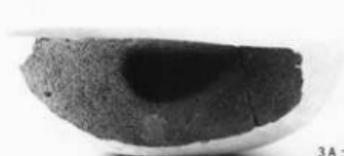
3. 1号住居跡出土土器(2)

5住
17図15住
17図25住
17図45住
17図36住
18図16住
18図26住
18図3

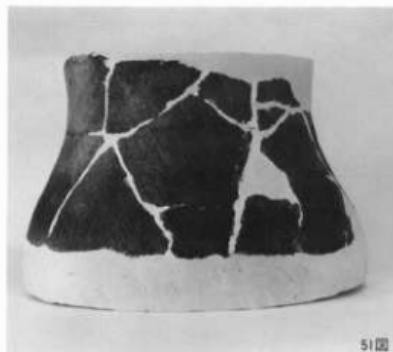
遺構内出土土器(3)



遺構内出土土器(4)



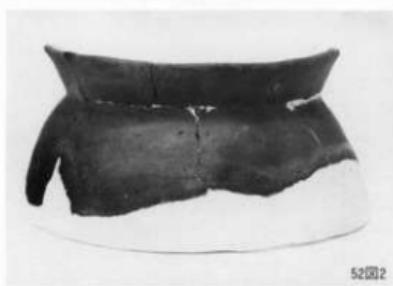
遺構内出土土器(5)



51图



52图1



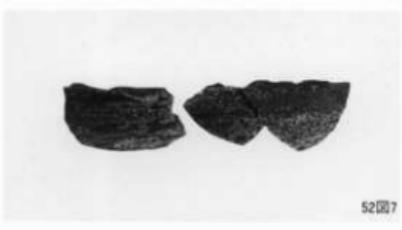
52图2



52图4



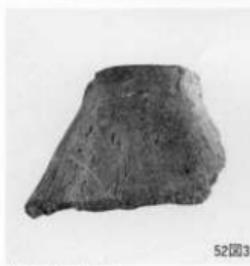
52图6



52图7



52图5



52图3



52图8



52图9

包含层出土遗物

3A 土器
22図5

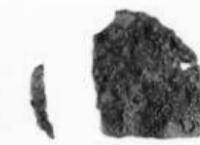
52図10

3住
19図1

52図11



52図12

7住
19図5~106住
18図4

52図13



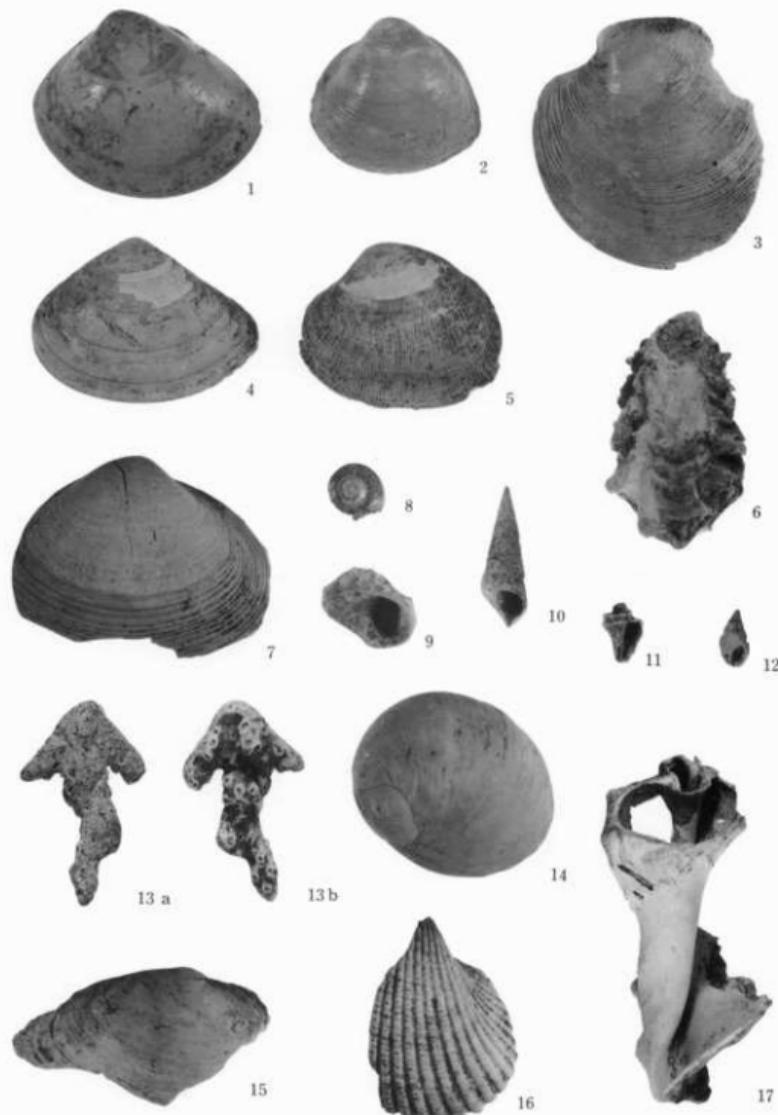
52図14

1

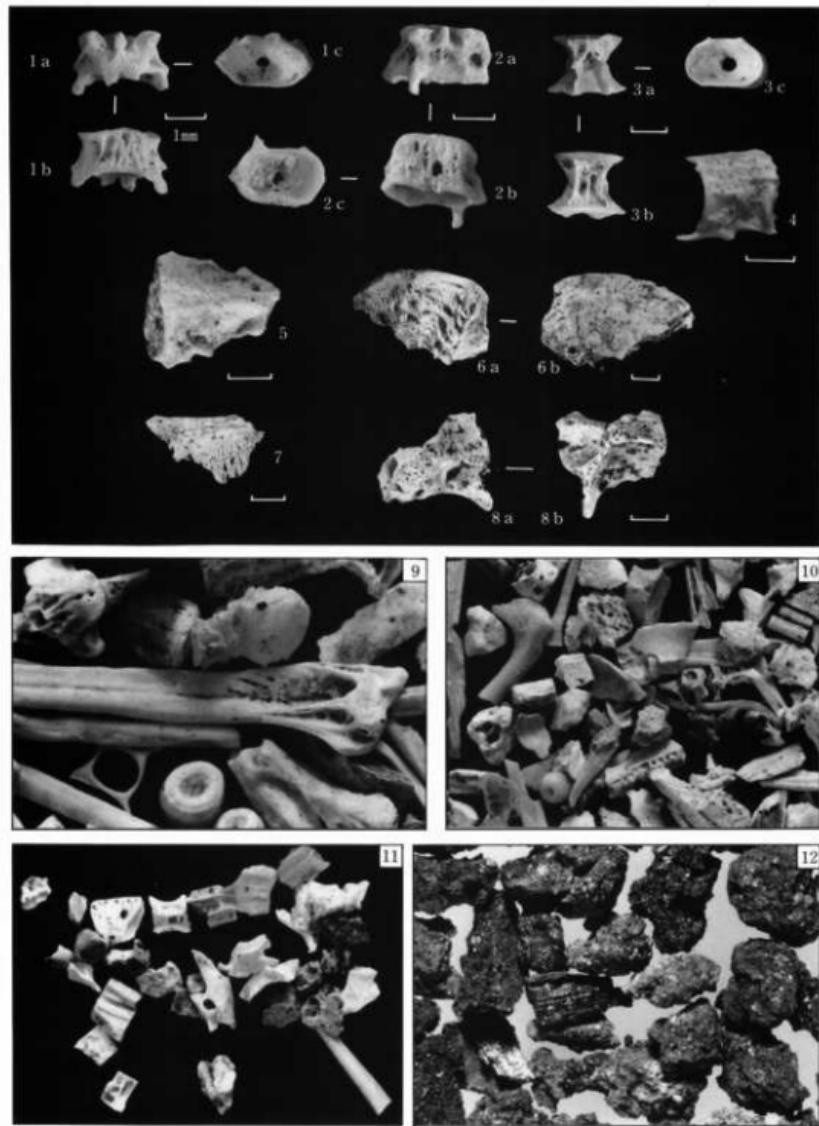


2

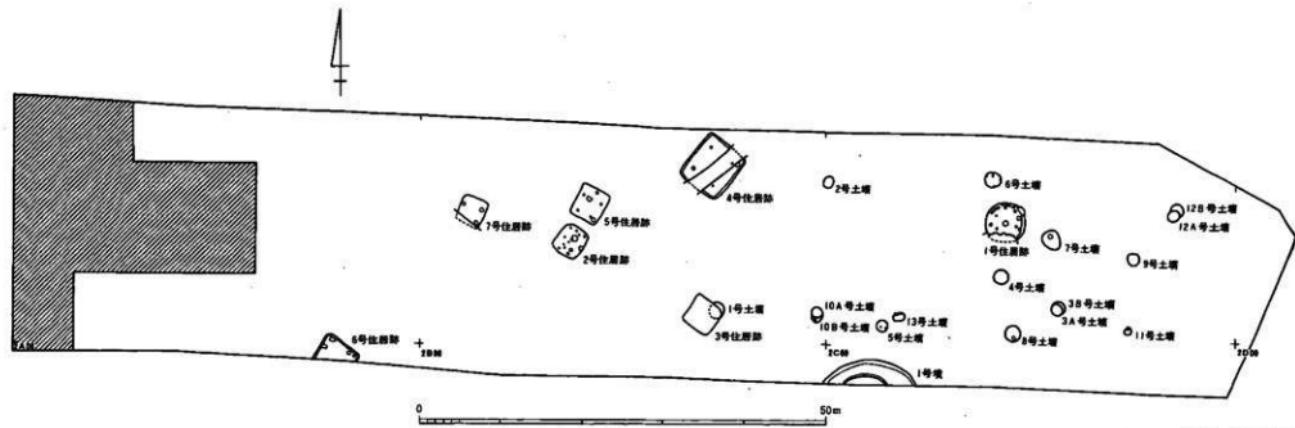
1. 石器・土製品・鉄製品
2. 泥面子



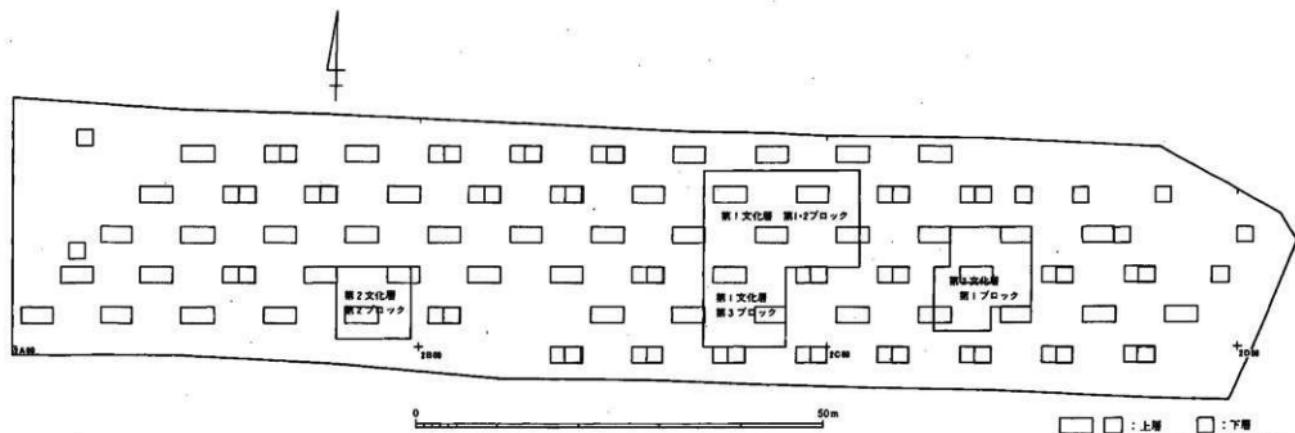
自然遺物(1) 1. ハマグリ(1号住居跡)×1, 2. シオフキ(同)×0.8, 3. カガミガイ(同)×0.8, 4. オキアサリ(同)×0.8, 5. アサリ(同)×1, 6. マガキ(同)×0.8, 7. バカガイ(同)×0.8, 8. イボキサゴ(同)×0.8, 9. スガイ(同)×1.2, 10. ユミニナ(同)×0.8, 11. アカニシ(同)×0.6, 12. アラムシロ(同)×0.6, 13a. キクメイシモドキ裏面(同)×1, 13b. 同表面, 14. ツメガイ(4号土壤)×0.8, 15. オオノガイ(6号土壤)×0.6, 16. サルボウ(3号土壤)×0.8, 17. アカニシ(同)×0.6



自然遺物(2) 2号住居跡炉址内出土資料 1 a : マイワシ第1脊椎背面, 1 b : 同腹面, 1 c : 同後面, 2 a : マイワシ第2脊椎背面, 2 b : 同腹面, 2 c : 同後面, 3 a : ニシン科種不明腹椎背面, 3 b : 同腹面, 3 c : 同後面, 4 : ニシン科種不明尾椎側面, 5 : 真骨類A椎体腹面, 6 a : 真骨類B椎体外側面, 6 b : 同内面, 7 : 真骨類B'椎体外側面, 8 a : 真骨類C椎体右側面, 8 b : 同腹面, 9 : 灰層1.0mmメッシュ分離物(部分)×6, 10 : 同0.5mmメッシュ分離物(部分)×6, 11 : 炭化層0.5mmメッシュ分離物×6, 12 : 同1.0mmメッシュ分離物(部分)×6



第62図 遺構分布図



第63図 確認調査グリッド及び先土器時代本調査区配置図

千葉市小中台遺跡

千葉都市計画道路3・4・43号磯辺茂呂町線

建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書2

昭和62年3月26日 印刷

昭和62年3月31日 発行

発 行 千 葉 県 都 市 部

千葉市市場町1番1号

編 集 財団法人 千葉県文化財センター

千葉市葛城2丁目10番1号

印 刷 有限会社 正 文 社

千葉市都町2丁目5番5号

本報告書は中性紙を使用しています。

[本文 三菱製紙 金像 90kg]
[図版 三菱製紙 特優アート 135kg]